

533
67

THE
CHARACTER OF PAUL
BY
CHARLES EDWARD JEFFERSON

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



ジエフアソン原著
中西貞雄譯

パウロの人格

基督教興文協會發行

大正
14.6.23
内交

533-67

緒
言

未だ曾て講演したことは無いが、この書はもろく、講演の書である。年を経るにつれて、私は今述べるこゝが出来る以上にもつと多くの講演をなし得ると思ふ。約十五年前「イエスの人格」なる講演の書を世に出してより、いつかはそれと駢ぶ「パウロの人格」を發表したいは私の期してゐたところである。三十餘年の間彼は私の愛好した英雄中の一人であつた。この間ほんご断える時なく私は彼と生活してゐた。十三年の間私は毎年夏中彼の書簡の一つを携へて往つて特に研究をする事にしてゐた。數ヶ月の休暇を通じて彼が私の日々の友であつた。私は繰り返し、繰り返し彼の書簡を読んだものである。書簡中に見出すこゝの出来る、價值あるものはすべて読み、その内容を考察し、その暗示せられた問題を熟考し、著者の靈と交はつて、それについて講演を準備し、來るべき年を通じて、それを研究する人々に資する爲め許多の問題表を作るに至つた。かくしてパウロは私にまつては、尙一層生ける人となつたのである。私はかつて生存した人々の中誰を知るよりも

緒
言

より以上にパウロを知ると思ふ。私がこれを書き初めたのは一千九百十六年であつたが、當時進行中であつた大戦の爲に取り紛れ、戦後は仕事に忙殺されて目的を達するこゝが出来ずに今日に至つた次第である。今や私は遂に數年間心に横つてゐた材料に形を與へた。一つは傳道者たちの爲め、彼等が接する人々に今一層しげくパウロに就いて語るこゝあらんを期し、なほ一つは信徒たちが自分でパウロの書簡を研究し、彼のうちに力に喜悅の盡くるこゝなき源を見出す様力を添へんこゝを期して私は筆を執つたのである。

チャールス・エドワルド・ジェファソン

一千九百二十三年九月一日

凡 例

西に太平洋をひかへ、東に一連のロッキーマウンテンを隔て、我ら十萬は農園に漁場に努力してゐる。希望は無限、境遇は有限、この間の橋渡をなすものたゞ一つ、不滅の人格が示現し得る世界あるのみである。パウロがダマスコの門に近く永遠有徳のキリストを仰いで彼の世界は新なるを得たのであるが、今眞にパウロを識る人よりパウロを示されて我らは二千年前限られたる地球に生存し、その限られた言語を通じて永遠有徳の世界に彼と交はり得る特權を與へられたのである。生ける永遠の人格を紹介したい、これが私の譯を試みた動機である。

書中ジェファソン博士の引證せられた聖句が時に簡略に過ぎ、なほそれ以上にその使用法が自由に、言ひ換へれば聖書の意を汲むに忠實にして字句の形を顧みられざるふし多き爲め適確なる索引を附するには可成り困難であつた。注意のこゝかないふしもあるかと思ふ。大方の御諒察を乞ふ。

本書の譯を始めたのは四月中旬であつた。偶々五月中わが親友にして當時青山學院教授なる松本

卓夫君が渡米途上の寄港に接し、二十日居を共にして、その間に多大の奨励、助力を與へられたる事、譯者の衷心より感謝するところである。

一千九百二十四年十月十四日

夕陽の落ゆく彼方、遙かに故國同族の上に祝福饒

かならん事を祈りつゝ

カナダ・ヒー・シー州・ステアストーンにて

中西貞雄

目次

第一章 人間としてのパウロ……………一

第二章 我等の知るもの知らぬもの……………三

第三章 限りある能……………二五

第四章 同時代の人の眼に映じたるパウロ……………三六

第五章 彼れの誠實……………四四

第六章 彼れの正氣……………六一

第七章 彼れの脆弱……………七三

第八章 彼れの剛健……………八三

第九章 彼れの誇り……………九七

第十章 彼れの謙讓……………一〇九

第十一章 彼れの激情……………一二三

第十二章 彼れの忍従……………一三三

第十三章	彼れの勇氣	一四三
第十四章	彼れの禮節	一五四
第十五章	彼れの義憤	一六七
第十六章	彼れの柔和	一七九
第十七章	彼れの廣狹	一八二
第十八章	彼れの同情	二〇五
第十九章	彼れの感謝	二二七
第二十章	彼れの喜び	二三〇
第二十一章	彼れの信賴	二四四
第二十二章	彼れの望	二五八
第二十三章	彼れの愛	二六九
第二十四章	彼れの宗教心	二八二
第二十五章	彼れの愛らしさ	二九五
第二十六章	彼れの偉大さ	三〇七

第一章 人間としてのパウロ

私の所存はパウロの肖像を描かうとするのである。その靈魂の姿態を描寫するのであつて、その生涯の物語りをするのではない。それ故今は彼の思想を語らずに彼の氣質を語り、彼の教義を描いて、平素の氣分を語り、思想の系統には言及せず、その人格を述べようと思ふ。人格は神の啓示の媒をなすものである。神は單に人の理知の働きを通して、人語ると思へば誤りである。神はまた人の行爲を通して語る。人の道德的特質は、永遠者がよつて以て己が人格を企圖を表示する一個の機關であらねばならぬ。我等は天が偉大なる人々の行ひや苦難を通して、何を我等人間に要求し給ふかを學ぶのである。イエスが最も高潮せる氣分を以て人々に面せられた時、口にされた言葉は

「これを信ぜよ」それをうけよ」を謂ふのではなく、實に「我に従へ」(可二の一四)であつた。パウロも同じ高潮の氣分にある時は敢て人間墮落の理論や、イエスの死の解明等をして人に中つたのではなく、熱烈な訓戒の中に靈魂を吐露して「われ汝に求む、汝われに倣ふものみなれ」(腓三の一

七)「我キリストに倣ふ如く汝等我に倣へ」(哥前一一の一)「なんぢら我より學びしところ、受けしところ、聞きしところ、見しところを皆おこなへ」(ピリピ四の九)と語るのであつた。我等は一般にパウロの書簡に就いて語るが、しかしパウロ自身が書簡であつてそれも人に知られ、凡ての人に讀まれねばならぬものである。

パウロは多く知られてゐない。總じてクリスチャンは彼について知る處がない。彼は一卷の書籍中にある名稱で、生きた人間はなつてゐない。神學的討議の青ざめたる領域に飛び交ふ映像であつてそのうちに血の氣はない。臺上の肖像ではあるが、人間の日々の要求を満足してくれるものではない。むしろクリスチャンの心からは遠く隔つて、かのギデオンやダビデの如き親好なく、ペテロやヨハネの如く愛好されない。彼に關しては他に比して多くのこゝが傳へられて居るが故に使徒中に於ても最も親炙さるべき人であるが、その實我々にまつて殆んご路傍の人の如くなつてゐる。我等の手にし得る範圍の考證の材料を活用したならば、古人のうちシセロを除いて、何人よりも我等に膾炙さるべきであり、又我等に與ふべき多くのものを所有してをつたのであるが、嘆かばしい事にはなほ我等は彼に關して無知である。

これについては學者たちにも一部の責任はある。それは彼等が冗漫な研究を堆積して普通信徒に

は近寄りも出來ぬ程に此使徒を圍ひの中に入れてしまつた爲である。由來幾千卷の書はパウロについて書かれた、そしてそれらの大部分は學者専門の書であつた。博識をもつてその書に重みをつけないうならパウロについて筆を執るは殆んご不可能のやうに見られてゐる。學者専門の書に云ふのは參考せられた著者の管々しい表を含んだ冗長な序文、各ページに附した脚註、其處此處から引用して本文に織込んだもの、普通人々の聽いたこゝもない書物の引例、パウロを一層謎にしてしまふやうな種々な不可思議な事柄を斷えず暗示するこゝ、發明な批評の溢れ出るのを吸ひこつてしまふ各章の終の譯註の附録、書物の終に議論せられた點、矛盾せる解釋を示して一聯の補填したるもの等からなつてゐて、これがパウロの書を手にする時に期待せられてをつた類のものである。

哲學的にならないならば彼について書くのは不可能のやうに見える。筆者の誰であるにか、はらず、大抵決まつて宗教史上に於けるパウロの位置、クリスト教の進化に於けるパウロのそれを論じてゐる。さもなければユダヤ教、パリサイ宗、ノスチック派、神祕派、ストイック派、新プラトニ派、パウロとの關係を論じ、或は又浩瀚にパウロニズムを書くのである。パウロニズムを書くのはパウロを書くよりも確かにより容易である。パウロの傳記を書くものも博いばかりで冗漫になつてしまふので、普通の讀者にはピツタリ來ない。パウロについて書くに云ふよりも彼が旅行し

た國々の説明や、彼が説教した町々の歴史をもつてそのページを埋めてゆくのである。パウロのこゝを書き始めても間もなく地理學、考古學、^{パルストロギー}發生學に迂り込んで往つて、普通の讀者はその深みに壓倒されてしまふ。残りの部分は書簡の解釋や年代の問題、確證、註釋、編輯のこゝ等に費されて、爲めに人は疲れ切つてパウロの生活を讀むこゝをやめてしまふのである。

第一世紀に、パウロに多くの害を加へた銅細工人があつたが、第十九世紀、二十世紀に害を齎したものは銅細工人ではなくて、博學な専門家や博識な學者や、學者的な註釋者、發明な神學者であつた。これらの人々が解釋、憶測、種々雑多の知識でパウロを掩うてゐる爲めに普通の人には彼を見出すこゝが出来ない。かくて彼は學者の専門になつて、普通人の英雄とはならないのである。

私は學者専門の書を書くまいと心を定めた。尤もこの書は専門家、學者の援けなくて書き得られぬので、私はそれらの人々の辛抱と努力に成つた調査研究に負ふこゝろ大なるものがあるけれども私がパウロを書かうとするのは、その神學者、哲學者、形而上論者、倫理學者、神祕家、ロマ市民、旅行者、雄辯家、傳道者、政治家、宣教師、使徒、牧師、教師たるパウロでなく、まつたく人としてパウロである。「聖パウロ」をだに書かうとするのではない。「聖」なる語は除くこゝろにしたい。これは聖なる語をもつてゐる人の面を覆うた言語上の面紗の類で、いさゝか厭なる感じを催さす語で

あつて、これを有つてゐる人、自ら聖者になれないこゝろを知る人との間に溝を作るものであらねばならぬ。我等は障害を取り除き、空隙を避けて進むこゝろにしよう。目的とするこゝろはパウロを我等に近づけるこゝろ、願ふこゝろは彼の心臓の鼓動を聞き彼の呼吸を聞き得るくらゐに彼を我々に近づけるこゝろである。

パウロは識られてゐない爲に好かれてゐない。人を好くにはまづ彼を識らねばならぬ。我等を最も援くる人々は我等の愛する人々である。もしパウロが我等を援けないならば畢竟我等が彼を愛せぬからである。ある者は彼を尊敬するけれども、彼にその心を與へようとしなない。ある者が彼を嫌ふのもつまりは彼を誤解するところより來るので、彼我の間に障壁を設けるのは我等の無智なるが故である。ある者は又子供のうちから彼に對して偏見を懷くやうになつてゐる。およそ家のうちで最も懶い書物はパウロの教義に關するものであつた。牧師の説教のうちで最も乾燥無味のものにはパウロに關するものであつて、我等が彼の書簡に讀み耽ける時に、その豫命、宿命、義待、聖化、教化、永劫の責罰等の語に接する爲に一層彼を嫌ふやうになる。誰かかゝる言葉を以て子供の心をさらへ得ようか？ 子供にこつてパウロは彼等の行き得ぬ世界に住む聖鬼の類であらう。我等の成長するにつれて彼が脱走した奴隸を返したり、集會した婦人たちに靜謐を強ひたりなきを見る時に一層好まし

くなくなる。あだかも奴隷所有者の友であり、婦人の権利の敵のやうである。後に至つては彼の名は神學的頑迷、呪咀と同意義の語になつたが、これはその論争と了解の困難な事を示すものであつて、我等は歴史を讀んでこの人の言語がいつれの時代に於ても狂熱家の糧であり、暴君の手にある闘斧であつた事を見出すのである。神學者等は彼の書簡を武器庫のやうに使用してそのうちから敵手を仆す爲めに武器を取出してゐた。かくの如くして彼の名は頑迷と云ふ臭氣、専制と云ふ惡臭を放つやうになつたのである。それは我等の心に於いて、獨斷説の悲劇と神學的論争の激情と結びつけられてゐる。暴君たちが彼の言を引用して企てたこと、頑迷者等が彼の權威に依頼してなしたること等に對して彼は責任を負はなければならぬとする。クリスト教會を累しその名譽を汚した諺からぬ混亂や、苦難に對して彼に責任があつたこと我々には見える。

人に對してかやうな見方は我等の限られた知識に基くものである。噂に依つて彼を判じ眞直ぐにほんごの彼自身に突き進んで行かなかつた。西洋諸國の大部分に、パウロは主としてジョンカルヴィンを通して知れた、それゆゑカルヴィン化せられたパウロは親しみの感じから餘程隔つてゐる言はなければならぬ。それ故にパウロを理解しようとするならばカルヴィンの「組織哲學」を閉ぢて、新約聖書を開かねばならぬ。ルナンはパウロの、君臨が既に終末に近づいてゐることを云ふけれども、それ

はジョンカルヴィンのパウロをいふのであつて、この佛蘭西學者の云ふ通り、カルピン化したパウロはまこと終末に近づいてゐる。されど、クリスト教に於けるカルヴィン流の解釋は、時代遅れのものである。それはイエスやパウロの根本的觀念に忠實でない。それが終に消滅すべきことは確實であるけれども新約聖書に於けるパウロの君臨が終末は思はれぬ。それは今始まつた處である。カルヴィンの流れを汲んだ神學者のページ中に見えるパウロの君臨は終末に近づいてゐるけれども、ピリピの書を書いたパウロの君臨はいままさに黎明を告ぐる處であつて、人たるパウロは今や始めて自らに歸へりつゝあるのである。彼は全世紀を通じて知られざる使徒であつたが、來るべき時代は從來認めなかつた眞の價值を正當に認めるであらう。「イエスに歸れ」は十九世紀の世界に強く明かに響いた鯨波であつた。「パウロに歸れ」は我等が現に生存する世紀を通じて響く叫びであらねばならぬ。須らく評論家、註釋者、各派の神學者、ジョンウエスレー、ジョンカルヴィン、ジョンノックス、オウガスチン、その他の初代の教父たちより離れて我等はまづパウロ自身に歸らなければならぬ。彼こそは彼自身の最も良き解説者である。我等は彼の生活の光によつて其教義を讀み、彼の人格を熟視してその神學を解説すべきものである。キリストの靈は彼のうちに異常なる程度に權化して居り、神の子の生命は彼の内に顯見されてゐる。彼自ら主張してゐるやうに、自分の苦難

をもつて世の救主の苦難を補ひ、その態度、氣質、先見、精神によつてキリストに於ける神の啓示を補つてゐる。新約聖書は我等の前に二個の人を示してゐるがそれはイエスキパウロである。他の人々も居るけれども、それらすべての人はむしろ背景になつてゐるのである。繪の中心に生ける神の子、メシヤたるイエスが立つて、彼の傍らに他のすべての人に勝つて、神の悦び給ふ子の人格を有つた人が立つてゐるのである。

この人が良く知られてゐない事は歴史の悲劇の一である。我等は彼を要する。世界は獨斷と信條に疲れて來た。今日では誰も豫知豫定の論や、罪の人を論ずるものに傾聴しようとするものはない。世界は人物を熱望する。人格に重きをおく、いづれに於ても人々は惑ひ、力を落し、幻滅を味つてゐる。彼等は奮闘し、苦難し、而して勝利を得た人の姿を要求してゐるのである。多くの人々は失望し皮肉になり叫んで曰く「誰か我らに善を示さんや」云々。畢竟善に身を捧げた人の顔の輝を要求してゐるのである。今日の人はキリスト教の力に疑を挿んでゐる。イエスの主義の美しいことは承認するが、果してその生活の仕方が行ひ得るものである云々ふことを確信してゐない。彼等は人間性は矢張り人間性で、人は必然的に今迄あつた如く、又現にあるまほりであらねばならぬ、人間性は變へることは出來ない主張するのである。我等はよつて以てキリストの靈が顯著な勝利を博し

た人間性の標本を目前に置かんことを要求する。我々はキリスト教的理想の主張の下にあつて確固たる例證を要求するのである、パウロこそは人の根本的に變化し得ぬこの冷笑に對する答であり、キリストの約束せられたるもの、成就し得る云々ふ争ひ難き證據であらねばならぬ。もしこの人にしてクリスチャンを以て自ら任ずる人の頭腦や心臓にあつて生ける力となるならば、全教會は爲めに速力を増し、勢力を増すやうにならう。彼がキリストを通じて凡てを爲し得ることを經驗によつて見出したこの人に、この靈的發電機に、一層密に全文明が接觸する様になればそれは爲めに新たな刺戟と鮮明なる音調とを受けるにちがひない。

いかにして我等は彼を知り得ようか。知り得るものは、使徒行傳及び十三の書簡を通じてである。之等は彼の生活を記すに充分ではないけれども彼の魂を知るには充分な材料を提供するものである。いかなる風に着手すべきか。始めが大切である。多くの人は出發しても、正しい場所から始めない爲にやがて止つてしまふ。彼等はロマ書から始めるが、これはパウロを理解しようとするもの、始め方としては最も拙いものである。ロマ書がパウロの書簡中の頭首にあるのは、これが最も長いものである。この世界の首都に於ける教會に宛てられたものなるが故である。けれどもそれは最後に讀むべきものである。まづ書簡中の終なるピレモンの書より始めるがよい。之は微妙な心遣

ひを要する事柄について親しき友に書き送つた一片の手記であるだけに、特に眞に迫つたものがある。パウロニズムに興味あるものはロマ書を読むがよいが、パウロを知らうとするにはピレモンを讀まねばならぬ。ピレモンの後にピリピを讀むがよい。これは彼が始めて得た歐羅巴の改宗者なる友の集團に送つたもので愛情に充ち溢れたものである。情緒に充ちてゐるその天命に身を任せることは悦ばしく、その飾り氣のないところは人を魅する。この書を読む時に宛かも一人の紳士の前にある思がする。ピリピの次にコリント後書を読むがよい。これは彼が全書簡中でも最も自叙傳的のものであつて、この使徒の生活に關する消息に充ち、そしてそのうちに彼は聖書中他に類のない仕方で彼自らを赤裸々に現はしてゐる。その敵の不正にして酷な非難に對して身を衛つてゐる。彼は苦痛に跪いた。そして悶えのうちに彼が言つた事は苦痛のうちにある罪なきもののみが言ひ得るものであつた。ピリピのうちに彼は自らをその友にしめし、哥林多後書には自らをその敵に示してゐる。これら二つの繪畫は相ならべて我々が記憶に云ふ廊下に懸けておくべきであらう。その次はテモテ後書であつて彼の書簡の保存せられた最終のものである。これは死が彼を凝視してゐるのを見越した時、獄中にあつて、世に又こなき親愛の人、友よりは寧ろ子に見える程、親しい人に書き送つたのである。我等がパウロの奥底にある魂を知らうとするにはその子に宛てた第二の書を見無視してはな

らぬ。以上四つのものがパウロの偉大なる四邊形を成すもの云はねばならぬ。この四つの書簡を反復熟讀した後、其友ルカの記述したパウロの行動に關するものを読むとにするがよい。使徒行傳十、十一、十二章を除いて終り二十章は殆ど全くパウロの經驗を示す一幅の繪畫になつてゐる。物語は短縮され、其間に空隙をなしてゐる處も多いが、然し折ふし記者は一片の文章のうちに雷電の閃きの如くパウロを照し出してゐる。彼が我等の前に驚くほどの鮮明さで立つたその刹那に、我等は彼のいかなる人物なるかを天の光の中に於けるが如く見るを得るのである。使徒行傳を繰返し讀み了へて、それよりガラテヤ、次ぎにテモテ前書、次ぎにテトス、そしてコリント前書を読んで行くがよい。残る五書、即ちテサロニケ前後書、エペソ、コロサイ、ロマは最後のものとして保留しておくのである。十三書すべては信賴するに足るものである。我等はそれらに何處迄もたより得る。我等はその相違、矛盾、變體、不同の主張に時を浪費すべきでなく、彼の文體に關する争に思ひ累つたり、年代の問題に傍道して頭を悩ましたり、パウロの書いたものの中、殆どすべての行について様々な解釋が多くあるが、そんなものゝ相撲つて頭を疲れさせてはならぬ。これらの中我等の要求として興味を引くものは一つもない。我等はパウロを知らんことをのぞみ、彼の勝利にみちた生活の力をのぞみ、而してキリストイエスが我等を執へて、我等に得させようとしたものを、我等

もまたパウロの如く執へるこゝの出来る様に、彼の苦難にあづからん事を望むものである。」

第二章 我らの知るもの、知らぬもの。

知り得るものがあると共に知り得ぬものがある、それらの間の區別は明瞭でなければならぬ。我等の無智は我等の知識の範圍に迂り込んで、その知識に混じてしまふ傾向を有つてゐる。若し我等が自分の知らない事を知ると思ふならば我等は自らを欺き、我等の考へてゐるこゝは混亂して來る。人々が事實を空想をこつちやに主張するに至つて世は混雜に充ちて來る。人々が知りたいたいものがつてゐる事を知らず、又知り能はざるこゝに彼等は憶測の中に安心を求めようとする。世の主張し來つた知識の大部分は忖度であり又憶説であるが、パウロを識らうとするに當つては我等は先づ我等の知るもの、人々の想像になつたものを嚴格に區別してかゝらねばならぬ。憶測も時に罪のないものであるが、又時に有害なこゝもある、心を歪めたり、心を暗くしたりする事のない憶測もあるが、間違つた道に心を向けしめ、到底正當の結論に達し得ぬまでに心を偏頗にしてしまふ憶測もある。我等はこの妨げをなし、害をなす憶測に對して絶えず守る處がなければならぬ。例へばルナ

ンがパウロを「醜き短小のユダヤ人」云うたときに彼は憶測してゐるのである。彼はパウロの短小であつたことを知らないのみならず、その醜かつたことをも知つて居ない。誰も知る者なく、知り得るものもない。ルナンは秀でた學者であつた故に他の學者と同じく勝手なことを言つたのである。彼は論證された真理にのみ頼る様意を用ひなかつた。彼は彼の書いたすべてに彼の想像を織込んだ。彼はパウロを好まなかつた、それで彼を「短小にして醜きもの」云呼んだのである。かやうにして彼は他の人々をして同じくパウロを嫌忌せしめ得ると思つた。

他の人々がパウロを短小であつたこと推したが、それはルステラの人々がパウロをマアキユリの神と見たこと云ふ事實に基いて想像したのである。されどルカは何故に彼等がパウロをその神と見たかに就て注意深く我等に語つてゐる。それは彼が主なる演説家であつたからである。彼等は人の身體の大いさを考へて居たのではなく、その舌の力を重んじたからであつた。バルナバは大きく且つ威嚴があつたこと、普通信ぜられてゐるのは彼はジュピターと見られたからである。然しそれは彼が賢く見え、そして無口であつたからかも知れぬ。

パウロも短小と考へた他の理由は、コリントに於ける彼の敵手の語である即ち「彼の身體の様子は弱し」されどこれは強ち彼の身長に適用されぬ。たゞ二百ポンドの體重がある丈高き者でも、

コリント人の云ふが如く弱い者もあり得よう。パウロの敵手は彼を冷かして、隔つては獅子の如く咆哮し、近づいては小羊の如く柔和であること云つた。彼は人々に面接する様になること身體にも言葉にも力が無かつたこと彼等は言つて居る。敵手の嘲笑に基いて大きな結論を立てるのは安全ではない。殊に嘲笑が何をほんたうに意味して居るかを確かめ得ぬ時に。コリントの讒者たちは多分彼の人を爲りについて考へてゐるので、全く彼の身體についてではなかつたらう。

パウロの短小なことを臆測する第三の理由は、第二世紀か或は三世紀に書かれた「パウロ及びセクラの行ひ」に題したる小説である。この物語中にペンで書いたパウロの肖像がある。それは現存せるもの、中唯一つの古いものである。この肖像は彼を「形が小さく、眉迫り、稍鼻大きく、禿頭で、足曲り、頑丈の體格で、愛嬌に充ちた」ものにしてゐる「それは時に彼は男らしく見え、又時に彼は天使の如き顔だつたからである」これは信賴は出來ないが、興味あるものである。人死して二百或は三百年を経過した後には書かれた物語から、その人物の姿容に關する材料の安全な出處は得難い。若しパウロが、この小説中の記事のやうに見えたものならば、リステラ人が彼を神と見たのは驚くべきである。それは希臘の神々は凡て優美で、形の整つたものである。足の曲つた神を想像して見よ。

我等は事實に面しよう。我等パウロの姿容に關して何等知る處がない。第一世紀中、誰も彼をペンや筆で描いた者が不在。後の時代の人々は彼を描いたが、それは想像の作である。それ故如何やうにも彼に就て考へることが出来る。ラファエルは、マースの丘に於ける彼を描いて威容の人とした。何故か。想像は凡ての人に與へられた移讓し難き權利であるからである。

我等はパウロが肉體的痼疾をもつてゐたことを知る。彼はそれを「肉の棘」を呼んでゐる。それが何であつたか誰も知らず又知り得る者はない。殆んど二千年の間、人々は棘の性質に就て想像して居つた。彼等は疑もなく時の極まで想像を續けるに違ひない。想像のあらはれは驚くべきものである。癩癩、眼炎、頭痛、齒痛、結石、痔、憂鬱症、癩病、神経痛、マラリヤ熱、ヒステリ、その他である。ある部の人々にはその悩みが癩癩であつたこと信じられて居る。そしてこれが學者や博識の醫師に由て事實の如く發表されてゐる。されど反對に、それは一つの想像に外ならぬ。愚かな想像である。醫學者は折々想像する。而かも悪しく想像する。若しパウロが癩癩であつたならばその癩癩は異常のものであつたので、世がパウロの持つてゐた様な特殊な種類の癩癩を今尙有ち得ないのは残念である。墓に入つて數百年を経た人を癩癩であつたこと云ふのは容易である。ジュリアスシーザーもマホメットもチャールス五世も又ナポレオン一世も凡てが屢々癩癩だを主張せられた。されど

かやうな主張に確な根據は一もない。かやうな人々が癩癩であつたこと考へる事を説明する満足な理由は一つもない。かゝる種類の憶説が屢々繰返されて、世はそれらを遂に定まつた事實として受けざるのである。若しパウロが癩癩であつたならば、ダマスコの門の傍らの幻象は一つの錯覺で、それと共に我等は基督教の眞理の爲めに最も驚くべき證據の一を除くことになる。されどパウロの癩癩は一の推測で、基督教は斷じて一つの推測に由つて覆されぬものである。

パウロが慢性の病者であつたことするも又想像である。ベンヂヤミンジョエットは學者であつたがパウロを「多分中風に悩まされた、悩むべき衰弱者で、周圍の目にイラ／＼した感覺的の人に見えた」と描いたのはまだ彼を充分知つてゐなかつたのである。これは單なる空想で、見當違ひであり、無價値であるとして斥けて可なりである。哥林多後書に記された困難を苛責に耐へ得る人は弱小な虚弱な病者でなく、實に特別に身體の均整ある人、肉體の驚くべき持久力を與へられた人、人類の歴史に於て異常の肉體的精力を示した、一個のクリスチャンサムソンであつた。彼が旅した哩數を計つて見よ。その道程の有様、その過ぎゆきし地方の事情、第一世紀の旅行に避け難い危険、勞苦、困窮等を考へて見よ、その時我等の種屬中剛健な體質の人ハーキュレスの前に立つたやうに感ぜざるを得ない。

パウロは眼疾を有つてゐたこと主張せられてゐる。彼の目に何事かあつたこと思はれるのに唯二つの理由がある。一は審判の時に、パウロは傍の人をして彼の口を打たしめた祭司の長を認めなかつた事、他はパウロがガラテヤ人に宛てた書簡に「若し出来得べくば汝の目を抜きそれらをわれに與へしならん」の語であらう。第一の出来事は證するに足らぬ。認める筈であつたこと思はれる人を認めないからと云つて必ずしも眊目、近眼であるとは限らぬ。パウロはエルサレムを長く離れて居つた。そしてアンナスを知つてゐたのか、彼を見た事があるのか證據はないのである。而して會議の席上、祭司長が法服を纏つてゐたかも知かではない。のみならず我等は「彼の祭司長なりしやを知らざりし」のパウロの語を審にし得ぬ。多分これは諷刺かと思はれる。パウロはその言葉を諷刺に用ひさうな心持にあつたのである。それで意味する處は「かくの如き残酷な命を與ふる如き一無頼漢を誰が祭司の長と想像し得よう」と云ふことであらう。ガラテヤ人が彼等の目をパウロに與へようと言つたことは彼が眼疾であつたこと云ふ證據にはならぬ。人が熱心にある人を愛する時に彼は彼の目をさへ與へよう云ふ、それは此の上もない献身の情を示すものである。ファラーがパウロを描いて彼が虚弱で病身であつた爲め受動的に此地、彼地を導かれ、手を取つて案内守護し指導する伴侶なしには常規の生活を送る事が殆んど不可能であつたこと云ふ時に、彼は大膽な想像の犠牲になつたのだ。

パウロは不完全な眼を有つてゐたかも知れぬ。然しそれは我等にはわからぬ。ルカも亦それを知らなかつた。彼はパウロがいかに魔術者エルマに目を注いだか、又いかにリストラで跛者に目を注いだかを物語つて居る。彼は明かに彼の風貌を以て恐怖を撃ち、又人の心に希望を起さしめることが出来た。パウロがエルサレムに於ける會議に臨んだ時、ルカはパウロの眼の働きに動かされた。「彼は議會に目を注ぎ彼らを見た」彼は彼の一瞥によつて人々を畏怖せしめた。

パウロは結婚したか。さういふれば、彼がクリスチャンになつた時に、妻は彼を離れたか、それとも彼女は死んだか、我等はそれを知らぬ。それを決する證據はない。凡ての答は臆測の外何物もない。

パウロは肉に於てイエスを見たか。それを答ふる事は出来ぬ。此點に於ける臆測は殊に力を入れられたものであつた。然し最も積極的であつて、最もよく支持されて來た答は、臆測以外に何物もない。

パウロは牧會書簡パストラルエピツトルを書いたか。或派の人々の中にあつては否と云ふのが習慣になつてゐる。人々が彼はそれらを書かなかつたこと云ふならば、それはさう臆測してゐるのである。今日の形に於ける書簡はパウロのものではない、けれども又それらのうちに疑もなく純粹なパウロ的資料が見得

るにすれば、それも亦一の臆測である。現在生きて居る人で、牧會書簡中パウロの文を他の人の筆になる文から摘出し得る者はない。今迄主張されたかくの如き知識のすべては臆測に過ぎない。私一個の考へとしてはパウロは牧會書簡三つを全部書いたものと思ふ。私は過去五十年の間、この問題に就いて公にされた凡ての重要なものを読み、且つ三十年の間夏も、冬も、晝も、夜も此の使徒と共に生活した事に因て、かく臆測し得る権利を得たものである。私は私が彼を知るに云ふ権利を主張することを許されると思ふ。私は彼の發音、言葉の抑揚、高調子、低調子、微妙な言葉の癖及びその個性の香を知つて居る。私は彼を知るが故に、彼は牧會書簡を書いたに確信する。彼がそれらの書簡を書いたに云ふ事は、同時に彼が希伯來書を書かなかつたに云ひ得るに同じく確かである。それらの書を書かなかつたに云ふすべての大家達の、最も大膽な、そして最も博學な臆測に對して私は私の臆測を主張するものである。人々が牧會書簡を放棄するならば彼等は根柢のない臆測に従つて事をなすものである。今やこれらの問題を論ずるのは流行になつてゐる。然しその流行の過ぎ去るのを私は疑はない。

パウロは滑稽味の感じに乏しく、自然を愛することになく、子供を好まず、動物の感情に全く無頓着であり、又藝術を味ふことがなかつたに屢々云はれてゐる。

これは事を好む理論家が我等のもつてゐる乏しい断片的な材料から引出した多少氣儘な推量である。何をパウロが好み、何を好まなかつたかを語ることはルカの目的の範圍内にはなかつた。又パウロが高尙な、眞面目な精神的問題に就いて書いた短い十三の書中に、彼の内にあつた凡てのものを記す事は出來得る事ではなかつたのである。それらの書簡に於いて滑稽を用ひ、自然の景色を叙し、藝術に對する感激を述べ、動物、子供に對する愛情を露はすべき餘地がなかつたのである。沈黙の中から取出す議論は凡ての議論中の最も不確實なものである。手にしてゐる事柄に關係のない問題について人が何も言はないから云つて、それによつて人を判断する権利はない。パウロは自然の輝きに盲目であつたかも知れぬ、又藝術の美に無頓着であつたかも知れぬが我等はそれを知るを得ぬ。我等は單なる想像に由て彼を咎めないやうにしよう。彼が笑ひ得なかつたに云ひ得よう、又彼の滑稽の感じが發達してゐなかつたに云ひ得ようが我等はこれを以て彼を責める事は出來ない。我等は充分に知らぬのである。

彼は希臘の學問に精通して居たか、彼は希臘の詩、哲學、歴史學の廣い知識を有つて居たか。我等は知らぬ。彼は異邦の詩から三つを引いて我等に與へて居るから云つて、それを以て彼が希臘やクリートの全文學に通じて居たに結論する事は出來ないのである。詩人の話が世間に廣まり人々

の共有になつて居るものならば、殆んど誰でも之を引用し得るものである。パウロは彼の書簡を書いた時に希臘の哲學をも文章をも取扱つては居なかつた。それ故に彼の文學的教育が廣いものであつたか狭いものであつたかを語り得ない。人々が彼を以て教法學者的學識の範圍外にある無學者であつたとするならば、それは單なる想像である。それと共に彼が廣く希臘の古典學の教養あると稱するも又想像である。何故に我等はあからさまに、我等は辨へぬと告白しないのか。

パウロは壓制であつたか。多くの人はさうであつたとして彼を好まない。然し彼等がさうしてそれを知るのだらう。或る學者等は壓制であつたとした。然し彼等がさうしてそれを知つたのであらう。「壓制」云ふ語は好ましからぬ言葉である。人はその根據を確めない限りそれを用ひてはならぬものである。人はパウロが第二回の傳道旅行の折バルナバと異つて、ヨハネ、マルコを連れて行つた處から壓制であつたと言つて居る。彼はさうであつたか。凡そ人が他を判断を異にすれば壓制と言へるか。人は壓制的精神を露はす云ふ答を受けずしてその友の意見を異にする事は出来ないか。誰もパウロが正しかつたか正しくなかつたかを知るものはない。我等は事實を皆握つてゐない。我等は判断を下す時に我等の言の正しいことを示すべき材料を缺いて居る。パウロが間違つてゐたこと考へることはバルナバが正しかつたこと考へることは、同様理由のないことである。我等はバルナバ

の知識よりもパウロの知識を判断する方が容易である。それはパウロの判断は新約に於て屢々省察の資料となり、且つ彼が秀抜な知識の人たるを自ら屢々示して居る事實は、人々をして彼のヨハネマルコに對する判定を咎めない様に用心させるからである。パウロがヨハネマルコを以てその特別な旅行に良結果を齎らす素質を缺くものと判断して、嫌惡すべき而かも暴君的な精神を表示したと稱ふるは想像に過ぎない。それは、その上に信賴すべき結論を立てることの出来ない淺薄な性質をもつたものである。パウロを壓制だつたとするのは彼を好まぬ人々の村度である。

パウロの生活を知ること少なく、彼の性格を知る事の大きいなるは驚くべきことである。我等は彼のタルソに生れたのを知つてゐる、けれども彼の父や母の名も性格も共に知らぬ。彼が兄弟を有つてゐたのか、又ルカの記した一人の妹以上になほ他の姉妹を有つてゐたのか分らぬ。彼は彼自らの家族の人々について言及した事はない。我等は彼の教師中の唯一人「ガマリエル」の名を知るのみである。我等は彼の初めの三十五年について何事も知らぬ。イエスは彼の初めの三十年間に一度語られた。パウロは何も語らなかつた。彼が改宗の後十二年は殆んど全くの白紙である。それより十七年を通じて、我等は速にして且つ孤立した彼の影を使徒行傳に又書簡に見るのである、けれども使徒行傳の終に幕が下りて我等は暗闇に残されて居る。

傳説は彼が羅馬の市外、オステンアンの門から二哩の處で首刎ねられたと言ふ。我等は百卒の長と近衛の一隊と群衆とが彼に伴つたと言ふことを知つて居る。誰か友が居たとしたらさういふ友が彼と共に往つたのか我等は知らぬ。彼等が何と言つたか。パウロの最後の言葉が何であつたか、誰も、告げ得る者は無い。我等は彼がいつ生れたか、その日も月も知らぬ。我等は彼がいつ死んだのか、その年も、月も、日も知らぬ。彼の死んだ處として傳説の傳へる地點に教會が建つてゐる。三泉の教會がそれである。彼が葬られた處として傳説の傳へる地點に教會が建つて居る。ローマ城壁外の聖パウロの教會である。彼の傳記は書く事は出来ない。我等はそれを充分に知らぬが、しかし彼の人格は太陽の如く明かである。

第三章 限りある能力

「人々は彼を聖徒と呼ぶ。然し彼は決して完全なるものではなかつた。缺點のない聖者はない。世人は彼れを聖いと云ふが彼は全き者ではなかつた。彼には短所あり、缺點あり、瑕瑾があつた。我等の新約は英雄たちや硬骨の人々を描いてゐる。それはイエスについては「罪を外にして凡ての事、われらと等しく試みられ給へり」(ヘブル四ノ一五)といつてゐる。パウロもまた我等と同じく誘惑され、我等と同じく失敗した。破戒の點で彼は我らの兄弟である。

「イエスキパウロの間には大なる間隔がある。イエスは決して罪を告白しない、後悔の跡を示すこともなく、悔恨の跡さへも示さない。イエスは恥ぢるべきがなかつた。赦免を乞うて號泣しなかつた。我等はパウロがその口を土につけたのを再三再四見る。「われは使徒と稱へらるゝに足らず」(ミパウロは云つた。「われは神の子なり」(マタイ二十六の六三)「イエスは言つた。「われは使徒のうち最小き者なり」(哥前一五の九)「パウロは云つた。「汝らの師は一人にして、汝らはみな兄弟なり」(マタ

一二三の八)ミイエスは云つた。「汝らのうち誰かわれを罪ありとするか」ミイエスは問うた。「罪人の中に我は頭なり」(テモテ前一の一五)ミパウロは叫んだ。何人もパウロの面前に於て「主よ我を去りたまへ、我は罪あるものなり」(ルカ五の八)ミ叫びたくなるものはない。それよりも、我らは彼に取り縋り、彼の告白に加つて「わが欲する所の善は之をなさず、反つて欲せぬ所の悪は之をなすなり」(ロマ七の一九)ミ言はんとする。彼はその生涯の終に近いてピリピの友に「われ既に全うせられたりといふにあらず、たゞ之を捉へんて追求む。既に捉へたりと思はざれど、標準を指して進むなり」(ピリピ三の一二)ミ書き送つた。彼はイエスの位置に居ないでまさに我らの位置にあるのである。彼の缺點は彼を我等に近づけてゐる。彼の失錯は我等を彼に縋りこむ。イエスがよつて以て我等を援け得なかつたいろくの方法を以て、彼は我等を援けて居る。我等は二つの例を求めらる。一は罪なき人、他は罪を悔いた罪人である。我等は墮落しなかつた人に呼びさまされ、墮落したければ再び起き上つた人に勵まされんことを求める。完全な人は理想の如何なるものかを示し一度は破れても遂に打勝つた人は神の恩恵に由つて、終に何になるかを示すのである。パウロの罪深きことはイエスの罪なきこと、同じく、我等の瀆罪の中にあつてその役割をつとめる。我等が困難な危険な途を勝利のうちに旅しようとするならば一方にイエスを要し他の一方にパウロを要する。こ

れはイエスの至上の位置を盗むものではない。何となればパウロは常に云つた、打勝つのは彼でなく後のうちに住むキリストである。我等は二つの形に於て、即ち化身したる道の形に於て、又我等と同じ欲情を有ち、かつ我等と共に失敗した人の形に於て我等に媒せらるゝキリストの力を要求する。パウロは墮落し、そして神の榮光に達し得なかつたが故に我等はイエスに見出す凡てのものを彼に期待してはならぬ。我等はたゞ罪なき人のみ保ち得る謬ることなき判断を彼に要求してはならぬ。我等は罪を犯さざりし人のみ有ち得る間違ひなき意見を彼に求てはならぬ。もしパウロの性質行動が理想以下にありますれば、従つて彼の考へ方、教へ方に理想に至らざるものがあつても我らはそれに愕いてはならぬ。彼自らが己れの力の限りあることを告白しようとしたのに我等はなぜそれを承認しようしないか、なぜ我等は彼が彼自らに求めなかつた事までも彼に求めようとするか。人々が彼をイエスと同一線に置いて、その言葉の一つに神の子の言葉と同じ權威を與へようとするに彼等は守り難き地位を占めることとなり、そしてパウロ自らが第一にそれを否認するであらう。「然らばパウロは誰ぞ」ミ彼は自らを適はしからぬ位置にあげた人々に向つて言ふのが常だつた。何故に彼の所有しなかつた完全を彼の爲めに求め、彼の過ちが我らの面前に大きく記されたにもか、はらず、謬りなき性を彼に附與しようとするか。ある狂熱の人がルステラに於て彼を偶像

の如く拜しようとした時に彼は勇敢にそれを拒み大いに恐れて身を退いた。彼は人が彼の前に平伏することを欲しない、彼が要求した凡ては彼は本性に於いてはキリストの心を有つてゐたといふことであつた。而して彼が生涯の大望はキリストに忠實なることであつた。

ロウエルは「凡ての人は時代の囚人である」と云つたが、パウロもその例に洩れないものである。誰もその時代の束縛より全く免れ得るものはない。彼の歴史的環境は拭ひ得ざる印を彼の上に止めた。ガラテヤ人に書いた書簡に於て彼は、我等にまつては議論はならぬ一の議論を用ひてゐる。アブラハムとその子孫に與へられた約束に於いてその子孫といふ言葉が單數であるといふ事實はその言葉がユダヤ人を指したものでなくキリストを指したものでなければならぬ。彼は主張した。我等にはかやなの道理は子供らしい。けれどもパウロには子供らしくなかつた。なぜならば彼はラビニカルスクールに學んだのでこれは學者の議論の方法であつた。のみならず人々はかやうな議論に慣れて居たものである。人は聴衆を信ぜしめようとする時には彼等の心を掴む手段を利用しなければならぬ。この議論は我等の心をさらへないが、しかしこの議論を聞いた人々の心をさらへたであらう。法學者的註釋は時代遅れである。我等はそれを冷笑する。來るべき時代は我等を笑ふであらう。後に至つて彼はハガルミイシマエルの話を引用した。そして法學者たちの型に倣つてそれに意を寓した。

ハガルはアラビヤに於けるシナイの山で、自由の婦はその上にあるエルサレムである。すべてかかる解釋は我等には幻想的であるけれどもパウロにはさうでなかつた。なぜならばパウロには、エルサレムの學校に學び、そしてそれは當時の教授たちが聖經を解釋するのに用ひた方法であつた。舊約聖書の取扱ひに於てはパウロはその時代の囚人であつた。

パウロは第一世紀の流行に従つて黙示録を書いた作者たちから強い印象をうけて居た。これらの人々は神が奇蹟的な且つ壓倒的な仕方にてその力を顯はし給ふことを公言してをつた。そこに黙示録的考へ方に一致するやうなイエスの言葉があつた。而してパウロの焦燥な烈しい性質が特に彼をして黙示録的觀察に應ぜしめた。神は柔和にして同情ある父なりといふイエスの神の觀念が彼に従ふ者をして世は長く存續せざるべきを容易に信ぜしめた。さうして智慧と慈悲の神が人類をかやうな悲惨と腐敗の混亂のうちに残しおかれようか。挽回し難き迄に朽ち果てた社會の秩序は熱し切つて將た燃えんことしてゐる。クリスチャンの困窮と苦難は彼等を黙示録的幻想に逐ひやつた。これは彼等の苦しみの日に於ける主なる慰安であつた。これなしに身をもちこたへてゆく事は彼等には耐へ難い事であつた。パウロ自身がイエスの速かに來るべきを期してその心を慰め、而して同じ望みを人々の心に呼び起しつゝ、彼等を慰めた。彼はテサロニケ人に「我等主の言をもて汝らに云は

ん、我等のうち主の來りたまふまきに至るまで生きて残れる者は既に眠れる者に先だたじ。それ主は號令ミ天使の長の聲ミ神のラツバミ共に、みづから天より降り給はん。その時キリストの中にある死人まづ甦り、後に生きて残れる我等は彼等ミ共に雲のうちに取去られ、空にありて主を迎へ、斯ていつまでも主ミ偕に居るべし」ミ書いた。これほぎ明かなものはない。若しそれがパウロ在世中に眼に見える奇蹟的な方法でイエスが來るミ云ふことを意味してゐるのでないならば、この言葉に意味がなくなる。おなじ確信は、コリント人に宛てたパウロの初めの書簡に高調されて居る。「視よ、我汝らに奥義を告げん我等は悉く眠るにはあらず、終のラツバの鳴らん時みな忽ち瞬く間に化さん。ラツバ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦り、我等は化するなり」その意味は明瞭である。彼はローマ人に「時は近し」ミ書き、ピリポ人に「主は近し」ミ書いた。かやうな言葉は一つの意味しか有ら得ぬ。ペテロが、すべての物の終りは近しミ書いた時に、彼は彼自身の確信を示したのみならず同時にパウロ及び他のすべての使徒たちの確信をも示した。初期の教會は世の速かに終らんことを熱烈に期待しつゝ、生きた。避ける事の出來ぬ確乎たる事實がある。この事實は答へられねばならぬ或る疑問を生む。使徒は過つこぎがあり得るか。然り、パウロはさうであつた。人は靈感を受けそして謬つた見解を抱き得るか。然りパウロは靈感を受けそして彼自ら告白したやうに部分的にの

み事を知つて居つた。新約聖書は信據し得るミ共に誤謬を含み得るか。然り新約聖書は誤謬を含みそれミ同時に我等の救ひに關し必要缺くべからざるすべての事柄について權威を以て語る。正直なる人がさうして聖書を謬りなき書ミ言ひ得ようか。何故事實に面しないか。何が危険なこぎがあるか。そこにはたゞ傳統的靈感の定義以外には何物もないのである。事實が傳統的定義を破壊すればその定義は變へられなければならぬ。危険に陥つてゐるたゞ一つの價值あるこぎがある。それは正直ミ潔白に對する教會の名譽である。眞理の根本は事實に潔よく面し得ぬ人々に由つては決して進められる事は出來ぬ。今の世に於ても知識あり高尚な目的をもつてゐる人々でパウロの過ちを容し得ず彼の言葉の速かに成就されんこぎを鶴首して待つてゐる人々のあるのは歎かばしいこぎである。守り難き靈感の説を拋棄するよりも寧ろ六十代の經驗に對し目を閉す事を彼等にのぞんでゐる。一千九百年を通じて聖靈は人間の經驗にパウロやすべて他の使徒等が世の終りに就いて誤つた觀念を主張し教へてゐた事を立證してゐるけれども今日もステパノの時代のやうに常に聖靈を拒む敬虔なしかも尊敬すべき人々がある。

一つの間違ひは常に他に及ぶものである。パウロがキリストの來る事に就て誤つた爲めに、それだけにパウロが結婚に關して言ふ事に危険が生ずる。パウロは結婚を難じた、彼はそれを罪ミはし

なかつたが、人にして獨りでは安らかに住み得ない程熱情的でないならば結婚しないやうに薦めた。彼は父たちに、娘たちに結婚の爲め遣さないやうに薦めた。すべて斯の如き薦めは時は直に來るべしといふ彼の確信に基いたのであつた。凡ての終りが手近である時に何故結婚に就いて考へるか。古い秩序が速かに新らしきものに代らうとする時に當つて、何故にクリスチャンが家庭の責任にかゝづらばり、又キリストの告白のうちにあるやうに婦人に苦痛を齎らして悲しみを増さうとするのか。大なる變動に對して殆んど用意もする暇のない時に當つて何故に家庭の心配によつて自ら重荷を負ふのか。確かに我等の前提が誤る時に我等の結論に間違ひが來るものである。パウロの結婚について書いたことには多くの間違ひがあつた。彼のこの點についてなした害は計り難い。各時代の獨身論者等は彼等の見解を容るゝものを求めてパウロに走つた。やさしい良心が苦しめられ聖い結合が危くせられ、而して多くの場合破壊せられたのは結婚に關し指導をあやまつたパウロの助言に由るのであつた。されど我等は彼が夫と妻に向つて云つた多くの正しい事を忘れまい。又彼の晩年にキリストと彼の教會の關係を夫と妻との結合を以て表象した事を記憶するに吝なるものでない。パウロはすべての彼の意志と判断とに過ちなきを求めなかつた。結婚に關する文の冒頭に彼は言つて居る「處女の事に就きては主の命を受けず……されど我が意を告ぐべし、我は唯我が思ふ處を汝

らにつぐるに……」(コリント前七ノ二五)文の終りに彼は言ふ。「されど我が意見にて……我もまた神の御靈に感じたりと思ふ」(一)と、彼は彼のすべての意見を地に落ちざる、そして永遠の變らざる言葉として我等に享けさせやうとは思つてゐなかつた。

議論に於て折ふし理に外れ意見に於て時に誤り、判断に於て時々不確實な彼は、行爲に於ても時に非キリスト教徒であつた。彼の氣質には熱があつた、そして彼は常にそれを制御することが出来なかつた。エルサレムに於ける彼の審判の時祭司の長が傍に立つものをしてこの囚人の口を打たしめた時に彼は「神汝を撃ち給はん汝白く塗りたる壁よ」(使二三ノ三)と報いた。これはまことに一つの罪であるか否か問題となつてゐた。我等の間にはこの種の即答が多くある。我等はそれが一般人によつて許さるべきものとして宣言されたことを喜びとする。たゞひ祭司の長といへ彼が一種の悪徒に墮ちれば、その人に對して鋭い舌を用ゐることは善いことである。我等は感ずる。我等は不正を憤り相應な辯舌をもつてそれを斥ける人を尊敬する。しかし我等のパウロに對する辯護はさうあらうともパウロは自ら悪いことをなしたと思つて直ちに言ひ開きをなしたのを我等は知る。彼は彼の答について聖書を引用した。彼が熱した反駁によつてイエスの下に墜ちたのを彼は知つて居た。そして又我等も知つてゐる。イエスも會て祭司の長の前に立つた。立つて居る間に法廷の役人にそ

の口を打たれた。しかしイエスは打ち返さなかつた。彼はこれだけしか云はなかつた。「わが語りし言もし悪しくば、その悪しき故を證せよ。善くば何ぞ打つぞ」(約一八ノ二三)「屠場にひかる、羊のごごく毛をきる者のまへにもだす羊の如くして、その口を開かざりき」(イザヤ五三ノ七)これは理想である。イエスは小羊であり、パウロは獅子であつた。パウロは憤つた時には咆哮した。しかし彼は長く咆哮しなかつた。忽ちに鳩の聲になつて彼は己れの過ちを告白し、そしてクリスチャンの紳士たることを示した。

彼は彼のうちに頑迷の素質を有つて居た。折々それは彼の書簡の中に鳴る。彼は彼の言葉を常に制御しておくこゝが出来なかつたほゞその確信は強烈だつた。「犬に心せよ」彼は彼に確信を異にした人々を心においてピリピ人にかう書いた。これはキリストの僕の用ゐる語にしてはきれいなものではない。しかし神に對する熱烈な信仰ある人々は屢々彼の例に倣つたものである。ガラテヤ人に宛て彼の書簡に於て彼は言つて居る。「されど我らにもせよ、天よりの使にもせよ、我らの曾て宣傳へたる處に背きたる福音を汝らに宣傳ふる者あらば詛はるべし」(ガラテヤ一ノ八)ミ。この終りの言葉を書いた事に就て或人はパウロが赤面し、それを消したかつたであらうと想像するであらう。しかしこれはまさにパウロの欲した言葉である。彼は彼が言ふ通りのこゝを云はうこしてゐるのだミ

讀む人に信ぜしむる爲めに再び全文を書いて居る。パウロは「詛はれた」ミ云ふ語を非常に好んだ。我等の改譯者はそれを好まない。それで彼等はそれを塗抹して希臘語の「呪詛」の語を書いた。その音の方が好い。なぜならばその苛酷さは希臘の音樂的綴字に覆はれて居るからである。それに多くの讀者は「呪詛」の意味を知らぬ。パウロは知つて居つた。コリント人に宛てた第一の書の終りに彼は筆者の手からペンをこつてこれを書いた「若し人主を愛せずば詛はるべし」(コリント前一六ノ二二)ミ。彼はこれを二つのやさしい文章の間に記した「聖き接吻をもて挨拶せよ」及び「主イエスの恩恵、汝等と共にあらん事を」一つの薊が二つの薔薇の間に棘を出して居る。パリサイ的頑迷の古い苦い草がクリスチャンの心の花のうちに育つて居る。「われは未だ全からず」ミ書いたパウロは正しかつた。

第四章 同時代の人々の眼に映じたるパウロ

多くの人々は彼を見なかつた。著名な希臘人や又羅馬人が彼について筆を執らなかつた理由は其處にある。見ない人に就てさうして彼等が書き得ようか。ローマ人はユダヤ人を意地悪き狂熱家の群と見て、彼等にかゝづらはらうとしなかつた。ローマ魂は曾てパウロが審判の爲め其前につれて行かれた事のあるガリオスの中に生きて居る。ガリオスはパウロに一口も語るを許さうとしなかつた。またその事件に關係するこゝを欲しないと言つた。彼はかやうな喧しい論争に携はる時を有たなかつたのである。希臘人は代官のこの語を喜びパウロ誣告の首領を煽動して、ガリオスの面前に於いて彼を鞭つたがローマの審判者はこれを意に認めなかつた。これがローマ人の態度であり、ユダヤ人に關するすべての事柄に對する無關心であり、時には苦々しい傲慢な侮蔑であつた。クロデアス・ルシアスはエルサレムに駐屯したローマ陸軍の隊長で、すべての重要な事に就いては、鋭敏な目と耳をもつてゐたがそれでもパウロのこゝを聞いたこゝさへなかつた。或日パウロが彼の手に落ちた時

に彼れローマの役人はエジプト人の暗殺者を捕へたと思つた。高位のローマ人で曾つてパウロの語るを聞いたこゝのある唯一の人、代官フェスタスはパウロは狂氣したと信じた。彼はパウロを以つて神學的判斷や論争にながく耽つて氣を狂はした憫むべき不遇の者だとして彼を排斥し、終りまで彼に聽かうとしなかつた。高い地位にある希臘人は誰も眞正面にパウロに目を注いだ者はなかつた。希臘人は自分の教養あるを自覺してゐた爲めに、すべての異邦人について昧かつたがわけてユダヤ人について昧かつた。アゼンスに於ける身分高き人々にまつてはパウロは一介の饒舌家たるに過ぎなかつた。そして彼が復活の話に觸るゝと彼等は彼の面前に於て嘲笑つた。彼の心に幾日も残る棘を刺して、彼等は踵を反して彼から去つた。聲名ある希臘人がかやうな人にかゝはつて空しく時を過し得るものは一人もなかつた。

商業界に於て彼に如何なる注意を拂つたか云へば、彼は歸屬の利益を脅かした煽動者たるに過ぎなかつた。ピリピに於ては一團の人々の収入金を掃ひ落し、爲めに人々の憤激を醸してその逐ふところとなつた。エペソの市に於てはその教が射利的階級の人々の商賣に手痛き妨害となり、爲めに彼らの首領たちは暴動を起し、ついで數時間の修羅場を現出せしめた。パウロが商業に打撃を及ぼしたのは市中の事であつたので、彼はその場で、彼の言ふ如く獸と闘はなければならなかつた。

凡そその利益を奪はれやうとする人々ほご臆することなく強烈に闘ふものはない。もし人を狂暴にしようと思ふならば、まづその財囊に觸れるべきである。

この使徒に向けられた二つの主なる非難は、彼がシーザーの律法を破つたといふ事、モーセに叛いたといふ事である。此等の攻撃のうち何れの一つが先になされたか云ふことは、全然時と場合の如何にかゝつてゐる。テサロニケにては、無智の群衆がパウロの宿主を市の上長たちの面前に携へ來つた時「此の人々は天下を顛覆したり。……カイザルの詔勅にそむき、他にイエスキ云ふ王ありと言ふ」(使一七ノ六)とわめいた。カイザルにテパウロがベリクスの前に審問せられた時に、検事は公訴状を出して「この人は疫病人にして、且つ全世界のユダヤ人の間に騷擾を起し、且つナザレ人の異端の頭にして、宮をさへ潰さんとした」(使二四ノ五)と言つた。傍らにあつたユダヤ人は皆この訴状の一句々々が眞實であるを述べ立てた。パウロがその友なるエペソ人トロフィモを宮に携へた爲め咎められた日に、その騷擾の頭の咽喉をついて出でた言葉程、彼に對するユダヤ人の考へをよく表し得たものは恐らくあるまい。曰く「この人は到るころにて民に律法をこの所に悖れる事を人々に教ふる者なり」(使二二ノ二八)云。パウロがエルサレムに到着した時に彼の友人たちは彼の敵手が何を語つて居たかを彼に告げ、そしてその要領が「異邦人のうちに居る

凡てのユダヤ人に對して、その子等に割禮を施すな、習慣に従ふなといひて、モーセに遠ざかる事を教ふ」(使二一ノ二二)云ふにあつた事を彼に告げた。ユダヤ人間に一般に行はれた噂に従へばパウロは背教者であり變節者であり、そして父祖の宗教を潰しその民族を賣る者であつた。異邦に於ける多數者に對しては彼は社會の秩序の敵であり、平和の攪亂者、我等の所謂共產主義者、無政府主義者、過激主義者であつた。彼は赤旗を手にした男であつた。物の分る人々から彼は怖るべき、憎むべき、避くべき人、好ましからぬ市民を考へられてゐた。

何處へ行つても彼は彼をおそれる人々に狩り立てられた。そしてその人々は彼の仕事を水泡に歸せしめんとして全力を盡した。彼等は常に云つてゐた。「彼は全く使徒ではない。伴り者であり篡奪者であるに過ぎない。パウロはかう云ふことを心の中に感じて居るにちがひない。何故ならばもし彼がさう感じてゐないならば彼は改宗者から報酬を受けたであらうし、己れの手を動かして生活費を得ることはしなかつたであらう」云。かやうに初めから彼を偽善者、欺瞞者と假定して、彼等は彼が煽動家であり詐欺師であり狡猾な虚偽をもて常に人々を籠絡して居たといふ證據を容易に見出した。彼は定まつた主義のない人、日和見主義の人、ぎつちつかずの人、詐欺師であり、そして人望を博し、己れの巢を飾る事が出來さへすれば、あらゆる人に對してあらゆるものにならうとし

てゐた。彼は二面で、二枚舌で、ある時には一つのこゝを言ふかと思ふと他の時にはそれと矛盾したこゝを言ふ。一致を缺き、たゞ利己的な目的を進める事にのみ注意してゐた。彼は臆病者であつた。隔つては口舌を弄び、相接しては小羊の如く柔和で鳩の如くやさしかつた。彼は金銭を愛した。そして好んで貧しき者の爲めに贖金を促した。何故ならばその中のある部分は彼のポケットに收めらる事は確かであつたから、彼は慈善事業に携はり、それに依つて利得を得ようとした。エルサレムに於て貧しき人々に示したその熱烈さも、畢竟彼の貪婪の心を充たさん爲めの隠蔽砲であつた。のみならず彼は教養のない辯論の力を缺いた弱い人であつた。論客としての才能を彼は有つてゐなかつた。その語るこゝろは取るに足らぬものであつた。ある者は彼の語る處は賤しむべきものであるとさへ言つて居た。かやうな事が彼の批評家達の言はんさする言葉の数々である。手殿しい非難である「ペテン師、伴り者、山師、篡奪者、煽動者、詐欺師、虚言者、臆病者、日和見主義者、貪慾者、弱蟲」等。これ以上の悪評があらうか。人は主の語を記する「もし家主をベルゼブルと呼びたらんには、況してその家の者をや」(馬太一〇ノ二五)これらの反對者達の多くは疑もなく敬虔で正直な人たちであつた。敬虔な尊敬すべき人々がかやうな事を信じ、又言ひ得るのは愕くべき事である。これらの人々は、丁度パウロがクリスチャンをして強ひてイエスの名を潰さしめて、神を喜ば

しめてゐるこゝ信じたこゝ同様に彼等はこれで神に奉仕して居るこゝ信じて居つた。パウロを石にて撃つた人々と同じく敬虔で正直であつた。ステパノを石にて撃つた人々は、イエスを十字架の上に殺した人々と同じく信心深くあり又良心を有つて居た。保守、偏見、黨派心、意見を誇るこゝ、頑固、虚榮、野心等は不思議にも、神に對する献身の念と敬虔な眞執な心と信仰の熱と共に極悪非道の果を齎らす爲めに働く。人は何故にパウロの敵手がさう云ふ心になつてゐたかを直ちに知るこゝが出来ぬ。パウロは割禮に關する聖書中の明かな言葉を無視した。さうして彼は千年もまもられた爲め、神聖になつた慣例を殆んど顧みなかつた。疑ひもなく彼は人々の永遠に效力ありと見た式典を一時のものとして斥け、そして眞の宗教的生活の要件について新しい見解をこつた。彼が誤解されたのも不思議でなく、又誤解されたが故に誤り傳へられた事もあやしむに足らない。誤り傳へられたが故に彼が嫌はれ疑はれるやうになつたのは避けがたい事であつた。猜疑と嫌悪が完全な働を成す時、憎しみと偽りを齎らす。パウロに對する批評は彼等が彼に加へた攻撃にこつてよい根據となるこゝ彼等は考へた。彼は彼等の敵意を益々強くする様な事を常に語り、且つ行なつて居つた。誰にしても自分以上の人を正しく批評するこゝは出来ない。彼は批評者たちの上に出たので、我等は彼等を咎むるよりも寧ろ憫まざるを得ぬ。例へば彼の溫和なこゝは彼等には解らなかつた。それは臆病

の一つの型ミしか見えなかつた。誰にしても自分の利益を期することなくしては、何事をも成すものはない。心に記する人々にまつては、パウロが他人を助ける爲めにその生命を喜んで捨てる。いふ事が一の神祕であつた。恐らく貧しき者の戸口にあつても同情の念を持たなかつた彼等にまつては、パウロが遠く隔たつた貧しき人々を心配することは一種の欺瞞と見えた。のみならず人々は變節者を好まぬ。而してパウロはまさに變節者であつた。彼はクリスチャンの敵であり、そして一方彼自らそれになつた。彼は一つの事をなす爲めにダマスコに向つた。そして引き返して他の事をなした。これは人々の了解し得ず又赦し得ぬ變心の一つの型である。彼の敵は常に彼を嘲つて居た。それは彼が十二人の弟子でなかつたこと、彼れがペテロやヨハネが與へられたやうな特權を與へられなかつたこと、彼のイエスに對する知識は限定されたものたらざるを得なかつたこと、そして權威ある教に於ては他の使徒たちに遙かに劣つて居つたこと等による。我等が彼の性格を研究するに當つては、彼等の批評、穴探し若しくは讒言、誹謗に至るまで我等にまつて大きな價值がある。彼等は、他の人々がパウロを見た通りに我等もパウロを見ることか出来る様にして呉れる。彼等の語るところは、往々にして邪推に過ぎなかつた。しかし讒にもせよ、それが向けられた人の上に時として光を放つものである。そのイルミネーションは、例へば人々がイエスに投げかけた汚辱の言葉

の中にもある「食をむさぶるもの、酒を嗜むもの、税吏、罪人の友」さいふが如きそれである。

パウロに對する敵の惡罵の言葉は未だ語らないものがあるが故に教訓的である。パウロには咎められなかつた多くの罪があつた。若し少しでもその罪あることが示されたならば、敵の箭は免れ得なかつたであらう。それから又若しこれらの誹謗、譴責がなかつたならば、我等はパウロの偉大なる人物たる事を知り得なかつたに相違ない。彼は讒謗の嵐のうちに住み、然もなほ和やかだつた。彼は長く苦しんだけれども依然彼は親切であつた。彼は殘酷な批評を投げつけられ待ち構へた非難を以て鞭打たれた。けれども尙且つ彼の仕事を眞正面に進めた。彼は世を一層幸福にし、一層善良にする爲めに全力を注いだ。彼が首都に於て受けた感謝さへ毒心ある叫びであつた「斯の如き者をば地より除けよ、そは生かし置くべきものならず」(使二二ノ二二) 僕は主人の如くなれば足る。

パウロの敵が、常に彼を殺さんとして居つたことは注意すべきである。彼等がパウロを憎んだのは非常なもので、彼の血より外には彼等を満足さすものがなかつた程であつた。彼等は憎惡の爲め狂暴になる程パウロを嫌つて居た。パウロを殺すまでは飲食を斷たうと宣誓をたて、結束した四十餘の人々は、パウロの生存せるが故に悲惨な境遇にあつた大多數の人々の代表者であつた。我等は人の苦しむを見るまではその人を知り得ない。イエスがパウロを召された時に「われ彼に我名の爲に

いかに多くの苦難をうくるかを示さん」(使九ノ一六)と言はれた事は、初代教會に於ける言ひ傳へであつた。

誰でもその力相應に他の人々の心を吸引するか、さもなくば反撥するものである。若しパウロが強く或人々をはね返したならば彼はそれだけ或人々を鐵鉤で以て己れに結び附けた。彼が人々より極端に嫌はれた者の一人であるならばそれと同じく彼は最も愛された一人であつた。ガラテヤのクリスチャンは彼を崇拜し、彼等の眼を剔り出して贈らうとする程であつた。ピリピの改宗者たちは彼の行くところは何處へでも愛着の念をもつて彼に従ひ、そして幾度も贈物をした。コリントにある彼の友人たちはキリストに従ふよりもパウロに従はんことを危い考へをもつてゐたほゞパウロに信服して居つた。「われらはパウロに屬す」言彼等が叫ぶのを聞いてパウロは恐れ戰いた。エペソに於ける彼の友人の心は全く彼に絡みついてゐたので、彼がエルサレムに行途上彼等に再び會へないだらうと告げた時に、彼等は地にひれ伏し小兒のやうに歎歎いた。時來つて最後の告別をなす時に彼等はその腕をパウロの頸にかけ、聲高く泣き、幾度も彼に接吻し、最後の瞬間まで彼に伴はん爲め船に至り、彼が中々彼等を振り切る言ひが出来なかつた程彼に隨つて居つた。彼等はパウロのうちに友、兄弟、父を見たのである。

パウロを信じて居つた人々の抱いてゐた彼に對する尊敬の念は、パウロのエルサレムへの最後の旅を叙したルカのペーヂの中に出て居る。それは絶えざる大歓迎であつた。我等は叫ぶ「いかに彼等が彼を愛するかを見よ」言。トロアスに於ては、彼の友達は非常に熱心に彼に聴き、爲めに最終の夜は夜半まで席にまゝまり、少くもそのうちの一人は、窓にかけた程室は満員であつた。彼を一目見ようとしてエペソの教會の長老たちは三十哩を隔てたミレトスまで歩行した。若し必要ならば彼の面を今一度見る爲めには疑ひもなく百哩も歩いた言ひであらう。ツロに於ては彼は評判に由つて知られて居たのみであつたが、しかしそのクリスチャンたちは彼に對し最も鄭重な歡待をなし、七日の間彼をまゝめ、彼の出立の時になつて彼等すべては男子も婦人も子供も共に彼と共に船に至り、出帆前彼等は岸に膝まづき告別の祈を共にしたのであつた。彼等はパウロにエルサレムに行かないやうに願つたけれ言パウロは進んで行つた。カイザリヤに於ても彼がエルサレムに往つてその身を危くせざるやう彼等は熱心に懇請したのだが聽かれなかつた。彼等の恐怖も彼を動かす言ひは出来なかつた。彼等は首都に於ける病的感情を知つてゐた、そしてやがて起るべき事柄について暗い豫感を有つて居た。パウロが彼等を諫め涙もて彼の心を挫かざるやう彼等に乞うて後初めて彼等はそれを神の意志である言ひ感じ、避け得ざるもの言ひして頭を垂れたのであつた。エルサレムは

たゞ一途に彼に挑戦して居るものではなかつた。その保守主義の大なる堅學中には歓迎の手もあり同情の心もあつた。エルサレム教會の役員たちは親しみをもつて居た、けれども用心深かつた。彼等はパウロに對する偏見が激烈であり又危険である事を知つて居た。それで彼等は挑戦感情を和ぐる爲めに或事をなすやう時々パウロに薦めた。パウロは初より終までヤコブ、ペテロ、ヨハネに深い尊敬を拂つてゐた。ペテロは彼等に與へる書簡を記す時は「我等の愛する兄弟パウロ」を書いてゐた。母教會の指導者たちは、ヤコブがエルサレム會議の報告のうちに書いた「我らの主イエスキリストの名の爲めに生命を惜まざりし者なる、我らの愛するバルナバ、パウロ」(使一五ノ二六)といふ言葉を否認し得なかつた。

若しパウロがイエスの爲めにその生命を危くするを意こしなかつたならば、他の人々も彼の爲めにその生命を危くするを意こしなかつたであらう。アクラミプリスキラミ云ふ夫妻は彼の友のうちで最も親しいものであつた。パウロ自らの言葉を用れば彼の生命の爲めに「彼等は己れの首をも惜まざりき」(ローマ一六ノ四)多くの人々はこれを喜んでなした。パウロは人々の心のうちに彼に對する熱烈な献身の念を呼び起した。獄舎に於て彼が歌つた時に獨りであつたのではなかつた。シラスが彼を歌つてゐた。獨唱でなく二人合唱であつた。彼には常に働く伴侶あり軍人の伴侶あり囚

人の伴侶があつた。我等は曾て彼の全く獨りなるを見ぬ。彼の最も薄運な時に於てすら、なほルカは彼と共に居つた。彼は彼の經歷中の各段階に於て自らかく言ひ得たのである。曰く「われ四方より患難を受くれども窮せず、爲ん方盡くれども希望を失はず、責めらるれども棄てられず、倒さるれども「びびず」(哥後四ノ八、九)ミ。

第五章 彼の誠實

彼は誠實であるか。これは道徳的指導者として身を捧ぐる人に對しての第一の質問である。彼は眞實を語るか。彼の言ふことは彼の思つてゐることであるか。彼の動機は見える通りに眞實なものであるか。彼は正直であるか。彼は信頼し得るか。若し彼が心のうつろな人であれば我等は彼に聽くまい。我等はあざむくものゝ爲めに空しく過す時をもたぬ。

我等はパウロの眞實であつた事を確かに信じて居る。これは我等の確信する第一の事柄である。我等は彼の知識を疑ひ、彼の判断に同意し得ず、彼の意見の正當か否かをあやしみ、反對者に對して彼の卑怯ではなかつたか疑ひ、彼の理論の過程に信を置けぬ處があるかも知れぬ、しかし我等は彼の誠實を疑ふことは出来ないのである。かゝる點に於て我等が誤つた考へを有ち得ない程彼の書簡に於て我等と接近して居る。歴史や科學や神學等の外面的論述に於ては人は己れをその表題のうちに隠すことが出来る。しかし友に對する書信にはその人全體が前面に現はれ來らざるを得

ぬ。人が双方にまつて重要な問題を友に書く時に欺瞞者としての役割を演ずる事は出来ぬ。それは自然に悖つたことである。教師が生徒たちに彼等の學んだ事柄又學ぶべき事柄について書かんとする時に、ある事を言つてそれによつて他の事を意味することは出来ない。それは我等の知る如く人間性に悖つて居る。パウロの書簡は全く眞直で、何等凝つたものでなく、ごく自然で、彼の眞の自我が露はに出て居る。彼の書簡は眞實を以て鳴り響く。誰にしても腰を掛け、それを讀み通してから惡漢の敬虔な瞑想録を讀んだ感じになるものはない。正直は偽りの父も模倣する事の出来ぬ一つの偕調を有つてゐる。

パウロは彼の誠實なることを瞭かに自覺してゐた。そして絶えず攻撃せられて居つた爲めに常にその誠實を主張して居つた。彼が到るさきくに人々は彼を虚言者としようとした。これは彼を端的ならしめた。良心の鋭い人にまつてはその言ふことなす事が偽善だに諷せらるゝくらゐ苦痛なことはない。彼は若い時から良心の鋭敏な人であつた。良心の鋭いクリスチャンになる前から良心の鋭いパリサイ人であつた。神に人々に對して咎むる處なき良心を保つ爲めに彼は己れを宗教的訓練の下に置いた。これは彼の全生涯を通じての根本主義であつた。彼がクリスチャンを迫害した時に彼はそれをなすべきこと、信じてなしたのであるが今はクリスチャンにしてなすべきこと、信じて

あることをなしてゐる。彼は言ふ。イエスの教を宣べ傳へるにも天來の異象に對して従順であつた。そして「もし我福音を宣べ傳へずば禍害なるかな」(哥前九ノ一六)と叫んだ。彼の不斷の努力は良心の好き折合を保つこと、そこに彼の喜びの源があつた。彼はコリント人にさう書き送つた。——コリントに於てなしたる事も彼の良心に従つたものであつた。彼はテモテに告ぐるに善き良心をしつかり有ち「良心を燒金にて烙れたる」(テモテ前四ノ二)虚言者を用心せよと云つた。今日迄神の前に全く良心に恥づることなくして生活してゐた事は猶太の議員の面前に於て彼の誇りとするところであつた。

我等は今こゝにパウロの人格を照し出す教を除く外彼の教についてのべんとするのではない。正直でない人が正直を讚美する事は出来る、自分の實行し得ない有徳を讚へる事は容易である。けれども我等はその教へる方法に由り、その眞理を追求する熱心と執着とにより、その眞理に往來する度数により、眞理のその魂に點火する有様によつてその人格の中に何物かを學び得る。パウロがコロサイ人に「互に偽り合ふな」と言ふ時に、我等は、彼が心の底を表はしてゐることを確信し得る程の情熱をもつて言つてゐるのを見る。彼はながくエペソに住居して居たので偽りを言ふ者に對してそれが如何に恰好の市であつたかを知つてゐた。そして彼がエペソの改宗者等に書き送つた時、

彼は、虚偽を退け、互に眞實を語るに云ふ義務を何よりも屢々説きす、めた。若し人が眞實でないならば個人の品性が道德的欺瞞の下に分裂するのみならず社會自らが破碎する。なぜなれば我等は有機的一體であるから、ミパウロは教へる。人が欺瞞の怖るべき結果を明かに見、その罪深きことを強く主張し、そしてそれと同時にその人が正直な心を有つてゐない人であるに云ふことをさうして我等は信じられやう。しかもこれがパウロのクリスチャンとしての生活を通じて彼に負はされた罪であつた。パウロがそれを否認するのを耳にするのは苦痛である。「われキリストに在りて眞を言ひ虚偽を言はず、我が人々、我を信ぜざる爲心に絶えざる痛あることは決して偽りにあらざるなり」(ミ彼はローマ人に書いてゐる。「茲に書きおくる事は、視よ神の前にて偽らざるなり」(ガラ、一ノ二〇)ミ彼はガラテヤ人に書いて居る。彼は幾度もく、自分をこの誓言の下においた。彼がコリント人に彼の苦難の愕くべき記録を語つた時に彼は云ひ足してゐる。「神は我の偽らざるを知り給ふ」(コリント後一ノ三一)かやうな物語は得て傳奇的に響く。パウロはコリント人のうちにこれをすべて一種の戲謔であるにしようとするものにあつたのを知つて居る。そこで彼は眞實を語るにさういふ證の爲に神を呼ばずに居られなかつたのである。テモテにさへも「我は異邦人の教師を命ぜられたり。我は眞實を言ひて虚偽を言はず」(テモテ前二ノ七)と云つて居る。彼は「われは偽

りを言はず」こいふことが習慣になつて居たやうである。なぜならば誰かが彼の言葉を疑ひはしまいかこいふ恐怖に常に襲はれて居たから。これは彼が負ふべき十字架の一であつた。彼は常に眞實を語る證の爲めに神を呼んで居る。テサロニケ人に對して彼が彼等に媚びたのでないこいふ時、彼は神を證にたて、居る。ローマ人に、彼が祈るこきには彼等の名をあげるこ告げる時に又神を證にたて、居る。コリント人に何故彼が彼等に來らなかつたかを告げる時にその證として直ちに神に頼つて居る。彼はこれをあまりやりすぎる。たゞ恕すべき點は彼が猜疑に毒せられた境遇に住んでゐた事、彼の感じ易い魂が彼の言葉の眞實ならずこいふ諷刺を受けて悶えて居つた事にある。彼がコリント人にかう云つてゐるのを聞くは憫れである。——「我等誰にも不義をなしし事なく、誰をも害ひし事なく、誰をも掠めし事なし……我なんぢに遣ししものうちの誰によりて汝を掠めしや」(哥後七ノ二、一二ノ一七)

パウロにまゐりてはイエスは眞理の化身であつた。神はイエスに由つて世と和解しつゝ、あつた。パウロはイエスの僕であつた。彼はすべての命令をイエスに仰いで居た。イエスのやうになるこいふ事は彼の最も深い望であつた。彼はイエスが僞善者をさう思はれたかを知つて居つた。イエスはその口に欺きなき人であつた。眞理の爲めに證をなす、これ彼れが世に對する使命であつた。パウロ

は彼の大使である。彼自らの魂のうちに能ふ限りイエスの足跡を逐うてこれを再現するのが彼の仕事であつた。かゝる確信に支配せられた人が年を重ねつゝ、口に或一事を言うて心に他を信ずる事があり得るこ云ふ事は健全な人の懐くべきここの出來ない不合理な假定である。すべてこの事柄はパウロの誠實の向ふ處を指して居る。

しかし我等は人の潔白なここについては、その人個人の主張以上に何か證據を得ねばならぬ。そしてその證據をパウロは豊富に與へてくれる。彼の生活振りはその職業について彼が誠實であつたここを示して居る。人々が僞りを云ふ時には何か利益を得ようとして僞る。彼等自らの爲めか、家族の爲めか、又その友の爲めである。多くの人々は金錢の爲めに僞る。或者はその出世の爲めに僞り、或者は名譽を得る爲めに又その害はれざる爲に僞る。人が僞りによつて世の高價とする凡てのものを喪失つて居る事に氣付く時に彼等は僞らぬ。パウロは三十歳にして光輝ある前途をもつて居つた。彼の才能と教育とその高貴な品性の爲めに家々の戸は彼に開かれて居た。彼がクリスチャンにならなかつたならば彼がユダヤ人の世界にぎれほぎ高い座席を贏ち得たかはかり得ぬ。十字架の死後イエスの生くるを見たこ云ふ彼の言葉は地上に於ける彼の出世の凡ての望みを永久に葬つた。エルサレムに於てもタルソに於ても彼を容るべき場處はなかつた。この通路も閉されきの家も錠を

おろされて横木がおかれた。彼自らの家は彼を投げ出し、舊友は彼に背をむけ、エルサレムに於ける同僚は彼に冷かなる素振りをした。人はかゝる苦難を身にもたらす爲めに偽りは言はぬ。彼は相當な意見をもつた凡ての世の人々の嘲笑と悪罵の的となつた。彼の改宗した時以來彼は迫害せられた人であつた。いづれに往つても彼の生命は常に危険であつた。いづれの土地に於ても困苦と艱難はつきものであつた。彼は異邦人ミユダヤ人の兩者に苛め放題苛められた。この兩者は機會ある毎に彼を牢獄に入れたり鞭つたりした。彼の存在はまさに生きた屍であつた。さばれ彼はイエスを見た事を主張しつゝ、眞直に進んだ。これが偽りであるならば高價な偽りである。パウロはそれによつて金銭をこしらへなかつた。彼が年老いた時に彼が有つて居たものは身につけた着物と古いオーバーコートと數冊の書物だけであつた。彼はそれに由つて名を成して居ない。反つて彼はその名譽を喪つた。人々は彼の名譽を捕へてこれをぼろ／＼に裂き、風に托して撒き散らした。彼の主の如くパウロは自らを名譽なきものにしてしまつた。或人には彼は狂氣に見え又或人には惡魔に見えた。彼は謗られ辱められ彼の言ふ如く地の塵芥のやうに取扱はれ、世から全く拒まれた者であつた。けれども彼はなほイエスを見た事を宣べ傳へつゝ、眞正面に進んだ。彼はイエスを見たに違ひない。さうでないならばかやうな事をその怖るべき犠牲を拂つて云はなかつたであらう。彼がその經歷に思ひ

及ぶ時に演技場に於て死を定められた闘士を思ひ浮べたのであつた。ちやうどそれら不幸な人々が觀衆の前にその苦痛と死を見せ物にして居るやうに、彼も彼の同僚なる使徒たちも世人をもてなす爲に悲劇的な見せ物となつて居た。彼自らの畫の様な言葉を用ゐるならば彼は日々死んで居た。虚言者はかやうな英雄的な業はなし得ない。惡人はかやうな試練に耐へ得ぬ。詐欺者はもつゝ薄弱なものである。人々は己れの悲慘を増す爲めに偽りを云はぬ。パウロは彼の言つた事は眞實である。信じられた事を彼の行爲に由つて反駁すべからざるものとして示して居る。

この信念の表示は永い間主張されて來た故に一層深い印象を與へるものとなり人を信ぜしむるものとなつた。一日、一週間、一年間でさへも苦痛に耐へるのは出來難いことではないが、間違つて居る事を知つて而かもその爲に正しい心で一生の半ば苦痛のうちを過して行かうとする人はない。パウロの殉教はそのながく引き續いただけに人をして悚然たらしむるものがある。彼の磔刑は三十二年續いた。たゞ眞理を持つてゐることを云ふ自覺に鎧はれた心のみがかゝる嚴しい試練にたへ得たのである。「キリストの愛われを勵ませり」こは彼がその魂に受けた感激を言ひあらはした言葉である。パウロの不誠實に對する疑を人の心から除くには彼の苦しんだ事柄を記したものを讀むに如く方法はない。苦難の記事は完成されたものではないが心を畏れしむるには充分である。彼はユダヤ人より

三十九の鞭をうけしこゝ五度、ロマ人の笞に打れしこゝ三度、殆んぎ死ぬばかりに石にて打たれしこゝ一たび、破船に遭しこゝ三度に於て一晝夜海にあつた。彼の生命は屢々河の氾濫の爲又盜賊の爲山賊の爲頑迷なユダ人の爲そして情を知らぬ異邦人の爲に危くされた。その外市中に於て、又荒野に於て屢々危難に遭つた。彼は水上の嵐の中に於いてそして又陸上のより激しい嵐の中に於いて死に面した。其處に残忍な、二心ある人々は彼を壓倒せんとして全力を盡した。幾日も彼は激しく労働し、そして幾夜も眠らずにゐた。屢々彼は飢ゑた。又屢々彼は渴に苦しんだ。或時は衣薄く寒さに凍へた。すべてこのかゝる肉體の苦難の外に彼には心の悩みの大なるものがあつた。——そのこゝについて彼は暗示してゐるに過ぎない——數知れぬ問題を、悩まされた、援けなき教會によつて身に負はされ、そして迫害せられ、困惑された改宗者は慰藉と嚮導をのぞんで彼を見つめて居た。けれどもいかに大なる危険と妨礙が彼に向つて來ようとも、如何に多くの苦難が彼を襲ふとも彼は勝ち誇つて進んだ。——「これらのうち何物にも我は動かされず」を唱へながら。これらは詐欺者を動かしたに違ひない。

死の現前に於ける人の舉動を注意するのは興味ある事である。我等は三度異つた場合にパウロが臆することなく死を見つめたのを見る。第一は宮の庭前に暴徒が彼を殺さんとした時、第二は彼の

船が地中海に難破した時、第三は彼がロマの獄舎に靜かに終焉を待つた時である。この三つの場合偽りをなしてやがて裁判官の前に引かれて行く人の精神を表はしてゐる言葉は一つもなかつた。彼は暴徒に語る機會を與へらるゝと同時にダマスコの門前に見たイエスについて幾百回繰返された昔ながらの話を語り始めた。ロマの獄舎に於てはその信仰を斥けずして「われわが信頼するものを知る、且つわれの彼の手に委ねたるものを彼の守り得ることを確信す」を云つて再び信仰を固くした。或者はフェスタスと共にパウロは狂氣であつたと言ひ得るかも知れない。されど彼が不誠實であつたとは言ひ得ない。

茲に建築の出来る巖がある。我等は正直な人を見出した。そしてこの正直の心からあらゆる種類の善なるものは期待し得らるゝ。これは彼の人類墮落の解説でなくイエスの死の解説でもない、それは我等の問題と相撲ち我等の戦をた、かつて我等に力と望みを與へる人なるパウロである。パウロは驚くべき方法によつて己れのこゝを語つた。彼は謙遜な心の人であつたが、しかしその書信に於いて如何に大きな場所を彼が満したかを注意するのは爲になるこゝである。彼は彼自らに注意を呼ぶ習慣をもつてゐた。彼は人々を彼のやうにしやうとする事を躊躇しなかつた。彼は「我を視よ」「我に倣へ」をいひ得る程命の主の靈に充された生活をして居たのである。ルカは、ミレトスの岸

に於いてパウロがエペソの長老たちの目の前に手を翳して「汝等は何に烈しく此の手が働きしかを知る」云々の事を忘れ得なかつた。その手は多分山羊毛のきれ地をこり扱つた爲汚れて硬くなつてゐたであらう。その指には糸のあしが深く残つてゐたであらう。彼の手は、彼がこれらエペソ人に讀まんことを求めた書簡の一部分であつたのである。彼は常にその日その日のパンを得る爲に費さなかつたその時を彼等の爲めに費し、そして三年の間晝も夜も彼等を諭し且つ教へ、屬々眼に涙をためてゐた事を彼等に思ひ起させた。「我凡ての事に於て例を示せり、即ち汝等も斯く働きて、弱き者を助け、また主イエスの自ら言ひ給ひし「與ふるは受くるよりも幸福なり」の言葉を記憶すべきなり」これら人々は疑もなくパウロの誠實を受けてゐた。彼は千日の間彼等のうちにあつて氣高い生活を送りそれを彼等に證した。彼等のうちに於ける彼が生活の記憶を彼の去つて行くに云ふ思ひは彼等の目に湧き出づる涙になつた。告別の夕、老人はやくざもの、頸に縋つて泣かぬ、又彼の上に接吻の雨をも降さぬ。

パウロはその身全體を彼の誠實の證を見た。ガラテヤには多くの誹謗の人があつた。そして曾ては彼に従つたものも今は彼に従はなくなつた。彼は論争を以て、聖經を以て、例證を以て、訓戒を以て彼のこゝき得る限りあらゆる工夫の説教を以てする激越な自衛の道をこつたが、遂には彼等の

誹謗に對する最も克き論駁をして彼自らに立返つて來た。パウロが彼の使命は直接に主自身より得たもので他に誰からも與へられたのではない云ふ時彼が偽つてゐるを考へられるならば彼がなし得る事はたゞ彼の肉體を見よ云ふことであつた。此のこゝきを言つてから彼は言つた。「誰にても我が事業を妨ぐるこゝき勿れ我は我が體にてキリストの印あるものなればなり」云。ルステラの石はその痕をのこしてゐた。ローマ人の答から受けた損傷はなほ見るこゝきが出来た。ユダヤ人の革紐は皮膚を深く破つて長い前傷は癒えたけれども紅くなつた痕をいまだにのこして居た。第一世紀に於ける奴隸の持主は奴隸を見つけた處に於いてその所有權を確定するやうに奴隸に烙印をほこす習慣があつた。パウロはイエスの奴隸である。神は彼がごの主人に屬してゐるかを全世界が知り得るやうに彼に烙印を許した。

基督教にまつて仕合せな事にはその始めに於て人格の際立つた紛れるこゝきのない人があつた云ふことである。そして彼の生活があまりに眞實であつた爲如何に巧みな推測も彼の潔白であつた云ふ信念を覆すこゝき出来ない云ふことである。曾ては輕率な一部の人々に新約聖書は無稽の作者、捏造者の不器用な手に成つたものとして謗を受けてゐた。かやうな假説が既に永い以前に抛棄せられて居る。人が新約書の記事をさう考へようとも、確かな一事は正直な人が見、聴き、且つ經

驗したものを細かに記したい云ふ熱烈な願ひを以てそれを書いた事である。パウロは作り顔をしなかつた。彼には手細工はない。彼に氣取りはない、彼は詐る事の出来ない人であつた。若しダイオゼニスが處を變て、燈火を手して正直の人を求めつ、彼に近づいたならば「われは彼を見出した」ミ叫ぶであらう。

第六章 彼の正氣

誠實だけではまだ充分は云へぬ。人は誠實であり得ようが又信頼しがたくもあり得よう。歴史中の最も危険な人々のある者は疑もなく正直な人であつた。人は誠であり得る。同時に狂熱的で、幻想的で狂的であり得る。精神をそなた人は屢々よいこを考へる。氣の狂つた人は神の僕といふ觀念に支配され得よう。宗教的な人々は幻想の虜となり、そして彼等の至誠は彼等に一層の活動に危険を加ふるに至る。

人がパウロの頭腦の健全を疑ふやうになるのには理由がある。彼は幻想の人であつた。我等は異象を見る人について自然的に疑ひをはさむ。彼は聲もきいた。そして我等は我等の聞かない事を聞く人々を信用しまいとする。彼は忘我の境に陥つた。かやうな事のある人は明かに常軌を逸して居る。彼自らの證による。彼は一度第三の天にいたり、又ある時は第七の天に往き、恍惚として我を忘れた。そしてかやうに高く飛び上つた人は我等の間に不安の感を作る。彼は異言を語つた。異言

を語る人はよく癲狂院に生を畢る。彼は一つの棘よぶあるものを彼の肉體にもつてゐた。誰もその何であるかを知らない。辨別力の秀でた理論家はこれを癲癩であつたこと確言してゐる。パウロに癲癩の發作の習慣があつたこと一度信じたときに、少くともある人々にまつては、彼が見たもの、又聞いた聲を解決することは一層容易である。されどこの理論に對して不幸なことはパウロは精神の健全な人の如く考へ、活動し、書きつゞけた。彼はあたかも常識の化身のやうである。彼の中庸を持したことは著しいもので若しその行爲の全體から批判すれば彼の頭腦は確かに健全であつた。

パウロ程に色々調べられ、又探られた人はなかつたらう。人々は常に困難な煩はしいことを彼に質問して居た、そしてその答の多くは記録されて居るが、それらは怜悯なそして賢い人の答である。彼はよく助言を切望された。その助言の例は彼の書簡中に展開されてゐる。その穩健な證據としてはコリント書を読めば足りる。その書簡は彼がおそらくべき明かな洞察力と先見の明をも有つてゐたことを十分に證明されてゐる。運動の指導者として障害と危険に充ちた森林を道踏み分けて進んだ彼は、錯雜した、頭を悩ます問題に當らねばならなかつた。彼の書簡中に記されて居る彼の解決は驚くほどの洞察力あるを示したものである。彼は偶發的の問題を本質的問題より、一時的問題を永遠の問題よりそれごとく敏活に精確に切放したが、かゝる事は最上級の人のみ示し得る

ものであつた。病弱な理智、亂れたる理智はかやうな領内では困迷してしまつたであらう。パウロは非實際的な夢想家でなかつた。彼の書簡は寶玉の如く輝く倫理的格言に充ちてゐる。教會はそれらを最も値ある所有物に數へ、全世界はそれらを常識の模範的表現と認めて居る。例へば「すべてのもの可ならざるはなし、然れどすべてのもの益あるにあらず」(哥前一〇ノ二三)「知識は人を驕らしめ、愛は徳を建つ」(哥前八ノ一)「誰人にも軽く怒るかべらず」(テトス一ノ七)「誰も人に對し惡をもて惡に報いぬやう慎め」(テサロニケ前五ノ一五)「たゞ相互に、また凡ての人に對して常に善を追ひ求めよ」(テサロニケ前五ノ一五)「常に喜び」(テサロニケ前五ノ一六)「たへず祈れ」(凡てのこゝに感謝せよ) (テサロニケ前五ノ一八)「憤恚を日の入るまで續くな」(エペソ四ノ二六)「悪魔に機會を得さすな」(エペソ四ノ二七)「悪しき言を一切、なんぢの口より出すな」(エペソ四ノ二九)「一切のこゝに愛をもつて行へ」(コリント前二六ノ一四)「福音に相應しく日を過せ」(ピリピ一ノ二七)「何事をも思ひ煩ふな」(ピリピ四ノ六)「愛には虚偽あらざれ」(ロマ一ノ二九)「勤めて怠らず」(ロマ一ノ二ノ一一)「望みて喜び」(ロマ一ノ二ノ一二)「懇ろに遇せ」(ロマ一ノ二ノ一三)「汝らを責むる者を視し」(ロマ一ノ二ノ一四)「反つて卑きものに附け」(ロマ一ノ二ノ一六)「高ぶらるる思をなさず」(ロマ一ノ二ノ一六)「惡をもて惡に報いず」(ロマ一ノ二ノ一七)「惡に勝ち

たることなく、善をもて悪に勝て」(ローマ二ノ二一)「凡てのこゝを試みて善きものを守れ」(テサロニケ前五ノ二一)すべてこれらのもの及びその他の多くのものは永遠に正しく、永久に清新である。それは決して時世に遅れることはない。誰か癲癩病の発作の短いあひまゝに、かゝる格言をしるし得よう。

パウロは卓越した思索家であつた。ローマ人にあてた彼の書簡は人の理性が生んだ不滅なるもの、一である。代々の最も秀でた理知を有つた人でその幻想の眼界に身を浸し、その中心觀念を捉へんとして力を盡した人々もあつた。身體を衰弱せしむる痙攣に悩まされた後かう云ふ書方をするこゝは出来ない。

パウロは空想家ではなかつた。彼は狂氣じみた空想や、無益な要求に時を費さなかつた。パウロは徒勞するのを恐れてゐた。彼は天國と地獄の繪は示さなかつた。恵まれたものゝ幸福と、失はれたものゝ禍を精しく叙述するこゝはしなかつた。面帕を取り除かうとする馬鹿げた望に苦められる事はなかつた。死の世界に去つたものゝ交通しようといふ焦立つた願もなかつた。エンドルの魔女も彼を引きつけなかつた。彼の心はいづれに於ても常に健全である。

パウロは狂熱家ではない。彼は決して殉教者たらんこゝを力めたのではなかつた。寧ろ逃れ得る

事が出来ればいつでも逃れて居た。ダマスコの城壁から籠で下さるゝ事も敢へて不名譽と思はず、又テサロニケに於て夜陰敵のうちより逃走するこゝをも躊躇しなかつた。彼は苦しまんが爲に苦しむ如き愚かしい望みをもたなかつた。彼は苦痛のいかなるものかを知つてゐた。それでそれに對してしりごみもした。彼は出来得る限り答も避けて居た。これらの諸點に於て彼はわがりのよい人として行動してゐる。

パウロはすぐヒステリーになる様な高調子の興奮勝ちな病弱者ではなかつた。彼は靜穩な鼓動を以て、事變に面した。彼は自若として恐ろしい危機を通り過ぎた。不時な場合に當つても彼の心は平靜を失はなかつた。ピリピに於ける地震は看守を轉倒せしめたがパウロを倒さなかつた。エルサレムに於ける動亂も彼の精神の力を麻痺するこゝは出来なかつた。彼を殺さんとする人々に對する話にあつても、灰色な彼の腦中の一箇々々の細胞はその職分を果してゐたのを見る。怖ろしい嵐の船中に於ても彼は一系亂れず嚴密してゐたので、貳百七十五人の同船の人々は彼の周圍に押し合つて勵まして呉れるように、慰めて呉れるように彼に懇願した。彼は激しい働きの後も氣を失ふこゝはなかつた。彼は人々を相手にする様になつた時天の使を語るやうなこゝはなかつた、彼が如何なる境遇にも堪へ得たのは、彼の神経が確かだ、彼の心が彼を欺かなかつた爲めである。

パウロは誇大な妄想に煩されなかつた。彼は自己と自己の使命を高く評價してゐた。彼は「偉大なる能」を以て知られてゐる神の能ありと云ひ、自ら大なる人物を以て任ずるシモンマガスの役割を演ずる様なことはなかつた。彼は自ら一個の人であり且つその限りあるものなるを強く意識してゐた。すべての場合に於いて中庸を得るやうに留意し、彼に聴く者の感受性を重んじた。ルステラの農夫に語るまきも又アデンスの知者や、カイザリヤの群衆に語るまきも彼はそのたゞしき事を如何にしてたゞしき方法によりて語るべきかを知つてゐた、病弱な心はこの勝れた判別の能を缺くものである。

彼はその理想の急流に押し流され、狂亂した眼を有つた熱狂者ではなかつた。キリストの速かに來る事は信じたが、たえずこれを語つてゐたのではなく、又このまきが人々の日々の務を免れしむることも思はなかつた。テサロニケには頭の熱した人々が居つて、たゞ主の再臨の外考ふる事も語るまきもせず、その事に心を奪はれて働きもせず、食は他の人々の給與に任せてゐた。パウロはかやうなのらくら者を不快に思つてゐた「働かずば食せざるがよい」これは彼が彼等を處置する敏活な實際的な方法であつた。小心なテサロケ人はかやうな過激な取扱ひをされるのを嫌つてゐたがパウロはそれを彼等に強いた。彼は激烈な感情家ではなかつたのである。

彼はコリントに於ける何人よりもよく異言を語り得た。しかし彼はその才能を濫用しなかつた。彼は人々の呼ぶ「馬の官能」を有つてゐた。コリントに於ける動搖せる、不従順な群衆に向つて彼は此の官能を何處に於けるよりも最もよく利用した。「我もし國語の意義を知らずば、語るものに對して夷人となり、語る者も我に對して夷人ならん。……我なんぢら衆のものよりも多く異言を語るまきを神に感謝す。されど我は教會にて異言をもつて一萬言を語るよりも、寧ろ人を教へん爲めに我心をもて五言を語らんまきを欲するなり。兄弟よ智慧に於ては子供なるな」(哥前一四ノ一一、一八——二〇) 彼は決して、氣紛れな、うはまきを言ふ狂文作者ではなかつた。

彼は自由と云ふ高い教義を維持してゐた。それはキリストが人々を釋放つたその自由を高唱したものである。しかし彼は空論家とはならなかつた。如何にすぐれた理想であつてもそれが、すべての他の理想を押し出すまきは出來ない。「人若し眞に自由ならんまきせば、己れの自由を他人の爲に捨てざるべからず」まきは自由の意味を學び始めたばかりの人々に書いた洞察の鋭い能ある人に由つてのみかゝる眞理は見出さるゝのである。今日に於いて懶巧ではあつてもこれを見出さない人々がある。

パウロは律法を重んずるユダヤ人等と論じて、神の正しい關係に入るに割禮は必要缺くべから

ざるものでないことを。彼がこれほど猛烈に主張したことは曾てなかつた。「割禮をうくるもうけぬも共に數ふるに足らず」(ガラテヤ六ノ一五)を彼は言つた。けれども彼は迷つたのではない。割禮を受けたいことを誇つてゐる人々があつた。そして彼等はこれが特に神に悦ばれてゐることを考へた。パウロはさう云ふ誤つた考を抱かなかつた。「その割禮をうくるもうけぬも共に數ふるに足らず。重要な事は人たることである。これは新たに造らるゝものであり、神の期待し給ふ高級な人である。愛の外は彼の眼に數ふるに足るものはない」。パウロは決して雲の上を歩かなかつた。彼は常に兩足で地上に立つて居た。彼の理想を制限し、彼の興奮を抑制した。これは向ふ見ずの人の性情ではない。

パウロの正氣なことを證するものに十四ある。彼の書簡ミルカの手になつた歴史である。ルカは醫師でパウロを手近に眺むるのよい機會をもつてゐた。ルカにまつてはパウロは迷夢に捉はれたものではなく、彼の心を全く捧げて崇敬して居た精神の健全なる偉大なる英雄であつた。これは彼の物語のいづれの行に於ても氣附くところである。彼がパウロを書き始むるや彼はパウロ以外のものについて書くことは出来得ないことを云ふことを知つた。

パウロの書簡ミルカの記録を前にしてはパウロの精神が不健全であつたことを世に信ぜし

むることは出来ぬ。人が彼の經驗の或るものを説明するに困難なこともあり得やう。しかし我等がその人を全く了解し得ないからといって、彼の精神は必ずしも狂氣せるものとは決らない。我等に來らなかつた經驗を彼が有つてゐることをいふので彼を精神病院に送る權利はない。天地にはなほ我等の心理學の夢見てゐる以上の多くの事柄がある。パウロが癲癇病であるを確信を以て主張して、彼の高潮せる氣分を以て見聞したものを斥け去るが如きは輕率な人である。使徒に信用をおかないこと、又、キリスト教に不評を齎らすこと等は容易なことである。或る人はすべての天才は狂氣であるといひ又ある者はすべての宗教を空想の世界に逐ひ、ある人は地上の生活は苦しき夢以外何物もないと結論する。しかし實際的な必要な仕事にたづさはつて居る健全な心の人々はすべてかやうな妄想と假説を斥ける。心の常態な人は他の人々の心の健全なことを認め、そして多くの人々が狂氣であるといふ皮肉な格言を斥ける。

キリスト教起源に關して風變りな人々の間に一般に行はれてゐる馬鹿らしい解釋が二つある。神秘説とヒステリー説の二つである。第一の説にしたがへば新約書に記された多くのものは物語であり、詩であり、神話である。超自然的なすべての物語は誰もはや確むる事の出来ないおそらくわづかの單純な事實の周圍に集められた空想的な累積に過ぎないといふのである。思索的な才を有つ

たこの派の人々は極端な論議で慎重に發議し且つ議論して曰く「ナザレのイエスはこの世に存在したりしや？」とそして骨を折つて到達した結論はイエスはある神話中の人であるといふのである。

第二の説はおなじく皮相で、信じ難く、聞くに堪へぬものである。そのヒステリー説によれば、キリスト教は磔刑後のイエスを、事實全く見なかつたのを見たと思つた一婦人の幻覺に出でて居る云ふ。彼女はその狂氣じみた事を使徒たちに傳へ、そしてかくして新らしい宗教は世界を征服せんとして出で立つたのであるとする。憚むべきマグダラのマリヤ、彼女は普通の婦人で、不幸にも我等の手にすべき何も書いてゐない、それ故に我等は彼女を詰ることも出来ねば彼女に心理試験を行ふ事も出来ない。彼女をヒステリーに罹つた婦人としてこり除くのは容易な事である。我等は屢屢興奮する婦人あるを見、そして興奮した結果自らの頭腦の外には存在しない或物を想像するのを見る。何故にマグダラのマリヤがその種の婦人であり得ないか。事件は容易に片附く。しかしパウロはかく容易に片附けられない。批評家を困惑せしむるここには彼は一個の人物であり、堅實な、過ちのない性格の人物であつたことである。注目すべき人々で彼を神話の人と云ひ得たものはなかつた。彼について説をなす此等の人々を失敗せしめるここはパウロは多くの書簡を書きそのうち十三は我等の手中にあつて、その書簡の中に我等は彼が正氣であつたこと云ふ證據を澤山有つて居り、

その證據は一朝にして説明し去るを得ないこと云ふことである。この書簡に於いてはたまに見る外、彼は一般的、抽象的なものの圈内に入ることなく日々の生活の具體的な錯雜したもの、中に住んでゐる。彼は質問に答へ、助言を與へ、拒絶をなし、時宜に適した警告を與へ、日々よせ来る出來事に入出し、解きあかしをなし、働きの道を示し、そしていかなる時でも敏活で、達見があつて、そして分別ある心をもつてゐたこと云ふ明かな證據を示して居る。二十世紀の賢明な批評はフェリストスと共に「パウロよ、汝は狂人なり」(使二六ノ二四)といひ得やう。されどその書簡から明かな穩かな、自信あり確信ある聲は來る。曰く「卓越せる批評者閣下よ、我は狂人にあらず、宣ぶる所は眞にして、眞面目なる言なり」

第七章 彼の脆弱

パウロが常に告白しようとして居るのになぜ人はこれを覆はんとするか。彼は最も隠し立てしない人の一人であつた。彼はいつも包み隠さず語つた。子供のやうにあからさまにその奥底の魂を赤裸々に打明けた。彼は時に嚇されたそして彼はそれを承認した。又時に彼は落膽したそして彼はそれをかくさなかつた。また時に彼は失望した。そしてその事を口惜しがることなく漏した。又彼は一度ならず心を痛め落膽した、そして彼はその事を全教會がすべて知り得るやうに書きおこつた。パウロの靈感を語る時に我等の記憶すべき一つの事柄は彼が全世界をして、彼の時々意氣沮喪することあるを知らしめんを欲してゐたことである。彼は荒野に於ける彼の先祖の経験が後に來るもの、すべてに對して警戒と教訓とを與ふるものであるが故に價值あるものであること信じてゐた。かくしてパウロの弱さは激動されんことを望んでゐるすべての人々にまつて啓示の媒となる。

彼の顔を見たことのないローマ人に對してパウロは彼がクリスチャンになるまでの内的生活を披瀝

するに躊躇しない。それは己れを卑下する物語であつたが、しかし彼はそれを語つた。彼はたえず敗北の思ひを以てめぐり歩いた。彼は云ふ。彼は癒し難い意志の弱さを苦しんだ。一般の経験の模範的發表となつてゐる一句に彼は記して曰く、「わが行ふことは我知らず、我欲する所は之をなさず、反つて我が憎むところは之を爲すなり。……善を欲することわれにあれど、これを行ふことなればなり。……われ中なる人については神の律法を悦び、わが肢體のうちに他の法ありて我心の法と戦ひ、我を肢體のうちにある罪の法の下に虜にするを見る。噫われ惱める人なるかな、この死の體より我を救はんものは誰ぞ」(ロマ書七ノ一五、一八、二二、二四)

イエスは彼を責罰の思より釋き放つた。彼がクリスチャンとなつた時、彼は奴隸の如き感じを離れて子供の如き感じに返り始めた。神はパウロの父であり、パウロは神の子であつた。彼は神の家族の一員であつたが、子供の有つ多くの不完全と不確實とを有つてゐた。昔ながらの苦闘は續いたけれどもその苦闘たるや一層高級なものであり又異なつた形式を有つたものであつた。

パウロは敏感な性質であつた。彼は生れながらの臆病者であつた。彼は危険に遭うて尻ごみをした。彼は苦痛に面して辟易した。人々の憎悪と悪罵は彼をずた／＼に切り裂いた。コリントに彼が仕事を始めた時は精神的に墮落した状態にあつた。彼の言葉をかりるならば「脆弱と恐怖と大なる

戦慄の中に彼は彼の仕事を始めた。すぐる數週間雨の如く加へられた打撃の爲彼の仕事はすべて奪はれた。彼がヨーロッパに足を入れて以來、彼の生命は一步毎に惱まされ、危くされた。ビリビに於ては鞭うたれ、獄に投ぜられて後、ローマの吏に由つて市外に退去を命ぜられ、テサロニケに於ては憤激した殺伐な人々から放逐せられた。騷擾の爲餘儀なくされて彼はペロアを去らなければならなかつた。彼はアゼンスの智慧ある指揮者たちから嘲笑された。コリントへ彼は落膽した不評判の人ミなつて來た。全く彼はいつも恐怖にみちて慄へてゐた。コリントに於ける彼の仕事は順調に行かず、彼は會堂を離れ私人の住居で集りをしてゐた。他の場所で行はれたかやうな悲惨な經驗はコリントのいづれに於ても繰返されてゐたやうである。けれども彼は仕事を進めた。しかし彼は恐ろしくうち萎れ、そしてその陰鬱な日々記憶はながく彼の胸中を去らなかつた。

彼の意氣消沈したのは單にコリントに於てばかりではない。彼はコリントを二度目に訪問する途中マケドニヤで經驗した事をコリント人に書いてゐる。それには、彼が最も好む機會を與へられて説教の爲トロアスに到着した時、その働きの如くならずして遂に何事をも爲し得なかつた。彼は云つて居る。原因はテトスの出場に故障があつたからである。そこで彼はトロアスを離れてマケドニヤに入つたが、環境は異つても彼は何の慰安をも得なかつた。彼の周圍は喧争しく、彼の心は怖

れに充ちた。彼は薄暗い豫感に壓迫を感じた、恐るべき想像は彼を落膽せしめた。テトスがコリントより好き音信をもて來る迄は彼は再び己れに返らなかつた。かやうな氣分は恐らく彼には異常のものではなかつた。彼はコリント人に宛て、アジアに於ける他の經驗をも記してゐる。彼はそこにこんな不幸が起つたかを説明しないが、しかし目に見える様に明かな言葉でその状況をゑがいてゐる。彼はそこで挫かれ、起ち得ぬまで壓せられ、やがて死ぬのではないかと思つた。希望の最後の面影は消え失せた。喪心した時に於ける他の多くの人々の如く彼はたゞ墓場より外のものを考へることは出来なかつた。

彼は己れのいかに脆いかをよく知つてゐた。ある日、嘗つて彼に與へられた靈感について語つた後、彼は言葉を添へて「われらこの寶を土の器にもつ」(哥後四ノ七)といつた。徹頭徹尾彼は人間であり、彼自らも充分それに心づいてゐた。彼の敏感は彼の生活を眞面目ならしめ又時に重苦しいものにした。彼は多くの人々以上に強く苦痛を味つた。その苦痛は粗野な人、又鈍感な人々以上に強いものであつた。

彼は彼の經て來た困難を冥想してみる習慣があつた。それはその困難が彼の心に深い傷痕を遺してゐたからである。「我等は到る處壓せられ、惱まされ、追はれ、打たれたり」(哥後一、八)かや

うに彼はコリント人に彼の生活を述べた。晩年になつても尙彼は、彼が永い以前最初の傳道旅行に味つたアンテオケ、イコニオム、ルステラに於ける苦しみを冥想して居た。彼の最終の書簡に於て彼は、その苦しみを述べてゐる。そしてそれは彼の心に尙新たなものであつたことを示してゐる。その迫害、その恐るべき迫害！ ぎうして彼がそれを忘れ得やうか、彼の言葉を讀むものは、彼の戦き練むのを感じるやうな氣がする。

パウロは世界の英雄の班につらなつてゐる。されど我等は英雄を恐怖の犠牲であること、容易く考へることは出来ぬ。英雄は勇敢な人で、勇敢な人は怖れを知らぬこと我等は想像する。しかしこれは我等が英雄に關して無智であることを示すものである。英雄は恐怖に戦かない人でなく、恐怖に戦くが、その恐怖に打ち勝つ人である。パウロは己れの戦いたことを公言して憚らない。かく告白したが故に彼は、勇氣は何かあるか云ふことをよく知つてゐる。人々に評價されて彼の身長に尙尺を増し加へたのである。多くの人々は、彼が曾て臆病な感情を有つてゐたこと云ふことを受け容れらるべくあまりに臆病である。パウロは何事をも包み隠さない。

彼は彼の友ルカに神の助けなくば彼はここに至らなかつたこと告げた。ルカはパウロの歴史中にこの神の助け中の三つの例をのせて居る。一度はコリントに於てパウロの心が沮喪した時、主は夜幻

のうちに彼に告げた。「おそるな、語れ、誰も汝を害ふものなからん」(使一八ノ一〇)と、我等はかく告げられた言葉のうちにパウロの境遇を讀むことが出来る。彼の勇氣は滲み出て居る、「怖るな」と主は言はれた。彼はかくして進むべきか否かに惑つた。主は「進めよ」と言はれた。彼はユダヤ人が彼を捕へ、かつ殺されん事を恐れてゐた。主は「誰も害ふものなからん」(使一八ノ一〇)と言はれた。その夜、彼は彼の恐怖の根據なきことを信じ、なほコリントには彼のなすべき仕事のある事を信する様になつた。

同じやうな經驗は彼がエルサレムに於て會議前の審判の夜彼に來つた。世は再び闇にかへつた。何處にも光がなかつた。ロマを見んこと彼の夢を企てては、微塵に打ち碎かれた。彼はエルサレム城内の獄舎に囚人になつてゐた。ロマへ行く道はいづれも塞がれた。彼の敵は全く彼をその權力の下に捕へてしまつた。エリヤの如くパウロは杜松の下に這つた。主の多くの僕たちにふりかゝつたこと同じ運命が今や彼に及んで來たこと感じた。されどかゝる失望の深みにある間も、なほ小さな聲は彼に囁くのであつた。「雄々しかれ、汝我につきてロマにても證をなすべし」(使二三ノ一一)我等は主が語られたこと告げられてゐる言葉のうちにパウロの心の有様を常に讀み得るのである。神は常に我等の要求に相應じて語る。彼が「強かれ」といふのは、恐怖が我等に打勝たうことして居るか

らである。彼が「雄々しかれ」といふのは我等の深い憂鬱にさざされて居るからである。「汝は慥かにロマに往くべし」といふのは、我等は憧れのロマを見る期待を棄て、しまつたからである。彼は城内の牢獄においていかに望みを失つて居たかをルカに語ることを恥ぢなかつた。しかしその失意のうちに新しい、勇ましい信念は彼の魂に充ち溢れて來た。神に非ずして誰かこの感を造り得やうか。

パウロは幾度も救はれなければならなかつた。我等と同じく、彼はその力にあまる場合に幾度も遭遇した。彼は敬虔な想像を有つてゐる人々が好んで描きたがる物に動じない半神的人ではない。例へば破船の際なき彼は特に普通の人間のやうに感じた。誰にしても海底に沈まうとする船中にあつて、快心の思ひをするものはない。かやうな危険の場合には、人の心は鋭敏に働き、今や實現されずして終らなければならぬすべての計畫の上を走る。人はすべて計畫の期待の束である。そして死が彼の面をみつめる時、彼はしつかり握つてゐたものをすべて離してしまふ。それが偉大なる英雄であらうと、眞の聖人であらうと、行方も知らぬ颶風に追はれ、晝も夜も見えず星も見えぬ空の下に、帆を下し、積荷を海に投じて、遂には船そのものをさへ沈めてしまはなければならぬその場合に。なほ希望の燈を燃やして置くことは出來ない。ルカは「我らの救はるべ

き望つひに絶え果てたり」(使二七ノ二〇)と言つて己れをパウロにも絶望の仲間に入れてしまつた。パウロは他の人々と同じく一旦は恐怖に沈められたが、しかし神は遂に彼を救はんとして來た。夜になつて彼の魂に壓へ難い確信が湧いた。彼はそれを神の使ひと呼んでゐる。その聲に「パウロよ、懼るな、なんぢ必ずカイザルの前に立たん」(使二七ノ二四)と來る日も、彼は獨言つた。「ロマ何かあらん」と。遂にその前途は明かになつた。それは神に與へられたものである。彼は勇氣のある人であつた。けれども舵なき船のうちに、颶風で凄じくなつた暗黒の空の下に狂猛な海の上に、日なく星なき十四日を過して、しかも神の助けなしにその救を望み得るほご強い人ではなかつた。イエスは嵐のうちに眠ることが出來た。

彼はテサロニケ人に彼の爲めに祈らんことを求めた時に又彼は弱さを告白して居る。彼は使徒であつた。けれども祈の時に彼の手を支ふべき身分賤しき男女の助けによらなければその仕事の成就することが出来る程強くなかつた。彼は勿論自ら祈つたけれどもその祈だけでは充分でなかつた。彼の仕事は彼の力にはあまつたので、したがつて他の人々が彼を援けて神の恩恵の通路を開くやうにしなければならなかつたのである。

彼はエペソの人々に彼が大膽にその口を開き得るやうに祈らん事を求めた、大膽に口を開くのみ

臆病に、辯解的に、やさしく口を開くこの間に大なる相違がある。囁きを以て語るのも一つであるが、それは口にラツバをあて、それを吹き鳴らして、悪心ある人々の全階級を激動せしむることは遙かに異つてゐる。その時代の人々の生活に強打の痕をミッむるものはたゞかく大膽に語る人のみである。ラツバを吹かない人は人を導くことは出来ない。パウロが語るべきことを大膽に語り得るやうに人々の祈をもこめたことは我等にある疎然たる驚きをもたらず。彼は時に用心深く語るやう誘はれなかつたであらうか、彼は人の感情を害する様な眞理を語らずにゐたであらうか、彼は批評を受け又は誤解を招くを見ては言葉の調子を下げたり、誤つた思想や、悪い習慣を罰せんとする彼の熱情を抑へたり又人に對する彼の非難の角を鈍りへらしたりすることがあつたらうか。かう云ふことは勿論彼にあつた。他の使徒たちも屢々誘惑されたのである。パウロはエペソ人への願ひの中に於いて、彼が折々福音を宣べ傳へる調子を下げたことを告白して居る。その口を大膽に開き、そしてキリストが世に示された全眞理を充分に自由に宣傳してゆくことは非常な困難なことであつたので、彼にはすべての改心者を招いてその援をもミむる必要があつたのである。全教會はパウロをして大膽にその口を開き得る迄に強からしめんまで膝まづいた。その壯年の日からたづさはつてゐたパウロの争闘は種々の形になつて彼が生涯の終りまでつゞいた。そのいかに烈しい争闘であつた

かは彼がそれを述べるのに利用した比喩に明かである。彼はそれをちやうど闘技に於て、その力ミ技が勝利になくてならぬものであることに譬へた。で、彼はコリント人に語つた。彼にミつても彼等にミつても、人生は一つの戦ひであり彼は常に戦ひつゞけてゐる、ミ。彼はある人の如く盲目的に空氣を撃つ様なことはせずに、彼の敵手即ち低い自我にしっかりと眼をつけて進んで行つたのである。改譯に用ゐてゐる言葉によれば「我はわが體を打つ」ミパウロはいつてゐる。けれどもこの「打つ」なる語はパウロの用ひようとした本當の意味を表はしてゐない。彼がいつてゐるのに「われわが身を傷く、その傷痕の現はる、迄、強く撲つ」ミ云ふのである。彼は、如何にして神に受け容れられるかを他の人々に語つた後、彼自ら神に斥けられはしまいかミ云ふ恐怖につきまこはれたので、その恐怖に打勝たん事をかたく決心したのである。これは己れの弱さを痛切に感じてゐる人の言葉である。

彼の精神的の脆弱に伴つて、肉體的の病弱があつた。その何であつたかは我等には分らぬ。彼は驚くべき體格をもつてゐたが、他の多くの強壯な人々ミおなじく、病に對して免疫ではなかつた。時ミしてはその病は痛ましくも彼の仕事の妨げをなした。我等に傳へられてゐるところによれば、或る場合には彼はその爲めに全部の計畫を變へなければならなかつた。ガラテヤ人に傳道しようミ

して定めた順序を變へたのは全くある肉體的の惱みにもとづくものであつた。しかし病は彼に不利ではなくかへつて彼を援けた。ガラテヤ人は彼の爲に悲しみ、彼等の心は愛と尊敬をもつて彼に走つた。彼等は神の使者よりの傳言なりとして彼の傳ふるものをうけた。かやうにして脆弱の中にあつて彼は強くなつた。

彼の肉體的の弱さが一層彼をガラテヤ人に近づけた如く彼の精神的の弱さは一層彼を我等に近づける。宿命説や、豫定説を眞面目に説くパウロは、ちやうど哲學的なオリンパス山に坐する神のやうである。我等は彼の居るころへ近づくころは出來ぬ。又彼等が我等の弱さに動かされることふここを感じずるころは出來ぬ。しかしパウロは戦くほざいたく脅かされた人であり、感情の昂ぶる爲にその仕事に意を注ぐころが出來なかつた人であり、ある時は陰鬱になつて福音を宣べ傳へるころが出來なかつた人であり、神に引き出さるゝ迄落膽と焦燥の沼に落ちてゐた人であり、死ぬかと思ふ程意氣消沈し、神経質になつた人であり、法廷に於て多數の高位の人々の面前ですつかり感情に走つて謝罪しなければならぬ様なことを言つた人である。そのパウロこそは彼の鼓動を以て我等を助けるものである。なぜなれば、彼はたしかに我等の兄弟であるから。我等は一人の伴侶を要する程に神宣を要するものではない。我等を最も援けるものは哲學者ではなく、友人である。我等は

聖者を要するけれども、それは中世紀の型にはまつた聖者ではなく、新約の語にあるやうな、神に身を捧げ、聖と呼ばれ、過ちと失策のうちにあつて天の使命に値する生活をしようとする正直に努力した人である。

曾ては恐怖の悶を感じついに之に打勝つた人、落膽の淵に陥つても再び攀ぢ上つた人、破れても失望させられても絶間なく進んで行つた人、たえず鍛錬され叱責されんことを要する性質をもちながら、冠を戴くまで善き戦を續くる人、その人に勇氣を與へられんことを世界は永久に要求する。落膽と憂鬱と、陰い前兆と、陰鬱な想像と、沈んだ心と孤獨の心持と失望の苦しみと心配と迷ひと争闘と苦悶と、かやうな事柄に於て彼はまさに我等の兄弟である。イエスは決して敗れなかつた。彼は我等の先達である。パウロは敗れた。彼は我等の伴侶である。

第八章 彼の剛健

パウロの傳記と書簡を読むものに第一に印象を與へられるものは彼の弱さでなく、彼の強さである。弱さは忠實に示される。けれどもそれは目に觸れない。我等の前に立つのは弱い人ではなく、強い人である。第一に我等に來つた彼は充ち溢れた精力を有す、屈しないそして征服心を有つた人であつた。彼は男子や婦人を法廷にひき、法廷は彼等を獄に投じ、死刑に處して居た。彼は迫害にかけては倦むことを知らなかつた。そしてそれを遠い町々に迄及ぼした。これはパリサイ人たるパウロである。しかしクリスチャンとしてのパウロも矢張同じ様に專横である。彼は幾度か境遇を支配して居る。ルカの歴史の終りのページには囚人として送られてゐる彼が三百人の嚮導となり、事實上の船長となつてゐるのを見る。彼の坐する處、彼は常にその席の首位となつてゐる。

人はその境遇を支配することによつてその力を示す。弱い人々は起り來る事件の奴隷となる。彼等は環境の鑄型に流し込まれる。強い人は己れの進歩の爲めにその境遇を利用する。若しそれが逆

境ならば彼はそれを一層敏活に、うまく利用する。彼はそれを變じやうとするのではない、けれども、それを以て彼の精神的富に加へるどころあらんとするのである。彼はその面を吹く風の方向を變へる事は出来ない。けれども彼はそれから刺戟を得る。そしてそれは彼を助けて行くべき方に進ませる。彼は彼の逆航してゐる流れを轉ずる事は出来ない。しかしその流れに競ふことによつて目的地に到達し得る力を一層増し加へる事が出来る。彼はその環境から遁れる事は出来ないが、しかしそれから彼の成長しつゝ、ある魂の營養となる養分を引き出すことは出来る。パウロは境遇が彼を傷け又征服する事を決して容さなかつた。彼が住んでゐた世界は彼を破ることに全力を盡したがしかし全く不成功に了つた。「艱難をうくれども窮せず、爲ん方つくれども希望を失はず、責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず」(哥後四ノ八)と云ふやうに彼は彼の生活を喜びを以て叙した。彼は一つ一つの經驗をある一層の高處に進む一階梯として用ひた。彼は全ての貧しきものを富めるものに更めて居る。彼の生涯の最も強い失望は囚人となつてロマへゆく事であつた。されども彼の鎖は彼を挫き、彼を倒すことは出来なかつた。かへつて彼はそれを用ゐて彼の主張を進める道具にした。彼は法律によつて一兵士につながれてゐた、そして兵士はパウロから離れ得ないやうにパウロは兵士から離れ得なかつた。これはパウロがイエスに關して兵士に語り得る機會となつたの

である。兵士が後から／＼任務につくにつれて、パウロは數ヶ月のうちに彼の傳道に耳を傾くる可成多數な人々を得た。新しい宗教の精神は次第にロマ軍隊の心に滲入して來たのである。パン種のやうにそれはカイザルの宮殿に働き出したのである。そのみならず、彼の鎖はロマに於けるクリスチャンの恩恵の手だてになつた。彼等が如何にパウロが苦難を負ふてゐるかを見た時彼等の勇氣は復活して來たからである。鎖は彼等を壓しなかつた、けれども彼等に元氣を與へた。彼等は如何にパウロが鎖を超越して居るかを見て彼等自らの無能力を忘れて、そして征服者の語調で語り初めた。

彼の仕事を進む爲めに彼の用ゐるこゝの出來ない困難も悲しみもなかつた。彼の敵である人々の説教さへも又キリストの精神に反した得手勝手の教を宣傳する人々の説教さへも彼に愚痴を云はせる様なことはなかつた。キリストの名が從來聽かれなかつた人々に傳はつてゐる云ふことは彼を愉快にした。そして、彼は單なる名も、好奇心を惹き一段の研究に資するものであると思つた。氣の弱い人は誰か眞理を轉倒しはしまいか恐れ常に狼狽してゐる。完全な正統な福音に及ばない物は——正統な福音は、彼等の考へに浮んで來るものである——世界を履すに違ひない。斯様な恐怖は其人の柔弱が造つたものである。パウロは愚かな事にも、不正な事にすらも當惑せず、

常に悦びを失はないほぎ強かつた。彼は弱き時にも誇らるゝ時にも、苦しみの時にも、迫害せらるる時にも、危難の時にもなほ楽しいと斷言した。彼はこれらのものそれ自身の中に樂しみを見出したのではない、けれどもこれらのものが生活の長さ、廣さ、高さ、深さを彼に學ばしむる爲めに彼に與へた機會の中に樂しみを見出したのである。弱さは彼に強さ云ふ一層深いところにある貯水を汲みこむ機會となり、誹謗は彼の自制力を發展せしめかつ示しゆく機會となり、困難は自覺の一層廣い野にその戸を開き、迫害と危難とは人に當つてゆくに一層の大なる場面を提供した。普通の人をして呻吟せしむる事柄にも笑つて當り得るのは唯強い人のみである。マルタの島に於て、パウロにはその手にくつついた毒蛇を火中に振りおこした。これは彼が始終やつてゐたことである致命的危険が踵を接して彼に迫つたけれども、彼はそれらすべてを振落して、觀衆の愕きの中にいさゝかも傷はれず直立した。

すべての人は征服せられなければならぬ世界をそのうちにもつてゐる。弱い人は彼の内なる自我を征服し得ない。パウロはたえずその意向や感激の餌食となり、その氣分、心持の犠牲になつて居る。彼にして肉體的缺陷を有つてゐればそれは彼を弱め又苦しめ、若しそれが彼を痛めぬならば彼に短氣か悲哀を齎らすのである。誰の眼にも見える肉體的缺陷を抱いて週七日を押し通してゆく彼

は餘りに強かつた。彼は淺薄な批評家の評論を侮蔑を以て聽いた。そして勝ち誇つて彼は己れの道に進んだ。批評は其處に止るべき價值ある人をその講壇より逐ふことは出来ぬ。しかし人の力の充分に試験せらるゝのはその敵手に由つて、なくその友に由つて、ある。敵に害はれたるよりも友によつて害はれたる人は多い。友の感情を害ふまか、その期待を裏切るまか、その賛成しない道を進むまかいふ事は感じの鋭敏な人には痛切な悲しみを齎す。人は彼の友に拮抗し得る爲めにあらゆる力を集めることを要する。パウロはすべてを捧げて彼の改心者を愛した。彼は友情には特に勝れてゐた。そして愛情の舉動ほど深く彼を動かしたものはなかつた。彼が貧しきクリスチャンの爲めに集めた金を携へてエルサレムに出で立つたとき、彼の友はその出發を止めた。彼等は彼がそこへ行かうとするところは危険であること云ふことを指摘した。

彼等はほとんど間違ひなく起るべき出来事を暗い色を以て描いた。彼等は繰返し繰返し、反對を唱へ、最も愛情のこもつた願を彼にあびせかけたのであるが遂に彼は彼等に説服せられなかつた。往くのは彼の義務であつて、誰も横道にそらす事は出来ない。彼は思つた。ミレトスに於ける友人がエルサレムに於て彼にさういふ事があるかも知れぬ。いつた事を彼は承認して、彼は再び彼等を見ることは出来ないだらうと告げた。彼の頬に涙があつたが、しかし彼は眞正面にエルサレムに進

むべく彼の面を向けた。彼は町々を次ぎから次ぎへこ歩いて、獄舎と苦難とが彼をエルサレムにて待ちつゝあるを告げられた。しかしかやうな豫告も彼をして引返さしめなかつた。彼の一つのねがひは彼の生命を長からしめることではなく彼の仕事を成就することであつた。そして其金をエルサレムに運ぶまでは彼の仕事は成しこげられなかつたのである。彼の意志の粘着力は非常なものであつた。彼がカイザリヤに着いた時には、反對は益々熱烈になり手ひきくなつたが、遂に彼をさうするところも出来なかつた。彼等は彼の心をひきく動かしただけれど彼の決心を弱めることは出来なかつた。ルカが彼を往かせまいとする人々の仲間に入つて彼に思ひ止まるやうねがひだした時は、パウロはルカの眼に涙を見、彼の唇から願ひの言葉を聞いた。彼の心は戦いた。そして悶への中に彼は云つた。「なんぢら何ぞ歎きて我が心を挫くか。」(使二一ノ一三)と。その後は何んとも云ふ者はなかつた。馬は用意せられてエルサレムに向ふ最後の場面に歩みをうつされた。イエスがエルサレムに行く途上ペテロを斥けたやうに、パウロはその無二の親友ルカを捨てた。二人ともなほうべきバプテスマがあり、そして二人ともその事の成るまで引き離された。

人が力を示すのは嵐の時である。パウロはクリスチャンとしての全生涯を嵐の只中であつて過した。神の教會は多くの暴風に吹き拂はれた。けれども使徒が教會の根柢を動揺せしめた當時の大争

は大なる力を要する。パウロは肉體的の悩みをもつてゐた。彼はそれを「肉の棘」を呼んで居た。彼は神にそれを取去られん事を願つた。幾度もなく彼は神に祈つた。しかし棘は取去られなかつた。そしてある日彼は神が彼に得せしむるを欲し給はぬ事を得なくとも充分やつてゆける事を發見した。是は大なる發見である。其爲彼は、力は弱きとを通して來り、そして其弱きとは力を支配し得るに云ふ事實に目覺め、人が己れの力の缺乏を最も強く意識した時程永遠の力を強く感ずるとは無いに云ふと彼は恐らく初めて體得した。彼は自らに言つてゐる「我弱き時に、強し」云。

パウロは氣分の多い人であつた。感じの強い人にあり勝ちなやうに、彼の氣分はそのうちに潮のやうな力をもつてゐた。多くの人は己れの氣分に囚はれて居る。その氣分は日々の計畫を支配するとしてそれは確乎たる彼の決心を破壊したり、彼の計畫をすべて一掃する。力のある人はその氣分を統御し得る。彼は爲したいから爲すのでなく、爲すべきであるから爲すのである。彼は岸に身を凭せてをりた時、職務に呼ばれ、ば帆をあげ舵をこつて勇敢に沖に出る。彼は働きたくない時、新たな勇氣をもつて仕事に當り、そしてなほより以上の働きの計畫をたてるのである。パウロは彼の最も沈んだ氣分にさうしてうち勝つたかを語つてゐる。それはコリントに於て、あつた。彼はあさから後へ既に四つの市から放逐せられた。そして今はコリントも彼をおなじやうに扱はうとし

て居た。コリントはパウロを侮蔑の冷笑を以て見下してゐた。彼の心は心配と憂鬱で重くなつてゐた。彼は彼のさるべき道を易へるか左もなくばこれを放棄しやうとする衝動にかられ、その衝動は咽喉まで來て、そこでおさへられてゐた。彼は從來こつて來た道を眞直に進み、イエスを約束せられたメシヤを宣言しやうと心に定めた。彼はユダヤ人の怒をかひ、ギリシヤ人の侮蔑をうけたイエスの苦難を、その辱められた死を高唱しつゝ、進まうと決心を深くした。柔弱な素質の人々は批評に脅かされ反駁の爲に勇氣を挫かれる。強い人は畏縮もされねば逃げもしない。パウロは批評に對して氣を配る人であつた、そして人々の善い意見を懇願した。しかし彼はコリントの群衆の好みに應ずるために彼の態度を易へまいと決心したのである。彼は希臘派の流儀を用ひやうとしなかつた。彼は修辭や雄辯の技巧を使つてその聽衆を迎へようとしなかつた。洗練した話し振りを推奨はしたがその魅力に頼らうとしはしなかつた。彼は單純に明瞭に神の彼れに語れと望むところを語りつゞけやうとした。講壇において弱い人は博識振らうとして誘惑に陥る。多くの人は學者らしい態度をこつた爲めに説教者としては失敗してゐる。人が、教養ある、そして社會的の高い地位の人々に喝采されん事に意を勞し、喝采を得んとしてその宣べ傳へることを縫箔し弱めるならば彼は懶巧だに云ふ御世辭は得やうが、強者の列には入り得ない。パウロは雄辯を賞する世俗の要求に捕はれるに

は餘りに強かつた。彼は淺薄な批評家の評論を侮蔑を以て聽いた。そして勝ち誇つて彼は己れの道に進んだ。批評は其處に止るべき價值ある人をその講壇より逐ふことは出来ぬ。しかし人の力の充分に試験せらるゝのはその敵手に由つて、なくその友に由つて、ある。敵に害はれたるよりも友によつて害はれたる人は多い。友の感情を害ふは、その期待を裏切るは、その賛成しない道を進むは、かゝる事は感じの鋭敏な人には痛切な悲しみを齎す。人は彼の友に拮抗し得る爲めにあらゆる力を集めることを要する。パウロはすべてを捧げて彼の改心者を愛した。彼は友情には特に勝れてゐた。そして愛情の舉動ほど深く彼を動かしたものはなかつた。彼が貧しきクリスチャンの爲めに集めた金を携へてエルサレムに出で立つたとき、彼の友はその出發を止めた。彼等は彼がそこへ行かうとするところは危険であること云ふことを指摘した。

彼等はほとんど間違ひなく起るべき出来事を暗い色を以て描いた。彼等は繰返し繰返し、反對を唱へ、最も愛情のこもつた願を彼にあびせかけたのであるが遂に彼は彼等に説服せられなかつた。往くのは彼の義務であつて、誰も横道にそらす事は出来ない。彼は思つた。ミレトスに於ける友人がエルサレムに於て彼にさういふ事があるかも知れぬ。いつた事を彼は承認して、彼は再び彼等を見ることは出来ないだらうと告げた。彼の頬に涙があつたが、しかし彼は真正面にエルサレムに進

むべく彼の面を向けた。彼は町々を次ぎから次ぎへ歩いて、獄舎に苦難が彼をエルサレムにて待ちつゝあるを告げられた。しかしかやうな豫告も彼をして引返さしめなかつた。彼の一つのねがひは彼の生命を長からしめることではなく彼の仕事を成就することであつた。そして其金をエルサレムに運ぶまでは彼の仕事は成しげられなかつたのである。彼の意志の粘着力は非常なものであつた。彼がカイザリヤに着いた時には、反對は益々熱烈になり手ひきよくなつたが、遂に彼をさうするところも出来なかつた。彼等は彼の心をひきよく動かしたけれど彼の決心を弱めることは出来なかつた。ルカが彼を往かせまいとする人々の仲間に入つて彼に思ひ止まるやうねがひだした時は、パウロはルカの眼に涙を見、彼の唇から願ひの言葉を聞いた。彼の心は戰いた。そして闘への中に彼は云つた。「なんぢら何ぞ歎きて我が心を挫くか。」(使二一ノ一三)と。その後は何んとも云ふ者はなかつた。馬は用意せられてエルサレムに向ふ最後の場面に歩みをうつされた。イエスがエルサレムに行く途上ベテロを斥けたやうに、パウロはその無二の親友ルカを捨てた。二人ともなほうべきバプテスマがあり、そして二人ともその事の成るまで引き離された。

人が力を示すのは嵐の時である。パウロはクリスチャンとしての全生涯を嵐の只中であつて過した。神の教會は多くの暴風に吹き拂はれた。けれども使徒が教會の根柢を動搖せしめた當時の大争

論に越した暴力はない。使徒等は異邦にイエスの宗教を陳ぶるに共に直ちに一箇の疑問に面した。「キリスト教及びユダヤ教の關係如何」ユダヤ教に聖典あり、神なる制度あり、聖き律法があるがユダヤ人のクリスチャンは之を如何に取扱ひ、異邦人のクリスチャンは之を如何に處するか。人がクリスチャンとなる時に尙モーゼの律法に拘束せらるべきものか。イエスはモーゼを無視したか。例へば割禮の如き果して永遠の確實性を有つてゐるか。創世紀には割禮は神の命令とせられた。イエスはこの命令を削除せられず、却つて律法の一言一句も遂げられずにしまふ事はないと語つてゐる。して見れば割禮は救ひには本質的のものではないが、異邦の改宗者がなぜ割禮せられてゐるのか、モーゼの律法に服従せずして、人はクリスチャンたる價值があるか。ユダヤ人の祭節、レビの儀式が神の定め給ふものであるならばすべての人は神を喜ばす爲めに之を守つてはならないか。かやうな問題に就ては善良な人々の間には確かに意見の相違がある。イエスに従ふ多くのユダヤ人には生命の如く價值ある信仰を直ちに放棄したり、又彼等の愛情と行爲とに深く織り込まれた傳説、習慣を捨てたりする事は出来なかつた。今迄彼等が守り、爲めに彼等に役立つた事は同時に他の人々をも利する事であるに違ひない。彼等が考へたのは自然であるといはねばならぬ。神に命ぜられたユダヤ人の儀式がユダヤ人の魂の養ひとなるものであるならば何故に同じ儀式が異邦人の救ひの

爲めに働き得ないか、ユダヤ人に豊かな祝福を齎したこの教に、異邦の兄弟も従ふべしと主張するのはユダヤ人なるクリスチャンの義務でなかつたか。しかしこゝに他の見解があつた、そしてこの見解はパウロには正しきものであつた。パウロは考へた、「宗教は律法に従ふことではない、イエスキリストとの人格的關係にあるものである」こゝに割禮は永遠の拘束ではない。ユダヤ人の祭も永遠に續けるべきものではない。レビの儀式も代々永久に互るべきものではない。宗教は儀式でなく靈であり、奉ぜらるべき教儀でなく、こゝに行はるる儀式でなく、まさに生きて行かねばならぬ生活である。儀式は決してクリスト教の本質では無い。人は宗教的だといふのは、制度や律法に従ふからではなくしてその心に神の生命を有つからである。それ故に人はキリストに由つて新たな人となると同時に彼はモーゼの轡より自由なるを得るのである。

教會の生命を脅かした大なる争論中にあつて、パウロは恰かも自由の爲めの闘士の如く現はれた。「キリストは自由を得させん爲めに我らを釋放し給へり、されば堅く立ちて再び奴隸の轡につながらな」(ガラテヤ五ノ一)。この語は彼の永い戦ひの中にあひこまばであつた。彼は自由の爲めに身を捧げ自ら戦士になつた。彼は常に守勢をこつた。常に新手の攻撃に對し身を守つてゐた。又彼は常に守勢をこつた。そしてキリスト教を儀式や律法の宗教に引下す努力に對しては怖ろしい打撃を與

へてゐた。かやうな決斷力ある人のみが、内より來る反對者の面前にその主義を主張して行き得るのである。パウロは人の感受性に對して鋭い感じを有つてゐた。彼はすべての人をキリストに來らしめんとすすべての人に當るにすべての者なる習慣を有つてゐた。彼は無用な攻撃はしなかつた。彼はエルサレム教會に於ける露はな反對を身に受けまいとして骨折つた。彼は平和の紐で靈的統一を維持せん爲めに全力を盡した。彼の根本的原理を枉ぐる事は彼のなし能はざるころであつた。多くの人々は平和の爲めによく讓歩する。ほんごすすべての事を讓る。要求を通す爲めには大抵は妥協する。他人の感情を害すまいとし、不和、分裂の危険を避くる爲めには遂に彼等の主義をも賣り、世を困惑せしめ、そして後人をして、それから脱れ出る爲に高い價を拂はしめる。頭は間違つてゐても、良心のある、決斷力に富んだ人々をして彼等の欲するがまゝにしておくころは平和を増す所以である。善良な意志と間違つた考へを有つた人々が宗教を墮落せしめようとするのを救ひ得るのは特別な力を有つた人のみである。教會は悪人の強きころに苦しむよりも、より以上に善人の弱きころに苦しんでゐる。

ユダヤ人との此の争に於いて、キリスト教の全將來は危險に瀕してゐるころを見て取つたパウロは鼓舞せられた全勢力を傾注して争闘の中へ躍り込んだ。ガラテヤ人に宛てた書簡はその力を深刻

に表現したものである。「それは雷霆の一束である。これを鍛へ、擲つた者はまさにジュピター型の人であつた。彼はガラテヤ人に會て彼がエルサレムにて爲したる事を語つた。彼は希臘人の改宗者テトスの割禮申込を蹂躪した。この割禮は、ある有力者の指示によるもので、これについて彼は「我ら一時も彼等に譲り従はざりき」と言ひ放つた。「一時も従はざりき」は日時計を用ゐてゐた時の人の句である。時計を用ゐてゐる今日の我等は「一分も従はず」又「一秒も従はず」といふ處である。かくて彼はテトスの割禮申込には瞬時も聽くころをせず、かういふ考へを跳ねつけてしまつた。エルサレムに於ける彼は保守といふ暑くるしいベットにあつた。そしてその周圍を取巻いてゐる人々は熱心で誠實で、又彼の如く良心の強い人ばかりであつた。テトスが割禮されなかつたといふのは彼等には怪しからぬ事に見えた。この人に割禮するころは容易なころであつたらう。彼の割禮こそは攪亂された水の上の油になつたころであらう。かく割禮を主張する側にはエルサレムに於ける高い權威の人たちもあつたが、しかしパウロはその時すべての權威を斥けた。人が大なる名聲を有ち高い位置にあるからと云つて、必ずしも他の人が彼の意見を容れなければならないと云ふころはない。たごへヤコブ及全教會が彼に反對するころしても彼は依然彼の立場を守つたころであつたらう。枝葉に關しては蠟の如く讓歩してゐた彼も、根本の問題になれば燧石の如く堅かつた。キリ

ストは人々を自由にせんが爲めに死した。そしてパウロはその自由を維持する爲めには最後の防禦線まで戦はんとしてゐた。

戦は單にエルサレムに止まらずしてアンテオケも同じであつた。この自由思想の場處に於いてすら、キリストの依つて以つて人を釋き放つた自由の爲めに努力する必要があつたのである。ユダヤ主義者等はごこへでも往つた。彼等は口が達者で巧いことを言つた。彼等はパウロの後を逐ふて町から町へこつけまはした。そして到る先きくゝの集會に不信任の種を蒔いて行つた。パウロの仕事を轉倒する爲めには彼等は全力を注いだ。ペテロも雖もアンテオケに於てはその自信を固守し得なかつた程の印象を彼等は残した。バルナバも又これに屈服せざるを得なかつた。しかしパウロは起つた。そして彼等は凡てに反對した。キリスト教の二大都市に於て彼は苟くもキリスト教をユダヤ教の改約みなす凡ての者に對して挑戦の凄しいラツパを吹き鳴らした。彼はすべての時代に向つて宗教は儀式にあらずして心の問題であるを宣言した。人はキリストに由つて新たに造らるゝ、時にクリスチャンであり、しかしてキリストに由つて新たに造らるゝと共に彼は自由である。たゞ偉大なる力の人が人類の爲めにこの勝利を贏ち得たのである。それがキリスト教を世界的にし又最高の宗教に仕上げたものである。

第九章 彼の誇り

誇は美德である。しかしこれは往々にして惡に流れ易いので一般の人々にはこの美德の本來の位置がハッキリ見えない場合が多い。その本質に於いては、誇は氣高い精神、人格的尊嚴、眞價の高い道念であるが、こもすればこの心の状態は驕慢に陥り、驕慢から尊大に、尊大から横柄に横柄から輕蔑に互つてゆく。それは又自惚云ふ虚榮に、見せつけの愛に、賞讃を求め過ぎる心に墜ちて行く。パウロは、銜つたり誇つたりしなかつた。パウロは氣高い心を有ち、己れの尊嚴を辨へ、己れの無價値を示す事柄には恐れを有つてゐた。希臘風に言へば彼は貴族であり、上流階級の一員であり、國家の最良市民の一人であつた。これをローマ風に云へば、パトリシアンで、プレビアンと區別せられた貴族の一員であつた。これをアメリカ風に云へば、古い名譽ある家族の一員たるブルジョアであつた。

彼は彼の民族を誇つてゐた。城廓の階梯より騷擾の一團に面した時彼は「我はユダヤ人なり」

いふ語から語り始めて居る。彼は深い誇りの音調をもつてかく語る。彼はその民族の罪に關して無頓着であつたのでないけれども彼はその美德を、功績を忘れなかつたのである。彼はよし割禮を尊重しなかつたから言つて、人々をして彼がユダヤ民族の特殊なそして無雙の位置を否認したことを考へさせなかつた。若し彼の教へる處に謬なくば、果してユダヤ人の優れた處は何處か問ふものに對し、彼は答へて「先づ第一に彼等は神の言を委ねられたり」と云ふ。ユダヤ人等が彼を變節者、叛逆者として取扱つた時に、彼は「我はヘブル人中のヘブル人なり」と言つて人々をしてそれを忘るる事なからしめた。彼の敵がその祖先を誇れば彼もそれに負けてはゐなかつた。「彼等はヘブル人なるか、我も然り、彼等はイスラエル人なるか、我も然り。彼等はアブラハムの裔なるか、我も然り」と、彼は變らざる愛をもつて祖國の人々を愛し、そしてその一員である事を榮譽とした。

彼は己れの氏族についても誇をもちそのベニヤミンの氏族たるを以て自ら任じてゐた。ベニヤミンは小さな氏族であつたが、勇氣を献身の念に充ち、古へより多くの戰場に名を成したものである。「神は全き武具を鎧へ」とは熱烈な奨励として進むベニヤミンの武人氣質の熱情であつた。彼はそれを書簡に露はに記してはゐないが、疑もなくその名を誇つてゐた。彼は王と云ふ名を有つてゐた。彼は自國の宗教を神を畏るる先祖たちについて誇りを有つてゐた。彼はユダヤの慣例に従つて八日

目に割禮を受けた。彼はそれを誇つてゐた。その両親は律法の謹嚴な遵奉者で、共にパリサイ人であつた。彼自らもパリサイ人であり、この事實を彼は喜びとした。かく彼は名を愛して、これを捨てなかつた。彼がクリスチャンになつて幾年かの後に於てすら、なほ自分をパリサイ人と呼んでゐた。エルサレムに於ける會議に立つ時も、彼は「兄弟たちよ、われはパリサイ人の子なるパリサイ人なり」といつた。これは彼が會議を分裂させる爲めに眞實ならぬ事をいふ偽計ではなくて精神的事實を穩かに陳述したものであつた。その根本的態度、見解に於て彼は常にパリサイ人であつた。パリサイ人はユダヤの教會では最も敬虔な靈的な人々であつた。宗教的價値に最も重きを置き、宇宙人生について靈的解釋をしてゐた。彼はかくの如く神に對して最も忠實なしかも全世界を彼に來らしむる爲に最も熱烈に努力するこの教派に屬してゐるのを喜んでゐた。彼は一個のパリサイ人であると同時に一箇のクリスチャンであつた。

パウロは彼の市にも誇りをもつてゐた。その市はパレスティナにはなかつたが、有名な榮譽ある市であつた。シリヤの一大商業地で、榮あり、富ありそして學府として世界的に重要な一地點であつた。學生たちが他の多くの國々から集り來るに共に、その地の哲人や學者は世界を啓發する爲めに遠く出て行つた。このタルソはパウロの生地で、彼はそこに生ひ立つた。クラウデア、ルシアス

が彼をエジプト人に間違へたときに、彼は尊嚴な答へで彼に酬ひた。曰く「われはタルソの市民なり」。

彼はまたローマの市民たることを誇りしした。これは彼の父から傳つて來たもので、その齎らす權利を彼は値高く見た。エルサレムに於ける軍隊の首領が彼を打つ様に命じた時に、彼は柱に取りつけられるまでは何事も語らなかつた。そしてそれから百人の長に向ひ「ローマ人たるものを罪も定めずして鞭つは正しきか」を、そこで百人の長はこの言を首領に告げ、首領はパウロの許に急ぎ來つて「なんぢはローマ人なるか我に告げよ」を言つた。パウロはその目に誇りをたへて「然り」を答へた。「我も亦ローマ人なり。我は多くの金をもてこの市民權を得たり」を首領は言つた。之に對つてパウロは徐ろに「我は生れながらのローマ人なり」を答へた。パウロを鞭つて命ぜられた人々は直ちに彼を免じ、首領は法律の承認以外のことに互つた爲めにこの囚人が如何なる困難を彼に持ち來すかを慮れざるを得なかつた。

パウロは以前にも無知な不注意なローマの役人の取扱をうけてゐる。ピリピに於ては審問なしに鞭たれ、彼がローマ人か否かを確める事もなく獄舎に投ぜられた。朝になつて上役は警吏たちを遣はして囚人たちを釋放せよを命じた。この喜ばしき報を携へてパウロはシラスに臨んだ獄守は戸を明

け放して彼等に出でよを云つたが、驚くことには彼等二人は依然その場を去らなかつた。誇りを傷けられたパウロは警吏を戒めようを決心した。彼は云つた。「かくては我出づるまで、彼等は罪を定めずして公然に我を鞭ちたり。今や彼等は公然に我をつれ出さざるべからず。彼等自ら來りて我等を連れ出せよ云へ」使一六ノ三七假令それがローマの警吏であつても、その土足に踏まれる事を潔しめない。高潔な精神を、斷乎たる決心を有つた旅人を見て、驚いたことには流石の警吏たちも彼につかまつてしまつた。役人たちはやつて來た。そして前にかはつて、和かな聲を穩やかな動作と多くの辯明をもつて、パウロの心をなだめようをひたすら力めた。赤面して役人たちは手づから二人の囚人を舎外に出し、一度通りに入るに共に速かに町を去れを強制した。しかしパウロは急がなかつた。彼は逃げようをしなかつた。彼は警吏の見てゐるところで逃げようをしなかつた。彼は徐々に歩をうつしてルデヤの家に至り、集會をなして、改心者たちに奨励し慰籍の言葉を與へ、彼がなさんとする事を全く了へて後、シラスと共にテサロニケの方面に出發した。

パウロの一生に於ける此の挿話は「人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ」を云ふイエスの言葉の解釋を明かにするものである。よし此言葉の意味がいかにあらうとも、この言は、イエスの忠誠な僕になるのには他人に靴の塵埃を拂ひかけられても黙つてゐなければならぬを云ふ意

味ではない事をパウロはよく知つてゐた。ローマの警吏であらうと、他の自尊心の高い紳士であらうとも、彼等の権力の下に来つた人々の権力を無視するやうな傾向あるものに對して事を訂すのはクリスチャンの義務である。彼等役人たちが辯論も罪の宣告もなしにその権力を亂用するを責め且つその爲す可からざる事を知らしめるのはクリスチャンの義務である。パウロの誇ある魂は己れの受けたる他人の受けたるを問はず、苟くも不正な處置に對して憤つたのである。

この高遠な精神はコリント人に宛てた書簡中に屢々閃いてゐる。凡ての教會のうちで、この教會は最も喧しい教會で、パウロに對しや、もすれば尊大であつたがパウロはそれを容さなかつた。彼等がその識見や知識を以て氣取るに、彼は彼等は幼児であつて彼はそれをミルクで育てた事を思ひ出しつゝ、彼等を見下してゐた。彼等はまだクリスチャン生活の初歩をも咀嚼し得ないので、なほ進歩した道を教へる事は不可能であつた。それで彼等がパウロを批評した時にパウロはその批評を彼等の面上に跳ね返へして「我は汝等に審かれ、或は人の審判によりて審かるる事を最小き事となす。我を審きたまふ者は主なり。」(哥前四ノ三)と言つてゐるが、この言葉には一種の侮蔑がある。それらあら探しの人々よりすべての點に於いて勝れてゐることを感じた。その心からして彼は諷刺をなし嘲笑した。他の誇ある人々と同じく小さな伶俐があつた。差出口に彼はいら立つてゐた

のである。それで彼はかやうな者を憐憫みを以て見下し、ある時は感情ある願をなし、ある時は刺す様な諷刺を言つてゐる。彼自分も彼等を怒らせまいとして無知な平凡な柔弱者にはならなかつた。

「汝等は既に心に願ふところをもてり。汝等は既に天の祝福をもてり、わが援なくして汝の國に来る。我等は愚かなれども、汝等は慧者かなれり。我等は弱く、汝等は強し、汝等は尊く、我等は卑し。」(哥前四ノ一〇)といふ如きは彼の諷刺を示すに足る。しかし又彼は直ちに穩かになつた。これは彼の平常の言ひ振りではなかつた。彼は諷刺を捨て、平常の調子に返り「我は汝等を辱めんためにあらず、かへつて我愛する子の如く汝に教ふるなり。汝等に萬の教師あらん、されど父は一人なり、我汝等が我に倣ふものならんことをもむ」と言つた。

彼の誇りは又彼自らを他の使徒等との比較の中に再び顯はれてゐる。彼の敵は彼が十二使徒に劣るこいつて常に彼を擲擄してゐた。彼は十二使徒の權威に缺くる處があつた。そして十二使徒は彼の尙ほ知らぬものを知つてゐた。彼は他の使徒等の語るやうに語り得なかつた。事實彼は使徒ではなかつた。かやうな饒舌は彼を刺した。獅子でさへ蚊に刺さるる事を好まない、ましてや彼は大なる力を有つてゐることを自覺して居た。彼は人に無能なものと云はれ、ば苦しみなきを得なかつた。「我使徒に非ずと雖も使徒の頭に劣らずと思ふなり。我は確かに使徒の業をなせり。たゞ使徒と異

なる處は、我が働きに對し報酬を受けざるこゝなり……我他の人には使徒ならずとも汝等コリント人には使徒なり。汝等は私の作れるものにして我が使徒たる職の印なればなり……私は使徒にあらずや、我等の主イエスを言しにあらざや……私は使徒の頭に少しも劣らず……私は言葉に拙れども知識を有てり、しかしてその知識を汝等に了解せしめたり」

彼は彼を引き下げやうとした人々の手で他のクリスチャンの働き人を彼の上に推す事を肯ぜなかつた。「彼等はクリストの仕へ人なるか、然り、されど我と同じからず。働きに於てより多く、獄に投ぜらるこゝ屢々、職たる事數知れず、死ぬ程の事も數々にして、我記録は彼等より長し」しかしして彼等がパウロのエルサレムに於ける使徒等より遣はされたる事彼の知る凡ての事柄は使徒より與へられたるものなる事を告げし時に、彼は怒を含んで「エルサレムに於ける名高き人々に我は何物をも與へられず我は人より遣はされず、又人より命ぜられたる事なし、我はイエスキリスト、及び彼を死より甦らせたる父なる神に由りて使徒たるなり」と呼んだ。

彼は又他の使徒たちよりも知識に於て、社會的才能に於いて勝れてゐるこゝを自覺せざるを得なかつた。彼等は到底タルソが提供し得たやうな恵まれた境遇にゐなかつた。彼等は又神學的素養の好機なく、旅行もせず、想像的なこゝろも少く、異邦に關する知識も共に乏しかつた。彼の敵が彼

を以て十二使徒に比較するに足らぬものの如く云ふ時、彼は是等の事を思ひめぐらしたに違ひない。生れつき彼は偉大な心の力を與へられて居り、その様に與へられたものは事實を知らずには居られない。彼がヤコブ、ヨハネ、ペテロミ言を交へた時知らず識らず彼等の力柄を計つた事であらうか。かくして後日彼が彼等の傍らにさうして小さくなり得ようか。パウロは彼の鋭敏な知識、勇氣多能、種々な知識の宏大領域を充分自覺してゐた。そして彼は彼の精神的に劣つた人々の彼を凌いで偉大なるものこそせられ榮譽ありませらる、こゝを満足してゐるこゝは出来なかつた。

道徳的領域に於いても彼は自らを劣れるものとは思はなかつた。イエスの爲めに犠牲となつた點に於ても、誰も彼の上に出でたものはない。彼は利を得る以外には何もなさなかつた。云ふ誇りは彼の癪に障り、彼をして猛烈な反駁をなさしめた。

彼は罪なきに人に誤解せらるるこゝを許すこゝが出来ない程高い誇を有つてゐた。パウロは己れの性格を誇つてゐた。ピリピの人々に對して彼が彼の境遇の如何に拘はらず、如何にして満足を得べきかを學んだ。云ふこゝを語つた時、人は其處にストイツクの満足に就ての註釋を見出すであらう。ストイツクは古へ最も誇つてゐた哲學者で外界の事件や物質的境遇に頼らざる生活をなす力を悦んだものであるが、丁度そのストイツクの如く、パウロはその魂を支配する能力に同じ悦びを感じ

たのである。彼は明らかにピリピ人の恩恵に頼らざる事を彼等に告げた。彼はそれを楽しみ喜んで受けた。けれどもそれは彼の生命を充實させるのに於て本質的なものではなかつた。

彼は彼の記録を誇つて居る。我は良心に叛かざる生活をなし、子供の時より成人に至るまで神に人の爲めに清き良心に背かざらん事を期したりと公言する人は誇ある人である。彼は怖るべき悪事をした事は確であるが、それは彼が知らずしてなした事で彼の企てが高尙でなかつた故ではない。クリスチャンとしての彼はその宗教的勞働に對して報酬を受けないといふ一途の手段を擇んだ事に誇りを有つて居る。彼は常に手の業で稼いで食を得た。そして友人等にその手の硬くなつてゐるのを示してその心に喜んだ。誰も彼を忘ける者と言ひ得るものはなかつた。又彼は金錢の爲めに福音を陳べるに正當に彼を非難し得るものはなかつた。彼はそれを誇つてゐた。

彼には又他の人の設けた基礎に決して建設しなかつたといふ事實を誇つてゐた。なすべき困難な仕事を彼は常に手一杯になした。草分けの仕事を他人が成し遂げるのを待つて、そして彼等の骨折の實りを刈り取るといふやうなことを彼はしなかつた。彼は新しい畑に入つて行くことを慣用手段とした。彼はなるべくクリスチャンの働き手の往かない處に往き、彼は未開の土地の土を堀つた。彼はまだ足跡のない森に途をつけた。他の人々の建設の爲に彼は土臺を置いた。そして彼のすべて

の教會の爲めに彼自ら土臺を置いた。これは彼の喜びであつた。高い獨立の精神を有つた人は創造的な或物に困難な事業に楽しみを見出すものである。

彼はキリストの奴隷として受けた苦難を誇つた。それほど屢々誇つたのではなかつたが、しかしよくこの事に言ひ及ぼして居る。そしてこのことを思ふに彼は満足を得ると云つてゐる。彼は苦難を思ひ出して泣かうとするのではない。苦難を喜ばうとするのである。彼がイエスの傷痕をその身に負ふてゐると言ふときには恰かも老いた軍人がその傷痕を示した時に感ずるやうな深い満足を彼はキリストの爲め苦みに預り得る事を誇りとした。如何に欣喜した調子で彼はこれを書いた事であらう。即ち「われ善き戦闘をたたかひ、走るべき道程を果たし、信仰を守れり」(テモテ後四ノ七) 戦勝者は其の戦勝の誇りを不問に附し得ないものである。

パウロはその同僚たちの間にもこの誇の精神を教養することに怠らなかつた。テストに「汝人に輕んぜらるな、多辯なる成上り者に斥けらるな、差出がましき主人顔に見下げらるな。不遜な自我心の人に踏まるな」と書いた。これは人格的尊嚴について鋭敏な感じを持つた人の忠言である。

彼はテモテに對して同じ忠言を與へて居る。汝歳若きを以て人に輕んぜらるな。年長者の汝より歳老ひたる故をもつて子供に對するが如く汝に侮蔑の言を語らしむるな。誰にても正しき生活に於

いて模範を示す人は老若に關せず人に尊ばるゝに値するものなり。

彼の子供にかやうに書きおくる人は誇りを有つてゐる英雄である。彼の永い間の経験を顧みて、彼は世が常に宗教家を軽く見、そして嘲笑を以つてその言を聽いて居る様を斷えず見た。世は戒められ反抗されねばならぬ。クリスチャンはその尊嚴なるこゝこその任重きこゝこを常に意識してゐなければならぬが、同時に誇りもなくしてはならぬ。彼は最も權力ある者の面前に於いても彼の頭を高くあげ己れの仕事に進んで行かねばならぬ、虚勢を張るこゝこなく容態ぶるこゝこなく、完全に成長した人の自信ある足取を以て。

第十章 彼の謙讓

人の謙讓を評價するには、まづ彼の誇りの容積から計らねばならぬ。或種の人々には謙讓、あるひは之に同意義の事を行ふとは容易な事である。彼等は生れながら腹這ふ蟲の性質を有つてゐる。彼等は努力なしに這つて居る。勿論蟲の如く腹這ふのはこゝこにいふ謙讓ではなく、たゞ異形のおとぎ繪に過ぎない。腹這ふ蟲の態度を人としてなす値のあるこゝこである思ふ人がある。又謙讓は徳行の數には入らないものだと思ふ人もある。腰を屈めるだけの努力をすればそれでよい。謙讓は彼等には縁遠い。縁遠い處から嫌になつて、これは奴隸根性で、悪風で、全く徳行とは稱へられないと言ふ様になる。

パウロは生れつき誇を有ち、倨傲であつた。それ故に彼の心にある謙遜の念は努力の賜であつた。彼は「己を空しうし僕の貌を借りて人の如くなれり。既に人の狀にて現れ、己を卑うして死に至るまで順ひ給へり」(ピリピ二ノ八)と云ふ手本を彼の目の前にかけてこれを贏ち得たのである。若

し謙讓が己れを低く評價することを意味するものであれば、パウロは身を低うした人ではなかつたのである。パウロは自らを高く考へた。彼は彼の頭を高く上げてゐた。彼は己れを使徒等の最も高きものに比していささか劣らずに大膽に言つた。人に劣るとの感じを養ふことに彼は楽しみを見出さなかつた。時折り我等の逢ふ事のある、ある謙讓な人のやうに彼は決して、何事も知らず、爲し得ず、又數ふるに足らずなき、言つて誇らなかつた。それよりも己れのなし得ることを舉げて人前を憚らず喜んだ。若し謙讓が精神の卑しいことであるならば、パウロは謙讓ではなかつた。追従をか詔護か云ふものは彼には少しもなかつた。彼は決して畏縮したり平伏したりしなかつた。彼は彼の人格の尊嚴を、彼の使命の偉大さを二つながら自覺してゐた。

世には謙讓に對する多くの贗物や壞敗物がある。我等は先づ眞の謙讓とは事實何物であるか云ふことを知る爲にイエスの謙讓を研究しよう。そして次ぎにパウロがイエスに従へられたその誇ある性質の中に、謙讓が如何なる形をこつたかを知る爲めに、パウロの謙讓を學んで見よう。

パウロはそれを高く考へてゐた。しかし彼は彼が當然考ふべき以上に考へたのではない。彼は眞面目に考へた。そして神の賜はつた才能を精確に計つてゐた。彼は智者を以つて自任してゐなかつた。けれども常になほ學ぶべきもののある事に氣附いてゐた「我等たゞ漸を逐ふて知り、我等たゞ

漸を逐ふて豫言するなり」を彼は彼の優れて美しい句の中に書いた「我等の知るところの多くの事は次第に廢棄せらるべし。全き者の來らん時は全からぬもの廢らん。今我等は鏡をもつて見ることを見るところ驕なり、されざかの時には顔を對せて相見ん。今わが知るところ全からず、然れども他日我は全く知るべし」これは謙讓心の告白である。

パウロは彼の知識の眞實なことを信じてゐるが、彼は凡ての事を知つてゐることは言はない。彼が彼の改宗者に書き送つた時も、己れを以て謬ることをなきものとする様な態度を取らなかつた。學者たちはよく彼の求めなかつた事まで、彼の爲めに言はうとする。なにも少しの事を明かに見たから云つて凡ての事を知つてゐるといふことにはなるまい。人は靈感を受けた使徒であつても、なほ多くの點で無知であり得る。惑はしい質問に對してパウロは明かな心の謙讓を示した。結婚について難しい質問にあつた時、彼のそれに對する答は、彼の言ふ處に、神の言ふ處に、明かな區切りをつけてゐる。その一節に「我がかくいふは命ずるにあらず、許さるべしと思ふことを述べるに過ぎず」(哥前七ノ六)を書いた。なほ曰く「されどこれ我が意見なり。我これを我がものなり云ふも實は主のものなり」(哥前七ノ四〇)此の點に於いてパウロは主の名に由つて語つたといふ彼の立場を確信して居る。けれども彼は次に、語るのは彼であり主ではないと云ふことを讀者に知らし

める。彼は彼が示してゐる意見に於いて、神の律法を引下げてゐる人に思はれたくなかつた。両親の結婚する娘に負ふ義務に思ひ及ぶとき、彼はそれについて、主より命を得てゐない事を承諾する。彼が爲し得るものは、たゞ彼の意見、即ち神の信任を受け、聰明な言葉を語る様に神に委ねられた人の意見を與へ得るのである。他の一方に於いては、彼はその質問者に彼等の爲めに最善であると思ふ處を述べるけれども、それはたゞ彼の意見であるに過ぎないといふ説明を急いでする。人はその薦めの價值あるところをよければよいのである。そしてパウロはそれは値あること、思つたなぜなれば他の人と同様に、彼が神の靈をうけ得ないといふ理由はないと見たからである。

彼は信仰と行爲に關する詳細な點に於ては決して大家振らなかつた。彼は常に自由を主張してゐた。審判官を以て任ずるつまらない専斷な人々に彼は速かな譴責を與へた「汝は誰なるか。他人の僕に對して、審判をなすものは誰ぞ、起つて倒るゝ、こはその主の爲めなり。唯己れの仕事に勵んで他人にかゝるな」云ふ人を畏縮せしむる様な嘲罵を與へてゐる。彼は遺族や暴君の態度を取らない様に注意してゐた。時折り彼の語が、彼の云はうとする以上の意味を含みはしまいか云ふことを氣にして、彼の態度が事實何であつたかを説明して出來得る限りの誤解を糺さん急いだものである。神の靈は彼の心の内に在ることを確言しながら、彼は直ちに信仰上人々は自身の立場を有

つてゐるが故に、彼は彼の信仰を以て人々の信仰を支配する權利を有つてゐない云つた。彼は自分を彼等の喜びを援くるものであると考へてゐた。彼は彼等と働き仲間として協力し、決して宗教上の執政者たらうとはしないのである。

彼は十二使徒の最も偉大なる者に少しも劣つてはゐなかつた。けれども彼はアボロと駢ぶことには躊躇するものではなかつた。コリント人のある者はアボロの上にパウロを置き、又ある者はパウロの上にアボロを置いて居る。パウロはそれを好まなかつた。それはパウロもアボロも神の畑に於ける共同の働き手で、その手に成つたものは皆神に納まるからである。一人が植ゑれば、他の者は水灌ぎ、植ゑるのも灌ぐのも一つの仕事の各受持で、共になくてはならぬものである。かくありしすれば、何故一人を他の上に擧げるのであるか、二人も同じ神の仕事をなし、二人も同じ神に仕へてゐるのである。すべての教師はすべての信徒に屬す、故にクリスチャンは好きな一人の教師をのみ頼るよりもすべての教師の天賦を利用すべきである。パウロはそれを常に貶さうとする人々には彼の性質の誇りある部を示し、異常に彼を崇めようとする人々には美しく謙讓な心を示してゐる。「パウロは誰ぞや。パウロは汝等の爲めに十字架に磔つけられしや、汝等は洗禮せられてパウロの名を受けしや。我は單に説教者なり、我は己れの家を建つるにあらず、我が務めは從ひ來るもの

を造らん爲めにあらず、人々をキリストの中に和げん爲めなり」

彼は彼の完全なこゝと彼の目的の高貴な事を充分自覺してゐた。彼は彼の意見が謬りのないことを主張しなかつた。同様に彼の人格に缺點のないこゝとを主張しなかつた。彼は人々に彼に従ふべきを説いた時も「我のキリストに従ふ如く」こゝと注意を添へてゐる。キリストは理想であつたが、パウロはさうでなかつた。クリスチャンとして三十年を過した後、彼はその愛する教會に書き送つて曰く、我が最も大なる願はキリストを知る事である。彼はキリストを少しは知つてゐるが、知らうご欲し、知らうご希つた程知つてゐなかつた。彼はキリストの復活の力を知り、なほ彼の苦難に預る事を欲した。彼は云つた「我なほこゝとに至らず、我全うせられたりこゝといふにあらず、我が前にあるものを捉へんこゝと追求む。神の我をその子の僕として召し給ふ時神の心にある人ならんこゝと絶えず努む。我はキリストの中にある正しきものを未だ得る能はず、されどそれを得んこゝとして努むるなり」と。パウロは熱望しながら、しかも得られなかつたが、そのものが、なほかつ彼の慰藉になつた。

深い謙讓な精神は彼の告白に顯はれてゐる。彼は彼の心を赤裸々に表はすこゝとを恥ぢなかつた。その當時、心の感激の嵐を超越して生き得る力を與へられてゐるこゝとを誇り、我こゝとは心を亂され

ざるものなりと稱してゐた人々があつた。パウロはかやうな振りをしなかつた。彼は手ご器管ご、肉體ご感覺ご、愛情ご、熱情ごを有つてゐた。彼は他の人々と同じ食物を食ひ、同じ武器に傷つけられ、同じ病に罹り、同じ手段で癒され、夏は暖められ、冬は冷された。彼は棘に刺されて血を流し間違をしては惱み、失敗しては悶え、危険に臨んでは畏縮した。かやうの事柄に於て彼は全然人間であつた。そして神の使命を受けた使徒であつたけれども彼は彼の混亂した内的生活を謙遜に物語り、その結果が彼の名聲に悪影響を及ぼさうと、又彼が神の前に携へようとする人々の目に己れを傷けるご思はれようご、彼は頓着しなかつた「兄弟たちよ、我が爲めに祈れ」驚くべきは、彼の偉大なる心の謙遜である。

神の教會を迫害した罪に想ひ及ぶ時に、彼は地に口をつけて倒れた。それら懺悔の間はさういふ言葉も、彼の悔悟した心を卑下する情を表はすには足りなかつた。彼が神の慈愛に想ひ到つたのは自己評價のドン底に墜ちた時であつた。彼には時に全世界に對して、使徒の最も大なるものより聊かも劣らないご言はんこゝとしてゐた時があつた。然し責罰の念にかられた時には、彼は使徒のうちの最も小なるもので使徒と稱するに足りないご感じた。この自らを卑下する習慣は彼の上に成長して彼が齢老ひたる時には彼は彼が凡てのキリスト信徒の最も小なるものよりも小なるこゝとを言はんこゝ

してゐた。自らひれ伏するに云ふこの發作に襲はれたのは神の彼に與へた恩惠の印であつた。彼は神が彼を呼んで爲さしめんとした仕事の大きなこゝを想ひ浮べ、又同様に、探求し得られないキリストの富を地上の國民に宣べ傳へ、そして永い間隠されてゐた或物、即ち今や彼がかつて迫害した教會を通じて、この世界に、今迄存在しなかつた他の世界に、神の種々な智慧を顯すべき或物を、すべての場所に於いてすべての人に見せしめんとすることを想ひ浮べる時、彼は彼の價值なきこゝを最も強く意識した。彼が彼の最も豊かな収益を損失と考へすべての彼の誇を侮蔑したのは、彼に神の慈愛を彼の心に受けるこゝを許した時であつた。

この感じが次第に生育して、遂に彼の良心は病的になつたらしい。其最も終りに認めた書簡の一到彼は己れを「罪人の頭」と呼んでゐる。それは彼が永い以前、横暴にもキリストを信ずるこゝで、多くの男女を捕へ、獄に投じ、死に處した事を再び思ひ出したからであつた。たゞ此場合彼に取つての一つの慰めは、キリストが彼の如き大なる罪人の中に、如何に神が恵み深くあるかを世に示し得る事であり、且つ彼れはパウロの經驗を通じて、多くの人が永遠の生命に預り得る事であつた。

パウロは常に人の前に自ら屈服するのを嫌つた。いかに偉大なる人にも彼は兄弟のやうに又平等

な人のやうに接した。しかし神の前には彼は己身を卑うしたものはなかつた。永遠なるものの前にあつては彼は恰かも無きにひきしきものであつた。凡そ彼の所有してゐるすべては與へられたものであつた。その與へられた神の賜は勳功なきに與へられたものであつた。それ故に「恩惠」の語はパウロの愛用した句であつた。彼はそれを常に口にもし、筆にもしてゐた。彼が人に逢へばその挨拶には「神の恩惠汝と共にあれ」と言ひ、又告別の時には「主イエスキリストの恩惠汝と共にあれ」と言つた。恩惠は受くべき價值なくして受くる慈愛である。その言葉の響きは彼には音楽のやうであつた。それは謙遜な愛の感じを彼の胸に生かしてゐた。彼の謙遜はその卑下の感じに終らないで、その行爲にまで及んだ。我等の主は常に謙讓を稱してゐた。主は自ら卑しと云ひ、名譽を顧みざりしこゝによつてそれを證し、凡ての人の僕となつた。彼の一生の最後の夜には、水鉢と手拭とをとり、これを用ゐて「我汝等に例を與へたり」と言つた。パウロは常にその水鉢と手拭とを使つたものである。爲される必要のあるものを彼は爲した。人々の居る處には、それがいかに遠方であらうと、彼は往つた。高い教育を受けた彼は學校へ行つた。こゝのない人々の中にあつて仕事をした。彼の改宗者達は殆んど例外なく、大抵は農夫や小さな商人、又奴隸なると云ふ教養のない階級の人であつた。コリントに於いてさへ教會は賤しい身分の男女で、市の社交に認められない人たちの

爲に建てられた「兄弟を汝等の階級を見よ、汝等が如何なる種類の人なるかを見よ。汝等の中教育を受けたる者多からず。力あるもの多からず。貴きもの多からず。されど、神は世の愚かなるものを選び、力なきものを選び、地位のなきものを選び、世の悪き禍を減さんとし給ふが如し。教會の發達は金と社會の威力によるものとなして誇ることを得ず、何となればすべての人は教會の信者を見るべきに、我等の運動は神より力を得ざるべからず。云ふことを、明かに見るを得べければなり」

パウロがその生命を捧げたのは彼の同族の賤しい人々の爲ではなく外國の貧しい階級の人々の爲であつた。始めてイエスの宗教に引きつけられた人々は樵夫、水汲人等下級の人々で決して上級の人々ではなかつた。教養のある人、資産のある人、物事に明るい、人を指導する人々は多くは新宗教を見過してしまつた。かくの如き教養あり學識ある人々は無智な外國人運命を共にする事を欲しなかつた。パウロが過した大部分の生活は主としてかやうな平凡な外國人の間に於いてであつた。これらの外國人はパウロの與へ得る奉仕を求めてゐたので、彼は先づ水鉢と手拭をこつたのであつた。疑もなく、多數の人々は、物の分つた人がかやうな事を始めたその動機を知るよしもなかつた。教養のある人が、何故に脱走した奴隷をその主人と和解せしめようとして、無駄骨を折らなければ

ならぬのか、秀でた才能の人が、何故身分賤しいアクラやプリスキラ等薄汚い店で針の手を動かさねばならぬのか、タルソやエルサレムで神學や哲學の學校長として起ち得る人が何故に、彼の性格をも辨へず、彼の教へをも悟り得ぬくだらぬ人々に如何にして正しき生活をなすべきかを示す爲に力を浪費せねばならぬのか。改宗者の或者は、その性格が道徳的に香しくなかつた。そして教會生活の見苦しいところはしばしば彼の心を痛めた。我等はそれら教會の人々が道徳的に發達してゐなかつた模様を彼の書簡中の訓戒によつて知り得るのである。かやうな平凡な人性を高い程度に引あげようとするこの仕事は、その人が普通人の生活を支配する精神とは異つた精神を内に有つてゐない限りまことに不愉快な、有難くない仕事であらねばならぬ。水鉢と手拭を用ゐる云ふことは、人間性の部分々に切り入つて往く。人々は奉仕するよりも奉仕せられるを喜ぶのである。多くの人の爲にその生命を賠償にするこいふ事を好まない。パウロはイエスが謙讓であつたと同じ意味に於いて謙讓であつた。大切な仕事をなす時に彼は彼の尊嚴を顧みなかつた。又社會的に下級な人々と一緒になつた爲めに、その名聲を害ふ事もあへて氣にしまなかつた。彼は手を以て働いても人間が低下したと思はなかつた。よしいかに賤役であつても、正しい精神の者が立派に爲し得る事であるならば決してそれを爲すことを恥辱と思はなかつた。彼は柔和であり心の中に卑下してゐた。

それ故に彼は僕を云ふ名を厭はなかつた。彼はそれを好み、常に彼の名と共にそれを書いてゐた。これは彼が尤も愛した稱號であつた。他の人々が「聖パウロ」を書く時に、彼は常に「僕パウロ」を書いた。この僕をいふ彼の選んだ希臘語は二十世紀の家庭に於ける僕でなく、その所有者たる主人に、律法によつて従ふべき義務ある、奴隸の意である。彼はかく服従を受くる値ある人に仕へるを名譽としたのである。服従するを云ふ行ひを男らしくない業を見ず、自分以上の高い人格者に身を致す事を悦びましたのである。彼は常に教へられよう、學ばうを熱望してゐた。彼はかくて後にあるものを忘れて進んだ、彼は誇ある人であつて、頑強に横柄になり易かつたが、イエスの感化の下に膝を屈する事を學んだのであつた。

第十一章 彼の激情

パウロが昂奮した爲めでもあらうか、ヘストスは彼を狂氣に見た。彼れ囚人が語りゆくにつれてその眼はかゞやき、彼の聲は感情に溢れた。

彼の身内はヘストスの如き冷血漢の理解するこの出来ぬ炎が燃えてゐた。冷血の人には熱情家は常に謎なるものである。パウロは白熱の炎に燃えるこの出来る人であつた。彼は人の火山であつた。そして彼の言は溶岩の如く流れた。彼は炎の舌のやうにかゞやく字句を以て書簡をした。めた。彼の唇から出た文章は千九百年の雪を以てしても尙ほ冷却し得ぬ燃ゆる石炭のやうに輝いた。生れつき彼は衝動的であり、性急であり、激情家であつた。物事の中へ眞逆まに躍り込むのが彼の性質であつた。彼は事を半途でやめることは出来なかつた。正しいと信じた道に進むまきには彼は勢ひ烈しく壓へ難きものがあつた。

彼の口から洩れる處では、彼はクリスチャンになる以前はイエスに對して猛烈な反對を試みた。

彼はその名を憎んでそれを潰さんことをクリスチャンに強ひた。彼は教會を憎み、信徒を追跡し、その家々より彼等を引き出して獄に投じた。審問の日が来た時に彼は彼等を鞭ち、死刑の訴をなした。彼は男女の區別をしなかつた。すべての者は一樣に無残にもそれらの運命に逐ひやられた。かくの如く彼は新宗教に對して狂的であつたのでその迫害を異邦の都市にまで及ぼした。彼の友なるルカは彼を脅迫し殺戮とを呼吸してゐるを評したのは適評であつた。

かやうの人はクリスチャンになつてもその生れながらの炎は彼の内に残つてゐる。始めに有つた氣質、體質を彼は終りまで有ち續けた。彼は常に火の人である。これを考へに入れなければ彼を正當に見ることは困難である。その氣質を通じて彼の書いたものを讀まねば間違が生ずる。又始めにその文體を會得しなければ彼の神學は解し得られぬ。文體は常にその人に沿ふもので、パウロの文體は彼の人の爲りを顯はす媒をなすものである。パウロの文體に文學的現象を以て非常に屢々研究されてゐる。學者はヘブライズム、ヘレニズム、シリアシニズムやその他彼等の愛好するものを求め、彼の文體を研究する。彼等は彼の演説表を作り目錄をつけ、分類する。そして夜も晝もなく言語の特徴や、文學的特質を探してゐる。のみならず彼等はその言葉まで教へて、若しそのうちに新らしい語でも入つてゐれば、それから推測して、時としてはその推測の上に説を立てる。そし

てその説より教義を引出しパウロに關する誰も讀まうとしない本を書き以て世界に氾濫せしめる。職業的な語數計算の人はパウロを理解する人でない。又彼等の言が信據の問題について決定的なるものでもない。一つの書簡をそれが二三の新語を含む理由を以て拒否するべき聖書學者は最も悪いことをなすものである。パウロを知らない人でも希臘語に精通してゐる人は多い。然し人を親しく知らなければ書簡の真相を判断するには不充分である。専門家はよくその長所、短所、端麗、粗野、美醜を求め、彼の希臘の教養を受けてゐたことを云ふ證を求め、彼が希臘語の使用に熟達してゐたことを云ふ證を求めて彼の書簡を漁つた。そして彼が発見したと思ふ書物に基づいて喧しい議論におちて行つた。かくしてパウロの文體に關する爭論は斷ゆる時なく、失望すべき事實は、希臘學者は遂に同意し承認することが出来ない事である。今日迄、之等立派な方々の間にある問題はパウロの文體は文學的であるか否かといふ判断を下すことである。ある人はパウロはツキデイデスのやうに書くさひ、他の人はパウロは無法にも希臘語の特徴を傷けるのみならず人の辯論の論理をも破つてゐる可言ふ。

しかし彼の文體について人類にまつて大切な事はその文學的性質ではなく、我等を作者の心に運ぶその力である。彼の文體の中に我等はその人の心の鼓動を感じる。彼の文體は急速である、それ

は高原の火のやうに、又漲つた溪流のやうに走る。それは「速記者の寫した早口の會議で訂正されずに複寫されたもの」を言はれてゐる。その訂正のなかつたのは仕合せである。かやうな凝らなく自然な言の用の方の中に、我等は有りのまゝなるパウロを知るのである。

彼の性質が激烈であるだけに、言葉の用る方も烈しい、彼は行ひの人であつた。それ故に修辭學派の用ゐる優雅さか修飾をあまり好まなかつた。彼は日常の世界の實際的勞働者であつた。僧院の僧正や、岩窟中の行者ではなく、柱上の聖者でもなかつた。もしさうであつたなら初めの一週間は終らぬ中に彼はその柱から跳び離れたこゝであらう。彼は常に何かを爲し、何かを引き起した。彼は常にいづれかへ往つてゐた。彼は足をまげて休むこゝを知らなかつた。ロマへ往かんこした。彼は世界の涯なるスペインに行きたいと思つてゐた。

彼の凡ての行動は敏活であり、眞向に進んで行く急速な精神が彼の文體にある。彼は文典に意を注ぐ隙がなかつた。文典が彼を妨げた時に彼はそれを踏みにじつた。彼は時に自分の言はうこしてゐるこゝを忘れた。彼は常に文章を完結しなかつた。彼には時がなかつた。彼はその謬りなきこゝを決して夢想しなかつた。もしそのこゝを知つてゐたなら彼は書をしるす前に重ねて考へたであらう。彼は彼の書の永久に傳はる事を知つてゐなかつた、もしそれを知つてゐたらその完うせられ

ないある文章にも結末をつけたにちがひない。彼は辻褄を合せようとする考へを持たなかつた。彼の心はもつこ重要なこゝに注がれてゐた。彼には哲學體系を作る時がなかつた。それは少なからぬ努力と餘裕を要するものである。結婚生活をする時を有たないを考へる人は神學の體系を作る時をも有たなからう。たゞ彼は彼の血のうちに火の如く燃えてゐる二、三の理想を有つてゐた。その理想を突きつめ直ちにそれを實行するこゝが彼の務であつた。それ故に彼の文體は時に激しく、ゴツ／＼してゐた。彼の感情の流れは強く且つ充ち溢れてゐた爲めに彼の文體は急に分裂し、急に衝いて來る。丁度水が一パイになつた瓶から跳ね出たり、流れ出たりするやうに言は彼を衝いて出るのである。王の僕は急がねばならぬ。そして彼は種々の文章や修辭の失策を貽しながら意氣揚々に進んだのである。その失策を學者たちは彼の死後物語らうと書くのである。

書齋にあつて、冷靜に暇に任せて彼の文章を解剖し、その一節から教義を推し出し、本來の意味とは違つたものを字句の中に押し込み、それから擴大した結論を引き出すやうな、かやうな人々から彼が了解せらるる事は困難である。靈感に關する傳統的な觀念は改造せられねばならぬ。新約の靈感の思想は、不完全な書き違ひ、偏つた叙述や、眞理を殊更に強く見るこゝ、矛盾と撞着、誇張と入り混つた比喩、そして後の著作者等の遺憾とする表現の方法等、かゝるものを容れる餘地がな

いふ云ふわけではない。多くの人々の心の中にある靈感を受けた過ちなき使徒の肖像は、敬虔にして蒙昧なる人の想像になるものである。我等はパウロの書簡をその人格を通じて讀まねばならぬ。我等はその人を知らなければ彼の神學を正當に取扱ふことは出來ない。一度その人を知れば従つてその言を如何に重んずべきかを知る。我等は彼が體系を作ることが出來なかつたのを知るに共に、その書簡に基づいた神學の多くが断片的なものである事を認める様になつた。我等は我等の知人又朋友等を判断する如くに彼を判断せなければならぬ。我等は我等の彼について眞に知るにこそ、そのものを通じて彼等の言を解釋する。彼等が我等に語る時に我等は彼等が何を云ふかを聴くのみならず彼等が何であるかを聞く。そして附足し、割引し、加減し、取捨する。即ち或者については「彼の吠ゆるは嘯むより悪し」と云ふ。他の者については「彼の言葉はその言はんことを全てならず」その言を容れよ、汝は我知る如く彼を知らざればなり」。かくの如く、我等はパウロの言葉をその人格を知る光に由て解釋せねばならぬ。彼は烈しい急激な人であつた。人が會て或人を呪はれたる者と呼んだからと云つて、その人が頑迷な人となるものではない。ある一點に於てよし彼が寛大でなかつたからと云つても直ちに彼を狭量とするのは無理である。又彼が會て自由を減ぼす言葉を語つたからと云つて彼を宿命論者とするのは正しくない。曾つて彼が愚かしい論述をしたからと云つて

さうして彼を愚なりと呼び得ようか。パウロの礎に設けられた神學が多くあるが、若しその建設者等がパウロは衝動的な燥急な人で、即座に援けを要する人々に大急ぎで書いたものであるといふ事を覺つたならばかゝる神學は建設されなかつたであらう。我等はその人との交りを通じて彼の教を解釋すべきである。それ故にパウロは、己れの云はんことを明かにしようとするに努めて苦しむことなく前進したため、斷えず煩はされなければならなかつた。彼はテサロニケ人に書面を書いて擾を引き起したので、その意を明かにする爲めに彼は第二の書簡を書かなければならなかつた。コリント人は書いた書簡が極端な内容を含んでゐた爲めにその記述の調子を下げざる爲に第二の書をしたためる必要があつた。彼は自ら進んでテモテに割禮をほごして、他の地方に於けるテモテの仕事に及ぼす影響を顧みなかつた。そしてそれ故に、彼の行爲が與へた印象を訂す爲めに、ガラテヤ人に書を送つたのである。

彼の自由に関する思想は眞實なものであつたが、彼はそれを記するに充分な精確を缺いた爲め、その結果それは方々で誤解せられ適用を謬られ、そして彼の敵をして、彼の不用意を不安な指導者であるといふ事を人々に信ぜしむる機會を得しめた。彼の信仰に関する正義の教は健全なものであつたが、しかし彼は間違つた推測に對してそれを安全に守らなかつたので、その結果彼の生涯中に

於ても數々害をなし、今日に至るまでも依然害をなしてゐる。彼があれ程烈しくなかつたなら、茫漠たる無制限な記述を避ける様に注意したであらう。彼の感情はしばしば彼をして常規を逸脱せしめ、彼の言は有効に辯護され得なかつた。彼の魂が火の様に熱した時彼はガラテヤ人に書いた「我パウロ汝等に言ふ、もし割禮を受けなば、キリストは汝等に益なし。又さらに凡て割禮を受くる人に證す、彼は律法の全體を行ふべき負債あり」(ガラテヤ五ノ二、三)ミ、そして彼は他の時に於て割禮を受くるもうけざるも共に益なし云ふ事を躊躇しなかつた、人が割禮をうけようが、うけまいが、クリスチャンたり得る。たゞ彼は彼の主なる働手が割禮を受けてゐるのは好い事であるミ信じたのである。

彼の性に關する教は誤解を招くミは確かである。彼等は常にキリストに於て男も女もあるなしミ大膽に言つてゐた。換言すれば宗教の領内では最早男女の區別は問題ミならないといふのである。かやうな教を耳にした婦人たちが、彼等の權能について質問しようとするのは尤もである。彼等は何故に男ミ同じく集會に語つていけないのか、又男が帽子をかぶらないでゐるのに何故婦人が帽子を戴かなければならぬか彼等には解し得られなかつた。パウロは常の猛烈さで彼等に當つた。

彼は婦人たちがかゝる自由を熱望してゐるのを怖ろしく思つた。彼にミつては婦人がかやうな行動

をなすミは不謹慎であり、風紀を紊るものなる事は明かであつたので、彼はそれに對して滑稽に化する迄極端に辯論した。彼は言つてゐる。若し婦人にして集會に面帽なくして臨むならばむしろ毛を剃るべきであるミ。その意はコリントに於けるこれらの婦人は他の名譽を失つた婦人たちミ公然同席したがよからうといふのである。彼はもし婦人たちが面帽を着ける事を欲しないならばその髪を切る方が可い、言ひ換へれば、市中の娼婦の中に名を連らぬるが可いミさへ云つた。今日の人人にミつてこんな話は可笑しい。パウロは正しい立場を取つたけれども、それを辯護する爲に、緊張した語氣や愚かしい言を使つてゐる。彼の性質はかうであつたので一つ踏み出すミ一途にその方へ進んだのである。

一つの思想が彼を捉へるミ、それは時ミしては彼ミ共に走り出した。彼はそれ見それのみを見た。彼は他の凡ての眞理を見失つてしまふのである。そして彼の最初の眞理はそれに關聯してゐるのであり彼はその他の眞理によつて最初の眞理を變形し、又牽制する。彼はよく誇張を擅にして、單に一面の眞理を示す叙述をなした。それは彼が眞理を重く見ないからでなく、たゞその熱心な烈しい魂の衝動にかられたからである。我等は彼が教へようとした全き眞理を知る爲めに、主題に従つて彼のいろくくの叙述をならべて見ねばならぬ。彼は一面に偏した人ではないが、多くの一面に偏した

事を云つた。その理由は彼がそれを言ふ時に例の烈しい性質に驅られて、一時に眞理のため、一方面を見得るに過ぎなかつたからである。我等と同じく彼等も時に不注意をなし、間違をなし、そしてその謬りを訂し、欠缺を補ひ、その過失を償はなければならなかつた。パウロはペテロと同じく烈しく、衝動的であつた。しかし彼等の激情は彼等を使徒たらしむるに妨げなかつた。イエスは眞摯な熱情的な人を好まれた。彼は熱心な人々の短所を失策を忍容することが出来た。彼はたゞ火の如き人のみ世を征服し得る事を認められたのである。ヨハネがラオデキヤの教會でイエスの語られたのを聞いた時イエスは言つた。「たゞ微温が故に汝を我口より吐出さん」云々。實にイエス自らが熱烈であつた。けれども彼には罪がなかつた。

第十二章 彼の忍従

激烈な人が忍耐するのは容易な事ではない。彼は猶豫され抑制されると殆んど大抵の場合怒を發し見場のよくない行ひをする。微温るい衝動の人は不確になり勝ちであり、鋭い白熱的な人は多くの場合早く冷えやすい。鷲の翼をもつたやうに登るかと思へばすぐ降り、競馬のやうに駆け出すかと思へばすぐ疲れて列を離れる。總じて短氣は人間のいだけ悪徳中の最も普通な最も頽廢的なもの、一つである。それは人間の高い生活を荒す。いづれの教區に於てもその惨害の後を示してゐる。クリスチャンの人々は塔をたてかゝるがそれを成就し得ない。彼等は鋏に手をつけるが困難になる。直ちに後を顧みる。事業を企て、はこれを捨て、そして他人の手に委せようとする。多くの人はさながら子供にひさしい。ある物を欲するときに直ちにそれを得ようとする。彼等は待つことを欲しない。冗長な迂回した道をこつてのみ近づくことこの出来る目標に向つて彼等は近道をこらうとする。我等が忍耐し辛抱することこそを困難に思ふのは我等の激情の爲めである。

パウロは典型的な忍耐の力を有つて居た。我等は彼の猛烈なこころ、性急なこころを了解するに應じて彼の忍耐を批評して行かう。彼は走る事を得るこころにも又歩くこころにも出来た。彼はその身を外に推し出す事も出来たし、又内に引き止めて置くこころにも出来た。彼は事に着手するに熱心であつたがそれと共に時を俟つことも知つて居た。

彼は改宗の後、直ちに傳道に走らなかつた。彼は最早若年ではなく、時も短かく、それに彼の仕事は急を要するものではあつたが、それでも彼は傳道の活動に躍起にならなかつた。彼は直ちにアラビアに往つた。彼は唯一人であるように思つた。彼は思索の時を要した。彼は新しい発見を得たものゝ、それが凡て何を意味するか尙ほ明かでなかつた。彼は新しい確信を得たものゝ、まだ世界にそれを宣傳する用意はして居なかつた。彼の古い信條は粉碎されて、新しい信條の形を成しつゝ、ある此時、彼は靜寂な場處に退いて、世に提供すべき形を其信條に與へる必要があつた。パウロは理智の人であつた。そして高尚な問題に携つてゐる他の人々と同じく、彼にまつて宗教は多くの惑はしい問題を提供した。其處に多くの疑問は群がつて居た。そして彼はもし出来るならばそれに答へなければならなかつた。其處には新しい思想があつた。彼はそれをよく考へて見なければならなかつた。さうして其思想が達してゐるか、又何を包含して居るか彼には解らなかつた。彼は一個の幻を有つて

居たけれども、その幻は鋭敏なそして思慮ある人々に得らるゝ、理智的な形をなす迄はその用をなさないものであつた。ダマスコ門の近くに得た經驗は彼の生命の凡ての部分に大なる隆起となつたが尙ほ彼はそれを熟慮しそしてその意を發見するまでは歩を進めようとはしなかつた。大なる光は彼を照し、彼の心眼は閉ぢられてしまつたのである。彼は直ちに彼の進むべき方向を定めるこころが出来なかつた。新らしき經驗は彼に來つた。彼はそれを理解し、そして宇宙に神に關する考へを纏めなければならなかつた。アナニヤの家を出た時彼はローマ人に與ふる書簡を彼の心に懷いてはるなかつた。彼の心は全く擾れ且つ弛んでゐた。彼はアラビアの靜寂な地にしりぞいた。我等は彼が何事をしたのか辨へぬ。彼はそれをルカにさへも語らなかつた。ルカはアラビアに於ける逗留をかつて聞いたこころのないかの如く看過してゐる。パウロが幾年をアラビアに過したか我等は知らぬ。多分一年か又二年にもなるか、我等は只三年を経て彼がダマスコに教をなし、そして遂にエルサレムに志した事を知る。彼はペテロを見んご望み、ヤコブの面談を希つてゐた。ペテロはイエスの公の生涯を語り得るご共に、ヤコブはナザレの家庭に於けるイエスを語り得るからであつた。何事によらずイエスに關して知り得るかぎりを知りたいごは彼のねがひであつた。かくして後、彼は再び姿を消してゐる。その間は十年であつた。ルカは彼が何處へ行つて何をなしたか何事をも語つて居ら

ぬ。パウロ自らもたゞシリヤシシリヤに行つたこと云ふ事實の外何事をも言つてゐなかつた。それらの年を通じてユダヤのクリスチャンは彼の顔を見ず、たゞ著名な迫害者が心を變へて、從來貶けてゐたその信仰を傳へてゐる事を聞いた。それらの沈黙せる隠れたる十三年は端なくもイエスの沈黙した十八年を想ひ出させる。二人とも世に出づる迄には永い間の訓練と用意をなしたのである。それ等十三年間にパウロはその書簡に見るやうな人になつた。現存の書簡中、最初のもものはテサロニケ前書で、齡五十を超えてからの作だけによく成熟し、練磨した心の所産である。彼の改宗後十八年経過した。この永い間の辛抱強い育みこそその忠誠な奉仕にて、彼の理想は明かになり、彼の確信は石の如く堅くなつた。人は一時間にして赤兒のクリスチャンたり得る。けれども成人のクリスチャンたり得ない。それら十八年間にパウロは幼年より成人に達した。一瞬間に賢く、強くなるものはない。たゞ瞬間に眞理に對する新たな見解を得ても、彼の人格が成就せらるゝには忍耐強い年々の勤勉に俟たなければならぬ。書簡を通して我等を見つめてゐる此の永い間苦んだ英雄の靜かな忍耐力を、若し我等が靜かに彼が成長した記録されない數年間のことを思ひ出さなければ、説明することは出来ない。その數年の間に霞は彼を我等の目から隠し、彼の魂の組織によつて以て強くされた冗長な、暇のかゝる方法を我等に示さなかつた。忍耐は魔術によつて天から落ち來つた花

ではなく、實に成長であり、パウロの語を借れば、靈的收穫の一部分である。

人はごの位失望に耐へることが出来るか云ふことによつて彼の忍耐を示すものである。パウロは世界の首都を見ようとする不斷の大望があつた。永年の間彼はロマに教を宣ぶる機會を待ちのぞんだのであつた。彼は常に種々な事に遮ぎられた。幾年もたつてから遂に待ちこがれて居た時が來た。しかし憫れにも彼は鎖につながれてこの市に入つたのであつた。けれども彼はそれを怨まなかつた。彼は彼の不幸を最も善く利用して、靜かにその仕事を繼續した。彼の書簡のある物を通じて我等は彼が鎖の故に怒らず啜かず、かへつて形をかへた幸福としてそれを喜んでゐるのを知る。

仕事の妨害となる肉體の悩みから免れ得ずに失望してゐた彼は、神の彼を救はれん事を求めたけれども、神はそれを聴きいれなかつた。彼は幾月も待つたが神は依然冷酷であつた。パウロは重ねて乞ひ求めた。けれども神は聴き入れさうもなかつた。永い間パウロは答を待つたが、何の答も來なかつた。最後に彼は今一度懇願したけれども、それも遂に空しく終つた。如何に祈つてもその悩みはもこのまゝであつた。しかしパウロは激することはなく、信仰を棄てなかつた。彼は従前の仕事を爲し續け、彼の無能なるにかゝらず、なほ、仕事を首尾よく成し遂げ得ることを見出して喜んだ。

パウロの生涯中、最も大なる失望は、彼の存世中イエスの來らざりし事である。これは彼の望のうちで彼の最も好んだものであり、最も美はしい彼の夢であつた。それは希望以上のものとなり一つの確信となつた。彼はイエスの來り給ふ事、しかも速かに來り給ふを信じた。彼は同じ期待を人に告げて彼等を勵ました。彼はイエスの出で給ふ榮光の時を待つたのである。しかしイエスは來り給はなかつた。年の経過につれ、罪と禍とは嵩じ來たが、期待した教主の助けは來らずして幾年も過ぎた。けれども彼は怒らなかつた。落膽しなかつた。彼は咥く事もせず、彼の失望に耐へてゐた。かくして彼は次第に、イエスは彼の生前に來り給はない事を信ずるに至つた。しかしこの事は彼の信仰を弱めなかつた。彼は神が自らその道を進み給ふことを喜びました。年老いて後、彼はその友の一人に彼が他國に出づべきか、又はその場所に止まるべきかを知らず書を送つてゐる。彼は死は寧ろ望ましい事と信じてゐたけれど、こゝに止まる事がその友の爲めに明かに望まじき事であるならば、神はその止まる事を許し給ふと考へたのであつた。かくの如く如何なる失望も、それがどんなに嘆かはしいものであつても彼を激せしめ彼をして反逆せしめることは出來なかつた。曾て彼がローマ人にあてた文章に彼の態度は示されて居る「人その既に見るところをいかで望まんや、我等もしその見ぬ處を望まば、忍耐してこれを俟たん」(ロマ八ノ二四)

人の忍耐はその仕事の方法にも顯はれて來るものである。パウロが市中に改宗者を得た時は、直ちにその場を離れて永久に顧みないといふ事をしなかつた。よしそれが百哩あらうとも彼は再び引き返したものである。如何に辛抱強く彼はこの市から彼の市へ永い骨の折れる旅程を忍んで其歩を續けた事であらう。何故に彼はまた引き返したか、それは彼の仕事が未だ完うせられてゐなかつたからであつた。使節の働きも、若しそれが他の人々の斷えざる働きによつて補助せられなければ價値の少いものである。人々の救はるゝ爲めには、教へる事と監督をなすことと、牧することとの相倚る働きに俟またねばならぬ。救はるゝに説教を耳にする事から來るものではない。人は教を聽いてその心をうたれ、その道德的改心に新たに歩みを始めるのであるが、その成就に關する凡ての事柄は彼の辿る旅程の如何に由るものである。傳道者等はよくこの事を忘れようとする。彼等は戰場に人を集めるとき喇叭を吹いて人心を引立てたが、敵に向ふ爲めに人々を訓練する辛抱強い骨折の大切な事はこれを見過してゐた。ピシデヤのアンテオケからデルベに向つたパウロの前進は光輝あるものであつたが、デルベより再びアンテオケに引き返へした彼の旅は東に進んで多くの改宗者をつくつた。けれども又西に引き返す途上彼は弟子等の魂に力をつけ、信仰によつて身を持つる様、神の國に至るには多くの困難を経べき事を諭した。改宗者をつくるには勇氣を要するが、改宗者を以

て教會を組織し、會衆に關する事柄を監督し、クリスチャン生活の原理を新たに信ずる者を訓練するには、そこに勇氣と忍耐の二つを要するものである。

教をなす事、牧會する事、監督する事、これらは傳道者たるの魂を試練するものである。パウロが彼の困難とする處を書き連ねたる時、その終りに筆を添へて全教會の監督と云つてゐる。パウロの時代を去る千九百年の、しかもクリスト教國に於て、さへ、一箇の教會の監督は一人の人の力一パイの仕事である。未だクリスト教の幼稚な、改宗者にして人間六十代の靈的經驗と發達の利益を得てゐなかつた當時の教會多數の監督はそんなであつたらう。我等は兎角當時の使徒教會を理想化する傾をもつてゐるが、しかしパウロはその有のまゝを我等に示してゐる。恐らくコリントの教會は他の教會に劣つたものではあるまいが、その教會に私黨あり、饒舌あり、虚榮あり、野鄙あり、放縱あり、禮拜に於ける甚だしい無秩序あり、聖餐式等に於ける醉漢等のあつた事をパウロは語つて居る。教會の會員達は揚足取で、でしやばりで、愚かであつた。異邦人の改宗者は異邦の惡習に後戻りして居た。「大言を云ふな、詐るな、盜むな、酒に酔ふな、不潔な話にふけるな、慾情に陥るな」等の如き教訓は、多くの改宗者の要したものであつた。しかしパウロは、父であり、母であり、祖母である如く彼等に對して忍耐強かつた。時に彼は彼等を子供の如く見、又時に彼等を兄弟であ

り姉妹であるが如く見た。そして彼等の多くの蹟や失策を堪へた。彼の最も愛して居た言葉の一つが「永い間の苦難」であつたことは不思議ではない。彼は彼の經驗から、永い苦しみ、而して尙親切である愛の存する事を辨へてゐた。

強者にまつては敗亡に耐へるほゞ困難なものはない。パウロは常に失敗してゐたが、しかし又常に起き上り、そして再び試みた。人々は彼をダマスコより、エルサレムより、ピシデアのアンテオケより、イコニオムより、ルステラより、ピリピより、テサロニケより、ベロアより、アゼンスより逐つたが、彼はなほコリントに現はれて、彼の事業を繼續しようとして決行した。これは彼が失敗の苦痛を感じないからでなくて、忍耐強かつたのである。血を流しつゝ、しかも進めば新たな傷を蒙むるに知りつゝ、も彼はなほ進んだ。苦難も彼をして不平を鳴さしめ號叫せしむることは出来なかつた。それらは却て彼の忍耐の蓄積を増加した。彼はローマ人に書いて曰く「我等は患難の中に勝ち誇る。そは患難は忍耐を生じ、忍耐は人格を生ずるを知らばなり」と。

精神の劣等で下賤な人に對して、忍耐強くあることは困難である。我等が我等の動機の高いのを知つてゐる時に、その動機が非難せらるれば、我等は直ちにそれを捨てようとする。ある人々は報酬なしに働くこともあらう。又ある者は禮も言はず働くこともあらう、されど猜疑と詐りに毒せら

れた境遇に働く事は誰にも至難とするところである。コリントの教會は他の教會に比して最も堪へ難いものであつた。その諷刺なきは不愉快で忍び難いものであつた。しかし我等はコリント後書の終りに至つて、心をこめたパウロの祝福の言葉を見るのである。がその言葉こそ、牧師が人々に對する愛を披瀝するに最も應はしいものとして、世界を通じて採用されてゐるものである。「願くば主イエス・キリストの恩恵、神の愛、聖靈の交感、なんぢ凡ての者と共にあらんことを」(哥後一三ノ一三) 彼がこの言をしるした時、同時に「愛は凡そ事忍び、おほよそ事信じ、おほよそ事望み、おほよそ事耐ゆるなり」(哥前一三ノ七) 云ふことを示してゐるものである。

教會の歴史を通じて、忍耐を最も良く表はしてゐるもの、一つは、パウロがエルサレムの窮乏に陥つたクリスチャンの爲めに、歐羅巴の人々より醜金の計畫を進めて行く時に、彼の處した態度である。これは元々大膽な計畫であつた。そして殊に當面の人々が遠く隔つた異人種であり、相見ることのない人々である時に、その人々の爲めになされる醜金が常に反對されるものである。多數の人々にはパウロは狂氣じみた人に見え、他の人々には彼は全く正直に事を進むるものでないと思はれて居た。それらの人々はこれ等凡ての金がエルサレムにゆくものではないと思配せをして告げ合つた。高い目的の爲に犠牲になつてゐる強い者の意氣を挫くのはかう云ふ會話である。いかに偉大な英雄

でも、泥を投げつけられては氣を挫かざるを得ない。パウロの誇ある血はかやうな下劣な諷刺を耳にする時に沸き立つたに違ひない。けれども彼はそれに對して嫌惡の情も示さず、又その仕事より身をひく事もしなかつた。邪な一部の人々の批評の爲めに身をひくには、それは餘りに重要な仕事であつた。彼は更に新たなる勇を鼓してそれに當り、財金をエルサレムに致す爲めに使者を教會より任すべき事を喜んで暗示した。拗ねず、惡びれず、彼はこの事の賛同を得れば、自分も亦、其の使者此行を共にすべしと云つた。

曾てエルサレムに向つて歩を進めた時に、彼は彼の心を痛める別の反對に面した。多くの友は敵の陰謀がある爲めに、彼のエルサレムに入るのを止めようとした。彼等はエルサレムに於ける騷擾の猛烈な事を知つてゐたので、パウロに其生命を賭するのはいけなしいと云つて反對したのである。されど今や彼の志の強きを破るべくもない。既に鋤を手にしたる彼は背後を顧みる事を肯んぜなかつた。塔を建て始めた彼はこれを完成しようとする志を定めたのである。彼は始めた事を完うすることを好んだ。ミレトスの友にも「我は我が業を終る喜びを得んことを欲す」と言つてゐる。數年來計畫した目的の爲め一途に、エルサレムに向つて側目もふらず、その額を彼が向けるのを見る時、そして凡ての危険を冒して雄々しくそれを成し遂げようとして、敵の惡罵も、友の忠告をも斥けつゝ、

彼が救はうと困窮してゐる、男や女の事を常に心にしつゝ、進み行くのを見る時に、我等は死者の柩に向つて繰返すあの言葉を胸をこぼろかせて讀む——「然ればわが愛する兄弟よ、汝等固くして搖ぐこまなく、常に勵みて主のわざをつこめよ」(哥前一五の五八)。そして又日中自由にイエスについて人々に語らん爲めに、夙夜忍耐して忙しく針の手を運ばしてゐる彼を思ふ時に、又苦しみに、失望し、意氣の沮喪と失敗の眞只中にあつてその仕事を進めて行く彼を見るまきに、彼の言葉には新たな悲痛が湧き出でる。——「善をなすに倦まざれ、もし撓まずば、時いたりて刈り取るべし」(ガラテヤ六ノ九) 彼は氣を落さなかつた。パウロの死して四十年近くを経た後、ロマのクレメントはコリント人に書を送り、パウロの驚くべき且つ駢びなき忍耐を述べてゐる。その言に曰く「彼は七度繩目を受け、放逐せられ、石にて打たれ、東に西に使命を果して後、正義を全世界に示して彼の信仰に對する高き名、西の國の境に到れり。而して統治者の面前に於て、かくして彼は世から斥けられたるこゝを證して聖地に行けり。彼は忍耐の偉大なる模範なりしなり」と。

第十三章 彼の勇氣

普通のクリスチャンがパウロの人格に於ける最も明かな特性を挙げよと云はれるならば、十中の九は「勇氣」を答へる。これは凡ての時代を通じての答である。パウロは新約書中の他のすべての英雄にまさつた者として一般に認められてゐる。藝術は常に刀を手にした彼を描かうとした。ある時は彼は刀の上にやすらひ、ある時は彼は一刀を手にし、又ある時は二刀を手にしてゐる。刀は彼の生活の表象であり、彼の經歷の記號である。彼は教會の戰鬪者等の聖油注がれたる代表者であつた。彼は幾世紀を通じて、十字軍や、改革者や、その他正義の爲めに力強く戰ふ人に靈感を與ふる人であつた。鬪争の最中に人々は天よりの聲の如く魂を慄はすやうな彼の訓戒「神の全き武器を鎧へ」と云ふ言葉を聞いたのである。

彼の勇氣を示す例は彼が山路における山賊に遇つた經驗の中に、ルステラ、エペソ、エルサレムに於ける一揆に面した時の彼の態度に、又ロマに向ふ途中難船に際した時の彼の行爲に通常見出さ

れる。されどこれらの場合に於ける彼の勇氣は何も例外なものではない。山賊の間に於ける勇氣の如き異常さいふには足らぬ、畏縮することなく一揆に面した人々は數多くある。沈みかけた船上の勇氣も日々の物語中にある事である。幾千の人々はパウロが彼の身の危険に瀕した時に現はしたと同じ勇氣を示してゐる。大戦の經驗を経た我等にはパウロの難處に處したおそろしき働きの數々も特に大なる印象はならぬ。凡ての世界的闘争中の最も狂猛な慘劇を経て來つたこの時代の人々は、そして人類の歴史上に未だ見ぬ勇敢な働きを日々耳にする人々は、千九百年前二三の危険に面した傳道者の英雄的な働きを見て畏縮しようとは思はれぬ。戦争は、勇氣が凡ての徳の中で最も量の多いものであることを證してゐる。我等は他の多くのより勝れた徳よりもかゝる勇氣を多分に手にしてゐるものである。いづれの町に於てもテルモピレに斃れた人々の血氣を有つてゐる青年や、シーザーの第十聯隊の兵士と同じ素質を有つた青年がある。パウロの物質的な勇氣の記録だけでは彼を名聲不朽の人々の列に上すには足らぬ。

我等は彼の勇氣の證を他の領域にも求めたい。その明かに顯はれたのは精神的範圍に於いて、ある。彼の理知的な勇氣には駢ぶものがなかつた。世の稱讚を贏ち得た彼の勇氣は肉體的のものでなく、道德的のものであつた。我等は彼の最も秀でた處をその山賊や固陋の徒と争つたり、一日一夜

深海に漂つた時に見るのではなく、彼にまつてもつとも價值ある友の二人を責むべくして責むる時に見るのである。友の傷ついた眼に較べて、群集の怒は何程のこゝごがあらう。良心に迫られて己れを愛する友達に苦痛を與へなければならぬ時彼の魂に荒みくる嵐に較べれば海の嵐に何程の事があらう。パウロはクリスチャンの生涯を始める頃より明かに神は、キリストに由つて、ユダヤ人、異邦人の間を隔つる障壁を打碎かれて、ユダヤ人も異邦人も共に信仰の一家に同じ立場を占むるのであると見て居た。この大なる眞理を彼は取消すこゝごが出来ない様に委ねられ、到る處熱情的な喜びをもつてそれを宣べ傳へたのである。教會全部がその眞理を委ねられた。ペテロはそれを先づ第一に認め、それに基づいて行動した。彼は割禮を受けないローマ人と共に卓を圍み食を共にしたのは、神の靈彼等の心に宿ることを確く信じたからである。バルナバも同じ眞理を委ねられた。彼はアンテオケに於いて行はれた過激な仕事の保證人の一人であつた。そこではギリシヤ人の多くがユダヤ人の律法に従はずして教會に列した。すべて大なる動搖のうちには、流れの洄巻あり、逆流がある。ペテロもバルナバも從來通り來つた彼等の位置を保たうとしなくなる時がやつて來た。保守派の人々はその良心の傷けらるゝを不満に思つて、最早割禮なき人々と交るこゝごは出来ぬと言つた。この感情は次第に強くなつて、ペテロもこれを斥くる事が出来なくなつた。平和の爲めに、彼は最も

強く見える團體に身を投ずるやうになつて、ユダヤの律法に従ひ得ぬ異邦人ニ食卓を共にすることゝを拒んだ。このペテロの勢力に壓せられて、大きな心を有つたバルナバもその範に倣つた。かくして、パウロにまつて新宗教の輝きであつた大真理は、最大なる釋明者の二人に由つて破られたのである。宗教の歴史に於ける危機は到つた。クリスチャンの船はまさに坐礁しようとして居る。骨の折れる責務は遂げられねばならぬ、そしてその衝に當つたものは即ちパウロであつた。彼はペテロに反對しなければならなかつた。ペテロは教會の認められた權威であり、柱であり、イエス自ら巖の名を賜はつた人である。今やパウロは起つて、この動搖する巖を非難しなければならぬのである。その上、パウロはペテロに負ふ處がある。ペテロは曩きにエルサレムに於て二週間彼の家庭にパウロを款待した。ペテロはパウロにイエスの地上生活を充分に語りきかせた。ペテロは彼の友であつた。ペテロは同勞者としてその右の手を彼に與へた。パウロにまつてはペテロが末長き友である事は最も重要な事であつた。しかして今やパウロは彼を責めなければならぬ。彼はそれを背後よりせず、面上に向かつてなさねばならぬ。彼はそれを祕密の中になすことは出来ぬ。ペテロの爲した事は公然と爲された。そしてそれに對する非難が効果ある爲には公然となされねばならぬ。パウロは最も柔和な心の人であり、又感覺の鋭敏な人であつた。彼は苦痛を與へることを躊躇した。彼はペ

テロの感情を害ふ事を氣遣はないわけにはいかなかつた。しかし勢力ある宗教の指導者がその主義に忠誠でないならば、誰かこれを訂さなければならぬ。善人が一時的軟化からして貴い教を危険に陥れるこの際、誰か來つてこれを救はねばならぬ。それ故にパウロはペテロの眞正面に立つた。それこそ山賊や強敵に面する以上の怖るべき試練であつた。彼はペテロに反對した。そして全會衆の面前に於いてペテロの行ひは一貫した基督者の行爲ではないと明らかに言つた。これがパウロにいかほどの影響を與へたか、これを告ぐる記録はない。ルカは彼の物語り中にそれをのせ得なかつた程その挿話は悲痛なものであつた。多分パウロはルカがこの事を涙をもつて語つたであらう。ペテロに對するこの難責はパウロの苦悶の一部分であるに過ぎない。ペテロを非難したパウロは同じくバルナバをも非難した。それはバルナバがペテロの肩を持つたからである。「もつとも不親切な道を取つた」ものであつたからである。「バルナバまでもその偽行に誘はれゆけり」(加二ノ一三)とはパウロの心臓を破るが如き言であつた。即ち「汝のしたがふべき世の最後の人、凡ての異邦人に濫き心を有ちし人、彼等を割禮なしに、又食前に手を洗ふ儀式なしに熱心に教會に受け入れし人同時にデルベの傳道に我れと共にあり、歸途も苦なりし人なるバルナバさへもペテロの去りし後ユダヤ人の壓迫に耐へ得ざりしなり」と言ふのと同じことである。かやうにしてバルナバは難責さる

べき人であつたが、パウロには人情の上から見て、彼は世の誰にも優る恩人であつた。彼に機會を與へたのはバルナバであつた。エルサレムに於て誰もまだパウロの改宗に信をおかなかつた際、使徒たちに彼を紹介して、その詐ならざるを證したのはバルナバであつた。パウロをアンテオケに招いたのはバルナバであつた。バルナバは門戸を開いた人であつた。バルナバはパウロの最初の傳道旅行に彼を危険をも困難をも俱にし、ルステラにてパウロの石にて撃たれし時懇ろに介抱して正氣に復せしめた勇者であつた。バルナバは決して彼を見捨てなかつた。バルナバは常に忠誠であつた。そして今や彼の友バルナバさへも主義を捨てようとしてゐる。親しく心より結んだ友に反對するこゝは深く心を傷ましめる。しかしパウロは勇者であつた。その友にさへ反抗し且つ難責し得る勇者であつた。

パウロの果斷な魂の勇敢なこゝを現はすのはかくの如く彼が豫想し得らるゝあらゆる反對に向つて立つたこゝである。驚くべく大膽な人の始めて爲し得る事を彼は爲した。例へば彼はクリスト教に新たな言語の裝飾を與へた。それは彼の手に成るもので今日に至るまで人々の口に残つてゐる。彼はイエスのほごんごすべての言葉を取除いて、己れの言葉を以てそれに換へてゐる。勿論彼はイエスの言葉を辨へてゐるに違ひないが、彼はそれらを用ゐなかつた。彼の書簡の中にも、又記録に

なつた彼の説教の何れの中にも、そこにイエスの譬へ話や、山上の垂訓、最後の夜の樓上の談話等の痕跡は見出しにくい。これは驚くべき事である。何故ならば當時クリスチャンの集まる處いづれに於ても口述の福音が廣まつてゐるからである。パウロがペテロに二週目を共にして、そのペテロの早口からイエスの言はれた多くの事を聞き洩らしたことは思はれない。パウロはイエスの奴隷であつて、イエスに倣ふ事を誇りこしてゐるにもかゝらず、尙ほイエスの言葉を寫してゐない。彼は古き酒を新らしき革袋に汲み入れた。彼は新たな一揃ひの言葉を發明した。彼は新らしい機械を作り、それをもつて世界を改宗せしめようとした。書簡中のキリストは福音書のイエスであるが、それでも人はその福音書から書簡への移りかはる時、彼は異つた世界に入つて行くやうな氣がする。古い言葉は過ぎ去り、すべての言葉は新しくなつた。神の子の言葉を捨て、自らの好むこゝろを選び用ゐるこゝは、殆んど大膽の頂上に達する勇氣である。若しパウロにしてイエスの言葉を用ゐずしてイエスの宗教を宣べ得るならば、我等はパウロの言葉を用ゐずしてイエスの宗教を宣べ得るこゝいふは過言であらうか？

我等はイエスをメシヤと説くパウロに接するこゝきに、彼の不屈の精神に深く打たれる。彼の大膽さを充分に知るこゝは我等には出來難い、我等が第一世紀のユダヤ人でなく、パウロの説教を聴い

た人々と同じ精神状態になることが出来ないからである。ユダヤ人は幾多の世紀を通じて榮光あるメシヤ、權能ある全勝のメシヤを待ち望んでゐた。そのメシヤは人々を束縛から釋放放つて、そして彼等の敵を足の下に踏みつける筈であつた。苦しみのメシヤの思想は一般の心に嫌惡の情を起した。敗亡のメシヤなき到底信じられず、又甚だしく惡感を催すものであつた。このメシヤが身を羅馬の如き不敬な異教徒の手に委ねて十字架の上に殺されることは不合理である。イエスがペテロに向つて、彼れがエルサレムに往き、多くの苦みを経て、死に至る可きを説いた時、ペテロの魂に起つた心の畏縮はメシヤの十字架に懸かる事を耳にしたすべてのユダヤ人の心に同じやうに繰返へされたのである。十字架は躓く石である。十字架のこゝを云ふと同時にユダヤ人の心には戸がたてられた。いかに敬虔なユダヤ人でも、十字架上に仆れたイエスがメシヤであるを説く人に對して、烈しい憤怒を押し難き激怒を、感ぜずにはゐられなかつた。けれどもこれはパウロの使命であつた。イエスは十字架に懸けられた、そしてイエスはメシヤであつた。パウロはこれを入場を許されたすべての會堂に於いて説いた。會堂より逐はるれば住宅に於て説き、住宅にして得られざれば街路に出でて説いた。彼はそれを到る處に於いて説いた。一つの町を逐はるれば次の市に移つて、彼はそれを説いた。その町を逐はるれば、又他に移り而して尙ほ説いて已まなかつた。彼は暴動を引き起

したがそれでも已めずに説きつづけた。人心に火をつけた。そしてその火は彼を燒かんとしたがそれでも彼の使命をいさ、かも變更しなかつた。血に満ちた群集に逐はれつゝも機會だにあらば引き返して、彼等に説き始めた。その説くところは常に同じものであつた。「イエスはメシヤなり、人々は彼を十字架につけしも、神は彼を死より甦らせたり」これは彼が曾つてダマスユに於いて説いたものである。其處に於いて彼は教會を滅すものなりこの名を得る筈であつた。彼等は彼は變節者、裏切者、背教者と呼んだ。けれども彼は市の外に逐はれる迄説教を續けた。又彼はイエスの敵であるとして令名高かつたエルサレムに於てもそれを説いて市民の血を沸きたした。タルソに於ても説くところあつたに相違ないが、彼はそこでひき目にあつたのでいづれの書簡にも述べてゐない。到る處に於いて彼は説教の爲めに怖れられ、憎まれ、呪はれた。けれども彼は「不敵なるパウロ」であつた。そして彼は怯まず前方に向つて進んで行つた。彼の教は當時の敬虔なそして物の分つたほごんぎすべてのユダヤ人にこりては信ずべからざる、馬鹿らしい、そして神を瀆すものさうけなられたにもかゝらず、彼はイエスはまことのメシヤであり、豫言者の夢であり、世の望である事を宣言し而して人々は彼を十字架に懸けたけれども神は彼を死より甦らせたまはれたのである。多くの善良な人々は彼の福音を名付けるものを恥したが彼は「我は福音を恥せせず、……我は世

界の首都に於てこの福音を宣べんことを欲するなり」を言つた。

世界の他の地に於ても彼はユダヤ人間に於けるに殆んど同様な敬意を有たれた。ユダヤ人には十字架は躓きの石であつたが、ギリシヤ人には道化であつた。ユダヤ人はパウロの語るを聞いて、齒嚙をしたが、ギリシヤ人は微笑した。ギリシヤ人の心に於ては、死は滑稽な事であつた。ギリシヤ人は第一世紀中の他の人々より科學的精神に富んでゐた。彼は自然の方則を最も良く理解してゐた。彼はいかなる事が起り得べきものか又いかなる事が起り得べからざるものであるかを辨へてゐた。彼等は死人がその墓穴から出ることは出来ないことを云ふことを知つてゐた。彼等は十字架に死んだ人が神であり得ないことを知つてゐた。誰にてもイエスは死より甦つたといふものは囁語を弄ぶものであるとした。しかしそれはパウロの常に語つてゐたことであつた。彼は屢々復活といふ言葉を用ゐたのでアデンスの群衆はそれはある女神の名であるを想像した。パウロが「神死より甦へさせたり」を言ふを聞いて人々は彼を侮蔑の眼を以て見つめた。教養ある人々は彼の不合理な、到底考へられない物語りをうけることは出来なかつた。けれどもパウロは言ひつづけた「神彼を死より甦へさせたり」を。ギリシヤの聽衆に於てはこれは滑稽の極である。憐憫と嘲笑と、嫌惡とに面してなほパウロは言ひつづけた「神彼を死より甦らせたり」をギリシヤ文化の中心でありその宿る處で

あるマルスの丘に於いて世界に於ける最も開けた市の一流の學派の代表者に向つてパウロは、十字架に死せしユダヤ人がその墓より出でし事、そして神このユダヤ人に人類の審判を委ねたまふ事を述べたのは、これぞ使徒行傳中の英雄的行爲の最も高い表現である。當時のパウロの行動は全歴史を通じて曾つて人間の與へた最も勇敢な打撃である。洗練された感受性を有つ教育ある人に於ては、道理を智力の未熟な無智な農夫に當るよりも教養ある聽衆の知識に對抗する方が一層の勇氣を要する。ルステラに於ける暴動の狂暴さはアデンスに於ける批評的學者の冷笑程の試練ではない。教養ある此等巨頭連の嘲笑をパウロは決して忘れなかつた。彼は遂にアデンスに返らず、又アデンスの人々に書をおくらなかつた。彼はアデンスに於ける經驗の後數週間身體は弱くなり精神は衰へた。けれども彼の氣勇は衰へなかつた。彼はイエスのメシヤであり、人々は彼を十字架につけ、そして神は彼を死より甦らせし事を宣べ傳へようことを堅く決心した。此處に神の子の勇氣に似た勇氣がある。

第十四章 彼の禮節

勇氣はあるが禮儀を知らぬ人がある。所謂確信の勇氣を有つてゐる人にして、往々他人の確信を尊重しない事がある。強烈な性格の人は屢々知らず識らずの中に、同輩の權利を侵害しがちなものである。衝動的な慕進的な性質の人はミかく禮儀作法を無視しがちである。神の使命を帯びて、此の世に遺されて居ることを自覺してゐる人は、や、もすれば、それ程天國との近い關係を保つ事を標榜して居ない人等を睥睨しようとする傾きがある。善人にして粗暴である場合が多いし、高潔な行爲に富む人々にして、禮節を缺く事も屢々見受ける所である。慇懃といふ徳は、宗教的な社會に於てすらも、中々見出し難い事は著しい。或るクリスチャン等は、徳を收むる事に熱心なるあまり優雅なる美質を養ふ暇がない。然し禮節は靈の結ぶ果の中の最も美はしいもの、一であつて、完全なる品性に缺くべからざるものである。クリスチャンは何處に於ても如何なる時にも紳士たるべき筈のものである。

パウロは勇氣があつたと同時に禮儀を知つてゐた。彼は紳士としての天性の態度を與へて居た。此天性は彼の衷に深く根ざしたもので、最も意外な場合に顯はれ出たのである。彼の論述の中にも彼の上品な教養を顯はすやうな言句を多く見受ける。アデンスに於ける彼の演説の如きは、禮節ある言論の典型である。彼が口を開く前にパウロは自分に就て人々が色々輕蔑の言を弄して居るのを耳にしたが、それが爲めに、彼の優しい心持はみだされなかつた。彼は彼の聴衆が悉く自分に對して好意を抱いて居るもの、如く「アテネ人よ、我すべての事に就きて、汝等が神々を敬ふ心の篤きを見る」(使一七ノ二三)と語り出したのである。欽定譯では、彼は「我れ汝等がすべての事に就きて迷信の甚しきを見る」と云つた事になつて居るが、これはかの當然尊重されてゐる完譯に於て最も不幸な誤譯の一である。パウロが其様な事を言つた筈はない。それは彼の性情にそぐはない言ひ方である。それは聴手の顔を平手で打つたやうなものである。常識ある人は其言ひ出しに於て聴衆を侮辱する様な事はしない。パウロは語らんとして口を開く場合何時も禮儀の典型となつた。彼は先づ、アデンスの人が神々に歸依する心篤きを稱讚したのである。彼はヘブライの豫言者の言を引用せずして、ギリシヤの詩人等の句を引用し、以つて此等詩人を通して偉大なる宗教的眞理が此世に示された事を認めたのである。アデンス人は神を全然知らぬのではない。唯彼は更に深く

彼等を教へんを欲したのである。即ち彼は彼の理想する境地にまで聴衆を導き行かうこの希望を以て、先づ彼等の現在の状態を指示したのである。然るに彼の聴衆は性急にして、彼の論述が終らざる中に立ち去つて仕舞つたのであつた。其日、典雅なギリシヤ人はクリスチャンのユダヤ人程禮儀正しくはなかつた。

パウロは彼の説教半ばに妨げられた場合ですら、機嫌を害ねたり、野鄙な口返答で意趣返しをしたりするやうな事はなかつた。フェストスが彼の辯明中大聲で「パウロよ汝狂氣せり、汝の博學は汝を狂氣せしめたり」(使二六ノ二四)と差出した時、彼は懇懇に、「フェストス閣下よ我は狂氣せず我宣ぶる所は眞にして慥なる言なり」(使二六ノ二五)と答へた。アグリツバ王が嘲弄的口調で「汝説く事僅かにして我をクリスチャンたらしめんとするか」(使二六ノ二八)と言つたのに對して、パウロには斯くの如き冷笑の言に、少しも激する事なく、穩かに、「説く事の僅かにもせよ、神に願ふは、管に汝のみならず、凡て今日我に聽ける者の、我が如き者ならん事なり」と答へた。而して鎖につながれた己が手を眺めながら、「此縲綆なくして」と付け加へたのである。これは恐らくアグリツバですら、完全だに認めざるを得なかつた程の正しい禮儀であつた。

パウロは暴徒に對しても恭しかつた。エルサレムの暴徒が彼を捕へて宮の外に引きずり出し、彼

を殺す決心で打ち始めた時に、彼は此等の人々は人間であり、同族、同國の輩である事を忘れなかつた。そして語る機會を得るや否や、彼等の國語で、「兄弟たち、親たちよ、今汝等に對する辯明を聽け」(使二二ノ一)と述べて群集を靜めた。それから、彼は自分の經驗の單純な事實を、親しみあり又和解を求むる語調を以て述べ出したので、暫く皆の心が知られたのであつた。たゞ彼は、「異邦人」(使二二ノ二)といふ言を述ぶるに至つて擾亂が又もや盛り返し、遂に千卒長は止むな彼を陣營に倉皇曳き入れたのであつた。

彼の高雅な氣品ある精神の眞面目を最も著しく現はす實例の幾分を、我々は彼の書簡の書出しと結尾に見出すのである。此等の書き出しと結尾は、今日まであまりに閑却されてゐた。彼の書簡が證明辭句の庫を視られた間は、彼の挨拶文や祝禱の言は殆んど注意されなかつた。人々は教理を漁り求めて品性を求めんをせず、聖書の中でも最も精妙にして緊要なる言句を看過して居たのである。然し此等の等閑に附された章句の中に、パウロの心情の類稀なる美が最も顯はに示されてゐるのを見る。彼がテサロニケ人への手紙を書いた時に、シラスとテモテが彼と共に居た。彼等は前に彼と共にテサロニケで働いたのである。彼等はテサロニケ人を知り、テサロニケ人は彼等を知つて居た。

パウロは此等の手紙の冒頭に、三人の名前を書き記した。手紙を一貫して、「我等」てふ複數代名

詞が幾度もなく出て来る。テモテシラスはパウロの補助者であつて、才能、知識、品性に於て彼よりずつと以下の人等であつたに拘らず、彼は彼の名を自分の名と同列に記し、此等の青年等も彼と共に、手紙にあらはる、教訓や奨励の言を書いたかの様に、「我等」といふ代名詞を用ゐて居るのである。

パウロが、彼の友達に個人の手紙を送る時程、懇懇なことは無い。手紙の本文に於ては、そんなに難解であり、又は不明瞭な語句を用ゐても、其結尾に於ては、彼は人を魅する程に人間味を帯びて来る。其文章の一つ／＼が、心情の馨りで香うて居る。我等は彼の記す一語々々を理解する事が出来る。彼の書いたもの、中で最も等閑に附されて居るのは、恐らくローマ書の最後のページであらう。當今大概の人は此のページは固有名詞でうづまつて居るさういふ理由の下に讀み漏らすのである。其中には神の權能やキリストの人格、若くは瀆罪の意義又は靈魂の不滅に關する言句がない。故にそれは神學論には何の材料も提供しない。然し此頃はパウロの書き物の中で最も暗示に富む頁の一である。それは靈感の働を示す好個の實例である。誰でも神の靈に満たされたものでなくば、斯くの如き章句を書く事は出来るものでない。我等はパウロが列擧する人々を知らないから、特別彼等に對して興味を感じはしないが、彼が彼等に關して述べる事柄は、使徒パウロの心意を了解し

易からしむる参考として、實に重要なものである。我々は彼が其友達を取扱ふ方法を見る事によつて、一層深く彼を知るに至る。此等の人々の大部分は貧しい隠れた人々であつた。其中、數名は確かに奴隸であつた。其の或る者は苦勞の外殆んど何も知らない人々であつた。我々が若し彼等の境過や彼等の經驗した困難を知り得たなら、此章全體が榮光に輝くものとなるであらう。パウロの手紙の中で、此章程我々の想像力の働きを要求する章はない。パウロが此章に其名を記して居る人々を眼前に想見し得ないなら、之を讀むも無味乾燥で益少ない。然し其文句を心して精讀する時にはパウロの心情を驚くばかり明かに窺はせるやうなデリケートな筆致で充ちて居る事を發見する。彼は書いて居る。「フィベを助けよ、何にても其要する所を助けよ、彼女は夙くより多くの人の保護者また我が保護者たり」(ローマ一六ノ一、二)「ブリスカミアクラミに安否を問へ、彼等は我が同勞者にして、我が生命の爲めに己の首をも惜まざりき」(ローマ一六ノ三、四)、「主に在りて甚く勞せし愛するペルスシスに安否を問へ」(ローマ一六ノ十二)、「汝等の爲めに甚く勞せしマリヤに安否を問へ」(ローマ一六ノ六)、「主に在りて選ばれたるルツボスミ其の母ミに安否を問へ、彼の母は我にもまた母なり」(ローマ一六ノ十三)、「ネレオ及びその姉妹……及び彼等ミ偕に在る凡ての聖徒に安否を問へ」(ローマ一六ノ一五)パウロには各々の人に就て何か好意の言を述べた。其多くの人々

を「同勞者」を呼んでゐる。其中の三人をば「愛するもの」を呼んでゐる。尙三人は彼の同族であり、二人は彼と共に囚人たりし人々である。彼は歸人等を書き漏して居ない。或人に姉妹があれば彼は其姉妹に就て述べて居る。其人母があれば、彼は其母を忘れはしない。其人の屋根の下に禮拜を共にするクリスチャンの一團があれば、彼は其一團全部をも含めて安否を問うたのである。特別に苦しい經驗を嘗めたものがある場合には、彼は其事をした、めた。世の常ならざる働きをしたものがある時は、彼は又それを心に思ひ出した。アジアに於ける最初の改心者は彼の心にしつかりと残つてゐた。それ故に試験に遭つて之に勝利を得たアベレは彼はよく憶えて居た。パウロには其祈禱の中に友等の名を名ざして祈る習慣を有つて居た。で其手紙の中にも名を記すのは彼に取つて自然な事であつた。然しパウロの心のみが好意に満ちて居るわけではない。他の人々も挨拶の言を送り度いのである。故に彼は彼等の名も挨拶の中に加へたのである。即ちテモテ、ルキヨ、ヤソン、ソシパテロ、ガヨス、エラスト、クワルト、それから、學者テルテオさへ加へてある。現代の會衆に取つては、ロマ書の最後の章は、無味乾燥でよむに堪へない。然しそれがローマに於ける會衆によみ聞かされた時には、みんなにか、人々の眼は輝き、彼等の心臓は鼓動した事であらう。自分の名が列擧された男女に取つては、此章こそローマ書全體の中心であつた。それは彼等をイエスに隨ふ

やう勵ます點に於て、パウロの救ひの哲學の全部よりも更に役立つのである。

パウロは他人の感性を考慮した。彼は決して故意に人の感性を害する事はなかつた。彼はコリント人に對しては、彼がコリントに來ないわけは、彼が居ない事が却つて彼等の問題を解決し易からしめると思ふからであると言つた。彼はローマ人への手紙の中に、誤解を未然に禦ぐやう注意して居る。彼は「汝等を見ん事を切に望むは汝等に靈の賜物を分け與へんことなり」(ローマ一〇十一)と書いた。然し彼は其語調が何もなく氣に入らなかつた。それは稍々差出がましく聞えた。それで彼は言ひ變へて、「即ち、我汝等の中において互の信仰により相共に慰められん爲なり」(ローマ一〇十二)と加へたのである。

此同じ手紙の終りの方に於て、彼は或は無遠慮に書き過ぎて、少しく憎越らしく見えたかも知れぬと感じたので、讀者に確言するに、彼は彼等が善良なる心情を十分に有ち、知識に於て豊かであり、相互に勧め合ふ能力を十分有して居るを信するが故に、敢へて自己を彼等の上に置く意志はない事を以てした。彼の目的は單に彼等の記憶を新たにするにあつた。若し彼が多少自由に書いたことすれば、それは神が彼を恵み異邦人に對する働人に任じ給うたが故であつた。

彼は面識なき人々に對して慇懃であつたが、舊知の友達に對しても同様に慇懃であつた。彼に於

ては親密は無遠慮に墮する事はない。ピリピ人へ書き送るに當つて、彼は彼等の親切に對し感謝の念を缺くもの、如く思はれぬやう注意して居る。彼が恰度受取つた彼等よりの賜物にあらはれて居るやうに、彼等が彼を思ふ心の再び萌したるを甚しく喜ぶ事を書いた時、彼はすぐ其後に「汝等は固より我を思ひたるなれど、機を得ざりしなり」(ピリピ四〇十)と書き足した。彼は如何なる狀に居るにも、足る事を學んだのであるから、彼が贈物を望んで居たかの如く彼等は思はれ度くなかつたのであるが、然し彼等が贈つて呉れた物に對しては、深く感謝したのである。それは單に自分がそれによつて恩恵を受くるのみならず、彼等自らも祝福を受けるが故であつた。かゝる投資より來る利子は積つて彼等の利益となるであらうと彼は云ふ。彼等が彼に送つた贈物は馨ばしき香にして神の享け給ふところ、喜び給ふ所の供物であること云つた。

彼がピレモンへ手紙を送る時も等しくこまやかな優しい情を示してゐる。彼は彼に爲すべき事を命じようとするのではなく、寧ろ愛の故によりて其逃亡せる奴隷を引取らん事を願ふのであること述べて居る。「彼もし汝のものを盗みしならば、之を我に負はせよ。我パウロ手づから之を記す、われ償はん。元より汝我に負ふ所あるを思ひ出させん——汝我に汝の靈魂を負へり。請ふ、我れに償へ。オネシモを汝の愛する兄弟として納れて我が心を安んぜよ」(ピレモン一八、一六、一七、二十)

ミパウロには書いた。

パウロは人々の信仰を左右しようとは欲しなかつた。コリント人に對しても、彼は自分の權威をもつて彼等を壓倒する事を欲しないこと確言した。彼の望む所は單に、彼等の生活のよろこびを増さん事にあつた。彼の不斷の目的は彼等を盛り立てるにあつた。彼は他人の權利を尊重した。何人も強ひられる事を彼は欲しなかつた。彼は我に彼の改心者の良心を尊重した。彼は人の良心を尊重して、それを卑下し、若くは其聲を止めるやうな事を決してしなかつた。彼の改心者の多くは、多分に良心の咎を有つて居た。その中には馬鹿々々しいものもあつた。彼の教會に於ける男女は、恐る恐る光に向つて進み行く心から生じ來る疑心や不安の爲めに、あはれな状態にあつた。パウロは如何なるクリスチャンと雖も、自己の良心に背いて事を爲すことを許さなかつた。或人が、或事を惡いこと考へるならば、其人に取つては其事は悪いのであるから、それを爲すべきでない。更にかゝる良心の咎を有たぬ人は、自己の優越を誇つて、弱き兄弟の信仰を破滅に陥らせるが如き行動を執るべきでない。異邦人の諸教會に於ては、異教の宮に曝された肉を食する事の可否に關し絶て議論がえなかつた。パウロにはかゝる肉はすべての他の肉と同様に無害なものであることを知つて居た。異教の神はあるものでない。されば存在せざる神々がごうして、其祭壇に捧げられた肉を汚す事が

出来よう。

然しパウロは紳士であつた故に、彼の行動の兄弟等に與ふる影響を考へざるを得なかつた。「汝等、其兄弟に對して罪を犯すは、之れキリストに對して罪を犯すなり」斯くパウロは確信して居た。故に彼の爲すべき點は明白であつた。彼は例の衝動的な、心をこめた調子で、彼の態度を表明したが、其言葉は彼の唇から洩れた言葉の中でも最も知られて居るもの、一である。曰く「もし食物我兄弟を躓かせんには、兄弟を躓かせぬ爲めに、我は何時までも肉を食はじ」(哥前八ノ十三)更に彼の禮節は、他の傳道者が既に働いた地方には行かないといふ彼の特定の方針にもあらはれて居る。彼は他の傳道者の傳道區域に侵入して迷惑をかける事を好まなかつた。彼は特に十二使徒の働に干渉しないやうに、ミスを付けて居た。彼は決して彼等の競争者の位置に立たなかつた。或ひは如何なる方式に於ても彼等に對して無禮な態度を見せなかつた。彼は高い名譽感と精緻な情感を有つて居たので、當然他人の執るべき位置に割り込む事は爲し得ぬ業であつた。すべて他人の道を遮る事は彼の嫌惡する處であつた。此の彼の方針をば、彼はローマ人等は念入りに説明して居る。そして彼がローマに來る理由を明かにして居る。ローマは彼の目的地ではないのである。此市は他人のものである。彼の赴かんとして居るのはスペインである。之れ、この國には未だ何等の傳道も試みら

れて居なかつたからである。「我は努めて他人の置きたる基礎の上に建てじみて、未だキリストの御名の稱へられぬ所にのみ福音を宣傳へたり。……我はエルサレムよりイルリコの地方に到るまで、且くキリストの福音を充せり。……然れど、今は此地方に働くべき處なければ、イスパニヤに赴かん。……立寄りて汝等を見、ほゞ意に滿つるを得てのち汝等に送られん事を望むなり」(ロマ一五ノ二十、一九、二三、二四)ミ彼は云つて居る。彼は他の傳道者等の區域に侵入するかの如く見える事すらも避けようと思つたのである。

彼の禮儀厚き爲め、或人々は彼を誤解するに至つた。彼等は彼の溫和を柔弱と思ひ違へた。彼等は眞の使徒がそれ程に慇懃で謙讓であり得ようとは信ずる事が出来なかつたのである。コリント人等に對して彼は斯く書いて居る、「汝等に對し面前にては謙だり、離れ居ては勇ましき我パウロに、自らキリストの柔和と寛容をもて汝等に勸む」(哥後十〇一)パウロの敵は左様彼を評して居たのである。野人にまつては紳士の行爲を理解する事は容易でない。

パウロは性來衝動的であつたが、よく己れを制して居た。彼は天性強烈であつたが、よく己れを力を抑制して居た。彼は自己の使命を痛感して居たが、決して禮節を忘れなかつた。彼は自己の權威を意識して居たが、傲慢な態度を執らなかつた。彼はキリスト流の紳士であつた。そして上は王

侯より下は田夫野人に至るまで、すべての人に對して禮節を守り得た。彼の慇懃はあらゆる人々の間に周知の事實となつて居たのである。

第十五章 彼の義憤

義憤の徳程我等を思ひ惑はせるものはない。時としては、それは一體、徳であるかどうか怪しまれる。ギリシヤ人やローマ人等はそれを主徳の表の中に入れなかつたし、キリスト教の教父等はそれを宗教的美徳の中に數へなかつた。パウロはそれを靈の果實の中に含めなかつたし、また、美徳のどの表にもそれは見當らないのである。

それが實際に一つの徳であると決めても、それを定義する事は困難である。それはすぐ別な性質のものに移り易い。それは立ちどころに激怒となり得るし、激怒はすぐに狂怒に變はり得る。而して狂怒は悪である事を我等は知る。或は、それは單なる神經質的な痼癩に墮し、無氣力な腹立ちの落着かない状態に陥る事もあらう。純粹なるまゝの義憤は中々見當らないものである。それは殘忍憎惡、復讐と云つたやうな他の感情と混ざる。此等の感情の善くない事は我等の知る處である。雜り氣のない義憤なるものは之を發見する事困難である。

義憤が徳と思へぬのは、我等が之を得る爲努力する必要がないからでもある。それは我等に生れ付いたものである。子供ですら、教へられずして憤怒の情をあらはす事が出来る。小兒は白髪の人よりも怒り易い。此徳を獲得する爲に、誰も努力する必要がない。それは我々の生來の體質の一部、所謂原罪の一要素、我々を此世にもたらした遺傳的罪惡の一分子ではないかと見える。

然し、それは神に似た性質であるから、徳であるに相違ない。神は義憤の情を有たないのではない。イエスは神の本質の像であるが故に、それから推知し得るのである。我々はイエスによつて神の何たるかを知るに至る。イエスの心は神の心であり、イエスの品性は神の品性である。イエスは義憤の人であつた。彼の眼はひらめき、彼の言は燃えた。エルサレムには、彼の怒れる眼ざしを到底忘れ得なかつた人々があつた。彼に最も昵近して居り彼を聖なるものと呼んで居た人々も、怒れる彼を見た時の事を時々思ひ浮べた。彼等はすべてその信徒を教ふる爲めに書いた物語の中に其事を述ぶることを躊躇しなかつた。

我々の想ひを的確に言ひ表はす事は六ヶ敷いかも知れぬが、我々は皆、義憤なるものがある事を確信するものである。我々は我々の憤怒が其性質のものであるかどうかは疑はしく思ふかも知れぬが、斯くの如き感情は、此宇宙に存在の權利を有する事を確信する。義しい人が不義の行爲を目撃

する時に、彼の中に或物が燃える。其火をば我等は義憤と稱するのである。名譽と純潔と憐憫とを愛する者が、野鄙と卑劣と殘忍とを見る時に、彼の心に一種反抗的の感情が波立つて來る。其感情を我等は義憤と名づけるのである。それは不快、反抗、譴責の感情である。而して此感情が起らなければ、それは心が墮落して居るからであり、魂が最高の感情の力を失つて居るからである。蠻行を目撃しながら無感覺で居られる人は常態の人間だと自任する權利はない。非道なる行爲に對して其魂が熱し、強く反抗しないとすれば、それは、彼が最早高級な生活の範圍に生きて居なくなつたからである。憤怒に燃える事の出来ない人間は我等の英雄たり得ない。道徳上の差別に無關心であり、明白なる非行を目撃して恬然たるが如き無氣力無神經の人間は道徳的墮落者であつて、剛健なる性格と成熟せる人格の人々と伍する資格なきものである。

パウロの人格は圓熟して居た。彼は惡人等の醜行を見ては烈火の如く怒に燃えた。彼は我等と同じく時としては其烈火を制するに困難を感じ限られた程度を超えても、その燃焼するが儘にまかせた。ユダヤの詩篇の中に、彼に多くの慰藉を與へた一句があつた、「汝等怒るとも罪を犯すな（エペソ四ノ二六）」と云ふのが之れである。彼は屢々此句を思ひめぐらした。そして彼がローマに捕はれ人となつた時、エペソに於ける友達に送つた書簡の中に之を引用した。彼は彼等がどんなに激し

易い人々であるかを知つて居た。又エペソの大都會には多くの醜行悪事が充ちて居ることを知つて居た。彼の魂は、其地で彼が戦つた悪人等の爲めに激怒に慄へた事も屢々あつた。またエペソの教會内にすらも困惑した人々があつた事を彼は憶えて居た。エペソの環境全體が憤怒の情を咬つた。それで彼はエペソ人に「怒るとも罪を犯すなかれ」との古へのヘブライ詩人の勸言を想ひ出さしたのである。此句の中には獎勵の意味がこもつて居た。詩人は人に怒る特權を許して居る。これは一種の慰藉であつた。人は如何なる場合に於いても怒る權利がないと説かれるならば、魂は落着を失ひ、反抗的になるであらう。我が詩人は、人は怒るとも罪を犯さなくてすむと感じた、然しまた怒りは罪に墮し易い事を知るが故に、「罪を犯すな」と附言したのである。それは警戒の言である。而してパウロは此警戒を更に力強く言はん爲に、次の忠告を加へた、「憤怒を日の入るまで續くるな、惡魔に機會を得さすな」(エペソ四ノ二六、二七)彼は自分の經驗からして、憤怒の焰が烈しく若しくは永く燃え過ぎる時は、他のいろ／＼な罪惡が伴ひ易き事を見出した。すべて人が常習的の癩癩の状態に陥る時に、其人は惡の靈に其奸計を行ふべき機會を與へて居るのである。パウロがエペソ人に捨て去るべき種々なる事柄を列擧した中に、先づ第一に擧げたのは、苦き感じ、憤怒、怒りであつた。彼自身屢々此種の誘惑を受けた經驗があつたので、同じ誘惑を受けて居る人々に對して

如何に書き送るべきかはよく心得て居たのである。

彼が監督者たるもの、第一の資格に關してテトスに教へた時に、「それ監督は……放縱なるべからず、輕々しく怒るべからず」(テトス一ノ七)と述べた。パウロは、會衆の靈的發達に對して責任を負ふ人は輕々しく怒るべきでない事を知つて居た。若し其人が輕々しく怒るならば、彼は殆ど何時も怒つて居る事にならう。何事か、いつも間違つて居るし、誰か、何時も彼の氣を焦だて、居るし、けちな事、卑しい事、偽善的な事が絶えず後から後からあらはれて來る。故に、宗教的指導者は怒りに燃え立つ事を出來る心を有つて居なくてはならないが、其焰によつて自身までも燃やし盡すが如き事なきやう心すべきである。我等はパウロが他の人々に與へた勸告を讀む事によつて彼の内的生活を明かに窺ひ知るのである。

パウロの全生涯中、最も劇的な場面の一は、エルサレム議會の席上に於ける彼の怒號であつた。それは彼の裁判の冒頭に起つた事であつた。彼は、今日に至るまで事毎に良心に従ひて神に事へたり、と言つて彼の證言を述べ始めたのであつた。此言は大祭司の氣に入らなかつた。彼は發作的な狂怒にまかせて、パウロの傍に立つ者に彼の口を撃つ事を命じた。此命令は卑法極まる命令であつたので、これが爲めにパウロは怒りに燃え立つた。裁判所の内で、裁判官の命令によつて囚人の顔

を打たせると云ふ事は、兇暴の沙汰であつて、其爲め、パウロは激怒して胸一杯になつた。此熱烈なる憤怒がパウロの人物を示すのである。此怒號が無かつたならば、我等はパウロをそれ程よく知り得なかつたらう。それは恰も、彼の靈の特徴を鮮かに示す所の電光の閃きてあつた。瞬く間に、雷は打ち下された。「神汝を撃ち給はん、汝白く塗られたる壁よ。汝は律法によりて我を審く爲めに坐するに非るか、汝は律法に悖りて我を撃つ事を命ずるか」(使二三ノ三)此等の言葉は、居ならぶ凡ての人の心に悚然たる恐怖を感ぜしめた。幾代もの間に、ユダヤ人にして斯くの如く大祭司に詰問する勇氣を示したものは嘗てなかつた。

斯くの如く熱し切つた言を吐き得るのは人が怒つた場合のみである。パウロを激怒せしめたのは其行爲の不法なことであつた。無賴漢をば裁判官として立たせるとは何たる汚辱であらう。斯くの如き暴舉が非難されないうて居るとしたら、それは國家に取つて何たる恥辱であらう。パウロは直ぐ様、自分の怒語に對して陳謝したが、其言葉を取消す事は出来なかつた。彼が言つた事は言つて仕舞つたのである。而して世の終りに至るまで人々は其言を讀むであらう、且之を讀む時に、イエスキリストの使徒でありながら烈火の如き義憤を洩らし得た人の熱情を感受するであらう。

パウロが最も憤つたのは個人的の侮辱に對してではなかつた。口を撲たれたといふ肉體的苦痛が

彼の憤怒を買つたのではない。單に己れに加へられた損害の故に怒る人々がある。自己の權利が蹂躪される時に、彼等は烈しい抗議の叫びを擧げるのである。然しパウロを火の如く憤らせたのは、他人に加へられた非行であつた。彼は母の如き心づかひをもつて彼の改心者等をいたはつた。彼等に害を加へたものはまた彼にも害を加へたのであつた。イエスが其弟子等に對して抱いて居たと同じ感情を、彼は其改心者等に對して抱いて居たのである。人々は「我を信ずる此の小き者の一人を躪かすものは、寧ろ大なる礮臼を頸に懸けられ、海の深處に沈めらるゝ方が益なり」(マタイ一八ノ六)との白熱的な言葉を到底忘れる事は出来なかつた。パウロも此れと同じ様な愛をもつて、其改心者等を見守つた。彼が心に負うて居る重荷に就てコリント人等に語る場合に、彼は其改心者等に加へられた毀害に説き及んで言ふ、「誰か躪かせられて、我れ憤怒に燃えざらんや」(哥後一一ノ二九)彼の敵は常に彼等を奪ひ去らんと努め、常に彼等の信仰を破壊せんと計り、常に彼等を罪に陥れんとたくらんで居たので、彼の魂は怒りに燃えたのである。地上の高位に坐する者等が、彼の改心者等の口を撲つ事を命じた時に、彼は恰も自分自身の口を撲たれたかの如く敏感に憤つたのである。

彼はキリスト教の教の意味を曲解する人々に對して憤つた。彼等は福音の靈妙なる内容を空にし

たのである。彼等は彼を市から市へと追ひ廻はし、虚言を放つて歩いた。彼等は獵犬の様なもので嗅ぎつけたものを離れようとしなかつた。彼等の彼に對する卑劣な誹謗や彼の名を傷ける爲めに用ゐた陋劣な方法は、彼を極度に怒らせたので、彼は時としては峻烈な、殆ど粗暴な言葉を用ゐる事があつた位である。彼はピリピ人等に「汝等犬に心せよ」(ピリピ三ノ二)と書き送つた。彼は其頃ローマに捕はれて居たのであるが、彼の孤獨の中に於ても、犬の鳴聲を聞く事が出来た。此等の犬は、小アジ全體に互つて咆え猛つて居た。其齒は鋭く、其口は餓ゑて居た。東洋に於ける犬は、今日キリスト教諸國に於ける犬の様な好評を受けず、又特權も與へられて居なかつた。それで、一人の人が他の人を犬と呼んだ場合には口にする事を躊躇する様な言葉を吐いたわけである。人々が相互に犬呼はりをするのは大概怒つた場合である。

パウロのすべての書簡の中で最も熱のある書簡はガラテヤ書である。ルーテルは此書簡に於けるパウロの言句は烈しい焔である、而して彼は、いはゞ天使を詛ふ言で書き出して居る、と云つたが正に其通りである。彼は、彼の解釋する福音を受け容れぬ者を悉く詛つて居る。ユダヤ主義者等が福音を曲解して或るガラテヤの改心者等の信仰を擾して居たので、パウロの魂は激したのであつた。彼は熱情的な激昂をもつて書いて居る。彼の言句は激流の如く迸り出て居る。此書簡全體が電雷に

似て居る。彼は、渦巻く激情をもつて、叱咤し、懇願し、忌憚し、訓戒し、論議し、固執して居るのである。「愚なる哉ガラテヤ人よ……誰が汝等を誑かし、ぞ。我は汝等より唯この事を聞かんと欲す、汝等が御靈を受けしは律法の行爲に由るか、聽きて信じたるに由るか。汝等は斯くも愚なるか。誰にもせよ、汝等を擾すものは詛はるべし」(ガラテヤ三ノ一—三、一ノ七、八)冒頭の「人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び……父なる神に由りて使徒となれるパウロ」(ガラテヤ一ノ一)の文句より、最後の「今よりのち誰も我を煩はすな」(ガラテヤ六〇一七)の言に至るまで、我等は、殆んど激發的な發言を抑制し切れぬ程憤つた人の言句を讀むの思ひがする。されど同様な義憤の精神を、彼がコリント人に送つた書簡にも幾分窺ふ事が出来る。此書簡では其義憤の念が、皮肉や諷刺となつて表はれて居る。パウロはコリントに於ける敵の罵言誹謗を苦し、それを嘲弄的の手眞似ではらひ斥けたのである。彼等が云うて居る事柄の不當である事を彼は憤つたのである。

パウロの憤怒を買つたすべての敵の中で、先づ第一に擧げていゝのは恐らくエルマであらう。エルマはクプロ島のバボスに住んで居た占星者であつた。彼はユダヤ人ではあつたが、其地のローマ總督の隨行員の一人となつて居た。當時、星が人間の生活と密接な關係を有つものであり、人間の

運命は星座を窺ふ事によつて判断する事が出来ると思はれて居た。此種の迷信が山師等に乘すべき機会を與へた。彼等は到る處に、靈知を有すとなへ歩いて、之を高價で賣つて居た。人性は瞞される事を好む、故に、何時の時代にも詐欺師の数は多いのである。バルナバとパウロがバボスに來た時に、彼等は總督の邸宅で彼等の新しき教を述べるやう請はれたが、エルマは勿論列席して居た。彼は二人のキリスト教宣傳者等の話を妨げ、彼等を罵り、總督が此新宗教を奉ずるに至らぬ様極力努めたのである。パウロは彼の無禮な妨害を永く忍んで居る事が出来なかつた。彼は、正直な人々の反對は、同情をもつて堪へ忍ぶ事が出来たが、横柄な惡漢に對しては忍耐が出来なかつたのである。エルマは恐らくパウロがこれまでに於て初めて出遭つた此種の人物であつたらう。彼及びバルナバは恰度彼等の第一傳道旅行に出掛けて居たのである。而して其門出に於て此無禮なる詐欺師に出遭つたのである。バルナバは如何に感じたかは記してないが、パウロの魂は熱した。彼はかの口輕な詐欺師を用捨なく責めた。彼は烈火の如き怒りを含んで、惡漢をにらみ付け、彼が何であるかを明らさまに告げた。憤怒は往々にして舌に新しい力を添へるものであるが、此時程パウロが力強い言葉を用ゐる事に成功した事はなかつた。「あらゆる詭計と奸惡とに満ちたる者」と彼は言ひ出したのであるが、更に語をついで「惡魔の子」といひ、尙此れにも満足せずして「すべての義

の敵よ、汝主の直き道を曲げて止まぬか」(使一三〇十)とつけ加へたのである。それからパウロは、嚴かな語調で、其面喰つて居る卑劣者に對して、彼は暫く盲目となるべき事を宣告した。此宣告は靦面に惡漢の眼に曇りをかけたもの、如く見えた。彼はいまだ嘗てパウロの如き人間と渡り合つた事がなかつたと感じつゝ、手を取つて導いてくれる者を探し歩いた。パウロは魔法使ひや手品師や、占星者や易者や、其他有らゆる種類の山師を惡み嫌つた。パウロ時代の世界は手品師や詐欺師や破廉恥漢や自負者や、無智な迷信的な人民の輕信に乗ずる種々雑多な無賴漢で充滿して居た。エルマは斯うした連中の大きな階級を代表する目立つた代表的人物であつた。彼を峻嚴に處罰する事は到る處に散在して居る有ゆる詐欺師に對する警告として必要であつた。嘗つて、キリスト教信者と自稱する者が、ペテロを詐る者と誹つた爲めに、エルサレムの教會の中で、ペテロの足下に倒れて死んだが、今や教會外の詐り者が暫く其視力を失つたのである。眞理の上に築かれ、又、眞理を信じ眞理を語る精神の上に萬事が成り立つて居る此宇宙に於て、虚偽を行ひ虚偽を賣つて生活を營だ人間は、何たる怪物であらう。眞理を愛する人の魂は、欺き詐る者等に對して假借する處なく劇烈に反抗して立つのである。我々にパウロの如き熱情がないとすれば、それは我々が彼の如く高潔でない事を示すものである。

パウロの怒りの情が全く止んだ時があつたかどうかは知らない、然し、彼の憤怒は慢性的な屈託や個人的怨恨に墮する様なことは決してなかつた事は、我々の知る處である。それは、所謂復讐てふ醜いものには決してならなかつた。彼の憤怒は眞理を熱愛する魂の、虚偽と不法とに對する燃ゆるが如き反抗であつたのである。彼はテモテに教ふるに、祈りの爲めに擧ぐる手は憤怒と不和の爲めに用ゐらるべきでない事を以つてした。而して、彼がローマ人に對して「自ら復讐すな、たゞ神の怒りに任せまつれ」(ローマ二〇一九)と書いたが此言句はまた全世界に對する警告でもあつた。

第十六章 彼の柔和

パウロの峻嚴さは多くの人々に不快の感を抱かせた。然し彼の峻嚴は不思議にも、實は彼の柔和に基くものであつた。彼があれ程温和で愛情深くなかつたなら、あれ程嚴格ではなかつたらう。愛の義憤程峻嚴苛酷なものはないのである。

パウロは、クリスチャンとなる前に優しい心の人であつたか否かは分らない。當時の彼に就て我々の知る處は彼がイエスの信する人々の迫害者であつたといふ事である。而して自分が有害なる異端であると思ひ込んで居るものを絶滅する事に熱中する迫害者は決して優しい大人しい人であり得ない。迫害者としてのパウロは、有らゆる迫害者と同じ様に、粗暴且つ残酷であつた。彼は憐憫の情を缺いて居るか見えた。人々が鞭たれ殺されて居た時、彼は何等良心の苛責を感じぬらしかつた。我々の知る範圍では、彼はステパノの死に動かされたことはなかつた。かの顛死の人の顔も祈りも彼を動かさなかつた。彼は、ステパノの謀殺者等がやりかけた事業の中に、一氣に跳り込ん

だ。然しながら、ステパノの顔に祈りが、彼に印象を残した事は疑ふ餘地がない。彼は之を忘れ得なかつた。其印象は彼に付き纏つて居た。幾年か後に、彼はルカに其話をした。ルカは、當時議會に坐したる者皆目を注いでステパノを見たるに、「その顔は天使の顔の如くなりき」(使六〇、一五)と書いて居るが、これはパウロの言葉を引用したものに相違ない。ステパノが彼の迫害者等の前に出でた時に、彼の顔は輝き渡つて居た、パウロはその美はしい顔を終生忘れる事が出来なかつた。それは彼を和げはしなかつたが、始終彼に付き纏つて來た。また、ステパノの臨終の祈禱や、其前の長い演説を、到底忘れ得ぬものであつた。其演説は使徒行傳に記されたる演説の中で最も完全なものであるが、かく完全に記されて居るのは多分パウロの強記が然らしめたものであらう。彼は耳をすまして之に傾聴したので、其演説は決して彼の心から消えて行く事はなかつた。ステパノが其臨終の眼を閉づる前に捧げた祈禱は、また、其後永久にパウロの記憶に新たであつた。「主よ、この罪を彼等に負はせ給ふな。主イエスよ、我靈を受け給へ」(使七〇五九、六十)此祈禱を彼はさうして忘れる事が出来よう。其時は、此等の言はパウロの心を動かさなかつたが、然しそれは彼の心の奥底に深く銘じ、永久に忘れられぬものとなつたのである。

パウロの心を和げたものは、ステパノの顔でも聲でもなくして、イエスの顔と聲であつた。イエ

スの顔の美はしさが、パウロの石の心を取り除き肉の心を授けたのであつた。パウロがダマスコの門の近くに於てイエスにまみえた時以來、彼は柔和の化身であつた。此變化の秘訣はパウロの有ゆる獎勵の言葉の中でも最も美はしい言で示されて居る、「互に仁慈と憐憫とあれ、キリストに在りて神の汝等を赦し給ひし如く汝等も互に赦せ」(エペソ四〇三二)。

パウロは、彼の協力者等に對しては寛大で、情に厚かつた。彼は特にテモテを愛した。彼はテモテを自分の息子、子供、愛する兒だと言つて居る。ピリピ人等への書簡の中に「テモテの鍊達なるは、汝等の知る所なり、即ち子の父に於ける如く我と共に福音の爲めに勧めたり」(ピリピ二〇二二)と述べてゐる。パウロは彼に就て誇り、彼の爲めに配慮した。誰かテモテの感じ易い、引込み勝ちな心害ねはしまいかと常に心配して居た。彼はコリント人に勧むるに、彼はパウロと同じく主の業を務むる者であるから彼に對して親切にし、彼等のうちに懼れなく居らしめ、又誰も彼を卑しむる事なき様つとむべきを以つてした。

「彼れ汝等の許を去る時、安らかに送りて我許に來らしめよ、我れかれが兄弟たちと共に來るを待てるなり」(哥前一六〇十一)と愛情深き我が使徒は書いた。彼は、單に他人に諭すのみならず、テモテ自身にも忠言を提して、彼が他から乗ぜられぬ様注意した。「汝年若きをもて人に輕んぜらる

るな」(テモテ前四〇二二)。テモテの健康は虚弱であつたので、これまたパウロの心配の種であつた。彼は其書簡の一の中に、テモテに試みて見る様にミテ或る治療法を教へて居る。我々は此治療法を大して好いと思はぬかも知れぬが、之を推薦した心は大に尊重せざるを得ない。それはパウロの知れる最良の、唯一の治療法であつたのである。而して人が其最善のものを提供して居るならば、それ以上盡すべき道は何處にあらう。

パウロの友達の病氣は彼の心を重くした。彼の書簡の一に於て彼が嘗つてエパフロデトに就て、さんなに心配したかを書いて居る。エパフロデトは大病であつた。凡ての人は彼は死ぬる事と思つて居た。ピリピ人等は此事を聞いて心を痛めて居た。エパフロデトがよくなつて來た時に、ピリピに於ける友達が自分の爲めに心痛して居るさういふので、今度は彼が心配し出し成るべく早く歸郷し度い願つた。パウロは彼ミ彼の友達の兩方の爲めに配慮して居た。彼はエパフロデトの病氣が回復したのは神意であると感じた。パウロ自身の言葉を以て云へば「神は彼を憐み給へり、嘗に彼のみならず、我をも憐み、憂に憂を重ねしめ給はざりき。此故に急ぎて彼を遣はす、なんぢらが再び彼を見て喜ばん爲なり、又我が憂を少うせんが爲なり」(ピリピ二〇二七、二八)こゝにパウロ及び彼の友等の内生活を深く窺ひ知る事が出来るのである。

パウロは自己、或ひは彼の愛する人々の肉體的疾病を癒す力を有たなかつた。斯うした力はイエス・キリストの使者たるもの、資格に缺くべからざる要素である。或人達は發明顔にこなへるのであるが、パウロはそんな事は知らなかつた。彼は、疾病は人間の經驗上、明白な、蔽ふべからざる事實である事を認めたので、これを言ひ紛らさうとも、又新奇な文字をならべ立て、其存在を否定しようとも努めなかつた。彼は否定すべからざる明白な事實をば、結局混亂を招き欺瞞に陥る外なき婉曲なる言説で押しつけるやうな事を容さなかつた。彼の肉體が病む時には、其通り云ふ事を恥しなかつたし、また祈りによつてそれを癒す事が出来なかつた事を告白する事をも恥ぢなかつた。彼は神は彼を愛し給うて、すべて理に隨つて爲し得る事はよこんで彼の爲めに成し就げ給ふ事を確信して居た。故に、神が、肉體の病の癒されん事を祈つた彼の祈りに應ずる事を拒み給うた時に、彼は何の不平もこなへずして神の思召に従つたのである。彼はいさ、かも、大使徒等に劣る處はなかつたが、自己をも自分の友をも癒す事は出来なかつた。他の人々と同じく彼も、不可抗なこゝには従はざるを得なかつた。而して肉體の病は彼が素直に負うた重荷の一であつた。彼がテモテへの最後の書簡に述べた言葉をよむ時に、我等は、殆どパウロの心臓の溜息を聞く思ひがする、「トロピモは病ある故に我かれをミレトに遣せり」(テモテ後四〇二十)。彼はトロピモを連れて

来たかつたのであるが、その哀れな男は大病だつたので来るこゝが出来なかつた。彼は此人をローマに於て要したのであるが、病人では何の助力にもならない。パウロは彼の友誼と援助を期待して居たのであるが、それは結局失望に終つた。パウロは獨りで行かなければならなかつた。斯くして、既に重荷を負ひ過ぎて居る彼の心に、更にも一つの心配が加はつたのである。

彼が、バルチバの姉妹の子である、ヨハネと稱ふるマルコに就て述べる言葉は如何に情愛に満ちたものであらう。此マルコは嘗ては或る大事な場合に、卑怯な行動に出でた事があり、それが爲めにパウロは彼に困難にして危険多き働を託する事は出来ぬと感ずるに至つたのであつた。それはマルコが若い時分の事であつたが、後年に至つてマルコは若年時代の不面目を洗ひ流して仕舞つて居た。彼は忠實に働く事によつて信頼するに足る人物である事を證明したので、パウロは再び彼を信任するに至つた。「マルコ若し汝等に到らば之を受けよ」(コロサイ四〇十)かくパウロはコロサイ人に書いたのである。彼は、過ぎにし頃の記憶がまだ何處かに残つて居り、それが爲めにコロサイ人がマルコを冷遇するやうな事はないか、氣づかつたのである。それでパウロは「彼を冷遇するな、彼を歓迎せよ、彼は十分信頼するに足り、愛する價值ある男だ」と云つたのである。テモテへの最後の書簡に於て「汝マルコを連れて共に來れ」(テモテ後四〇十一)と書いた。マルコは嘗

てはパウロを妨げたが、今は彼の助けとなる事が出来るのであつた。嘗つては彼は邪魔者であつたが、今は大なる奉仕をする事が出来るに至つた。「汝マルコを連れて共に來れ」この言は、イエスが婦人等に對して申された「往きて、弟子等ミペテロに告げよ」(マルコ一六〇七)この言を聯想させる。嘗つて罪を犯して不面目を買ひ且つ傳道をにぶらせたそのペテロへ、婦人達が遣はされたのである。婦人達はよろこばしき報知を十二使徒全體にもたらずのであつたが、特に悔恨の情に沈んで到底斯くの如き報告を豫期して居なかつた彼れペテロにもたらず事を命ぜられたのである。「ペテロに告げよ」それと同じ様に、パウロは己が子と慈しむテモテに「出来る丈早く來れ。そしてマルコを共に連れ來れ」と頼んだのである。此青年マルコが躓き倒れた時に、パウロは峻嚴に過ぎた。けれども今は老いたる使徒の情愛深き心は、廣く開かれて彼を迎へ入れて居るのである。パウロは如何に赦し如何に忘れるべきかを知つて居た。

パウロは彼の改心者等を優しい愛情をもつて愛しんだ。彼等と呼ぶに「我が愛するものよ」「我が親しく愛するものよ」この言葉を以つてしたが、之れは今日の言葉で云へば「我が愛人」の意である。彼等は皆彼に取つて愛すべき人々であつた。彼の書簡の中で最も峻嚴を極めたガラテヤ書に於てすら「わが幼兒よ、汝等の衷にキリストの形成るまでは、我幾度も産の苦痛をなす。今我れ汝等

に到らん……事を願ふ」(四〇一九、二十)と云つて居る。

彼の改心者の誰をでも傷める事は彼に深刻な苦痛を與へた。時としては峻嚴な事を云ふ必要があつたが、斯うした鋭い言は、それを受ける人を傷ませるより以上に彼の心を傷ませたのである。彼はコリントに於ける教會に峻烈な書簡を送つた事があるが、其後、次の如く云つて居る、「我大なる患難と心の悲哀とにより、多くの涙をもつて汝等に書き贈れり。これ汝等を憂ひしめんこにあらず、我が汝等に對する愛の溢る、ばかりなるを知らしめん爲なり」(哥後二〇四)それから少し先で、彼は再び其書簡の事を述べて「われ書をもて汝等を憂ひしめたれども悔いず、その書の汝等を暫く憂へしめしを見て、前には悔いたれども今は喜ぶ。我が喜ぶは汝等の憂ひしが故にあらず、憂ひて悔い改むるに至りし故なり」(哥後七〇八、九)と云つた。

パウロの涙は亦彼の風格を窺はせる。彼の涙は、彼の言と共に考察する價值がある。それは教理を教へないだらうが、人格を現示するのである。或る教義を立論する足しにはなるまいが、使徒の内心に、永遠なるもの、中心に深くわけ入らせるのである。否、涙は言である、心の言である。涙はすべて聞く耳を有つ者に語るものである。我々がパウロの魂の奥底を知るに至るのは、彼の涙に依つてである。人の心を傷ませるこいふ事を思ふだに、パウロには涙ぐましく感じた。嘗つては平然

として人々を死刑に處した彼は、今や一時的痛苦をでも他に與へる如き行爲を見て眼に涙を湛へる程敏感になつて居た。彼は悪しき生活の恐るべき結果を見るにつけ、人々を救はうと熱心になつてゐたので、もしも彼等にして彼の忠言に耳を傾けないならば、彼はその涙を收むる事は出来なかつた。彼はエペソの長老たちに「三年の間わが夜も晝も休まず涙をもて汝等各を訓戒せし事を憶へよ」(使二〇ノ三一)と云つて居る。

使徒たちのうちで泣いた事があるに記されてゐるのはたゞパウロとペテロばかりである。ペテロは己れの罪に泣き、パウロは他のもの、罪に泣いて居る。彼の涙は神の子の涙に似てゐる。イエスがエルサレムに向つて泣いたやうに、パウロは彼の傳道した市に向つて泣いた。

パウロが心にかけてゐたのは、たゞに彼の改宗者ばかりではなかつた。彼の心配懸念は反抗するものであらうと、邪魔なものであらうと、凡ての人に及んで居つた。ロマの獄舎の孤獨にあつても、それら人々の亡びゆく様を思ひ廻らしては、落つる涙にその頬を濕してゐた。彼は泣かずに書簡を書く事は出来なかつた。ピリピ人にも「そは我しばしば汝等に告げ、今また涙を流して告ぐる如くキリストの十字架に敵して歩む者多ければなり。彼等の終は滅亡なり、己が腹を神になし、己が恥を光榮になし、たゞ地の事のみを念ふ。」(ピリピ三ノ十八)と彼は言つてゐる。